

学部卒業生を対象とする
「大学教養課程教育の内容と改善
に関するアンケート」調査報告書

昭和61年2月

国立大学協会
教養課程に関する特別委員会

まえがき

新制大学の発足以来、すでに30有余年を経過しました。この間、大学教育の重要な二本柱の一つである一般教育では、一般教育の内容とその教育組織及び体系に関して改善の要ありとの声を耳にするようになり、また、一部の大学ではすでに改善の方向で進行するようになってまいりました。

私どもはこの時機に当って、大学教養課程における教育の抜本的見直しの参考資料を得る目的で、アンケート調査を企画しました。従来、この種の調査は各大学当局あるいは大学教員に対して行なわれてきましたが、今回は大学を卒業して各界で実際に活躍している方々を対象とし、この企画について各大学を通して卒業生の皆さんに御協力をお願いした結果、在学中の経験とその後の識見に基づいて忌憚のない回答をかなりの程度収集することができました。

今回のアンケート調査に快く御回答をお寄せ下さった卒業生の皆さんと、仲介の労をとられた各大学当局に対して、この紙面を借りて、心からお礼の言葉を申し上げる次第であります。

このアンケート調査を企画し実施してから、すでに二年以上の年月が経過してしまいましたが、この度ようやく調査結果をいろいろの角度から整理し、客観的に判断できる程度のコメントを付記して、国立大学協会の報告として公刊することに致しました。どうかこの報告を、各大学教養課程の教育内容および制度の改善の一助として、有効に反映させて下さるようお願い申し上げます。

教養課程に関する特別委員会委員長

須 甲 鉄 也

目 次

まえがき

I	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
§ 1	調査の経緯とその背景について	2
§ 2	調査法の概略	6
§ 3	回答者の略歴	8
II	調査結果とコメント・・・・・・・・・・・・・・・・	11
§ 1	一般教育の理念	12
§ 2	総合科目	30
§ 3	専門基礎科目	34
§ 4	外国語教育	44
§ 5	保健体育教育	61
§ 6	一般教育と専門教育	69
付表	各設問に対する回答の学部別統計	74
III	卒業生の提言・・・・・・・・・・・・・・・・	83
§ 1	自由意見の概要	84
§ 2	38年卒業生の提言	85
§ 3	53年卒業生の提言	94
IV	むすびに代えて――教養課程の今後のあり方に関する問題点――	105

I はじめに

§ 1 調査の経緯とその背景について

(1) 経 緯

教養課程における教育の将来を考える資料として、国立大学卒業者を対象とするアンケート調査を行うことになった。各大学における調査研究のなかにも、いくつかの結果が明らかにされているが、今回は可能な限り「大学」には関係のない一般社会にある人々を対象とし、より広範な意見を集めようとしたものである。

「大学」の課題は、大学内にあるものが一番よく知っているはずである。多くの調査や研究が、学生や教職員を対象としてきたのは当然といえる。しかし、“知っているはず”という思い込みもなしとはいえない。新制度発足以来の歳月のなかで、未定着、空洞化をいわれながらも、一般教養教育の実施に多くの努力が注がれてきた。大学の社会的責任がどのように果たされてきたのか、を知ろうとする手掛りのひとつが、今回の試みである。

今回の調査では、横断的とともに経時的な検討も加えるために、昭和38年卒と53年卒の卒業者を調査対象者に選んでいる。設問は、社会人を意識して、詳細にわたることを避けたが、反面、自由な意見の記述に多くを期待することとした。結果として、これらの自由な意見のなかには、大学内の“お家の事情”に拘束されない率直な指摘も多く、今後のための貴重な資料となっている。

当初は、本格的な調査のための予備として、昭和59年前半に本委員会の委員の所属する大学について実施された、いわゆる予備調査であったが、その結果、かなりのデータが得られたと判断されたので、これらの結果をまとめて報告することとなったのである。

今回の調査は、たまたま世上で「教養課程の問題」の論議が起っている時期でもあり、結果の公表を懸念する意見もあったが、これは学外の卒業生による客観的な意見であるという観点から、大学人にとってはむしろ貴重な示唆とみるべきである。大学組織のなかで学生は“子”である。卒業生の声を“子は親の鏡”として活用されたいものである。

(2) 伏在する問題点

教養課程の諸問題は、制度の発足当初から検討が続けられ、改革・改善の努力も進められてきている。しかし、将来に向けての改革・改善の努力も各大学のなかの一部局、一般教養教育担当主体に限られた動きでは限界がある。本来は大学教育全体の課題であり、たしかに「大学像」を見据えて、全学的な目標として進められなくてはならない。そのためには、多くの問題点が伏在している。

「卒業生を対象とする調査」は、直接的には教養課程の問題である。その中には、制度上の問題の他に、教育方法や内容についての問題指摘が含まれていることに留意したい。制度はマクロの問題でもあるが、教育内容は教官の問題意識に大きく係っている。大学における現実的な改革・改善の動向についてみると、制度は型を示してはいるが、それを動かす底流を見極める必要がある。

時代の流れが、もっとも巨大な本流である。大学は、流されるものとしてではなく、流れに棹さしつつ、責任を果たしてゆかねばならない。制度は乗るべき舟を提供してくれるだけのものである。わが国の大学制度は、洋学の時代に始まっている。戦後の新制度も、基本的には旧制度の延長線上にある。洋学の時代は終わったようでありながら、大学自らがどれほど変容し得たのであろうか。社会にある卒業生たちの意見に照らして、大学の実像を知ること、は、教養課程担当部局のみの課題ではなく、大学教育を全体として、専門教育のあり方も含めて自省するための機会となつてほしいものである。

教養課程の改革・改善には多くの問題が伏在していると前に述べたが、今回のアンケート調査を実施するに到つた問題意識の背景として、いくつかのことを説明しておくことにしたい。

そのひとつは、制度として設けられながら、教養課程教育の現状はどうか、ということである。評価は別として、本委員会における調査研究の実状については、(3)以下でも述べるが、わが国の大学におけるこれからの大学教育に関する総合的な視座は何か、を考えねばならない。第二の点は「本来の大学教育」についてのものである。わが国の高等教育全体を考える上で、大学院の拡充が求められている時代に、四年間の大学教育では何をなすべきかを、考えねばならない。知識体系の教育に関して、“すぐ役に立つ”ことを目指すより、既成の知識の吸収に終始することなく、“新たな知識を創造する智慧”を与える教育が試みられてもよい。そのとき、知識を使いこなす人間の自覚を促す教育が、不可欠となるのではないだろうか。

(3) 教養課程教育の変容

制度として一般教養教育が設けられてから30年余になるが、

「教養課程の教育には依然として問題が山積し、その改革・改善には大学教育全体の視座から取り組む必要がある」 (「教養課程教育の実状」、国大協、昭55.11)

というのが「教養課程に関する特別委員会」の見解であった。

昭和40年代後半から50年代前半にかけて大学改革の機運がたかまり、いくつかの大学において教養部組織の改編が実現したが、その実態に関する調査報告の要約では、

「一般教育の進む途は、二つの分極の中に位置するものと思われる。一の極は四年一貫制のもとに専門教育と一般教育の融合を図りつつ、一般教育を大学教育の柱に再置する方向であり、他の極は一般教育の内容をむしろ専門基礎教育に合致させることで、一般教育空洞化の現実的解消を図る方向である」

(「教養課程組織改編に関する調査報告書」、国大協、昭54.5)

として、一般教育のあり方に関して分極化の傾向と、異なる考え方があると述べている。一般教育の改革論議は、教養課程の担当者を主体とするものが多く、その場合は前者の極が当然となる。一般教育の理念に対する積極的な否定はないが、大学構成員のなかにも無関心層は少なくない。各大学のアンケートや、調査資料を通してみられる一般教養教育の実状は、

「種々の領域の入門的あるいは概論的知識を教授し、かつ専門学科のための基礎能力をつけていること」であり、教養課程が実質的には「専門の予科」として機能しているようである。分極の後者の極は、一般教育の理念とは無縁でありながら、現実的には各大学における教養課程教育の動向の核をなしているのではないだろうか。

専門教育と一般教育の相即相補による大学教育の完成をめざし、斬新な理念のもとに発足した新制度であったが、各大学における制度の運用の実情は、理念の具体化とは評価し難いものがある。制度を活かすのは人、大学構成員であり、理念の成否も運用する人々の意識に左右される。制度的には、学生の卒業要件としての最低限124単位のうち48単位を分担し、在籍学生の約半数を抱えながら、学内の運営面では少数派でしかないのが、教養課程担当の教職員団である。大学教育の枠内で、専門教育と一般教育が個別に自己主張をすれば、その帰結は明らかであろう。本委員会の審議経過のなかで、「専門教育は無疵であり聖域である」とすれば、一般教育の進む途に関する現実的な動きは後者の極にある」とされた所以である。

教養課程教育の改革・改善を進めるには、学内の、それも一部の努力では限界があるということであり、大学教育全体の視座に立った現実的な取り組みが必要なのである。

(4)「本来の大学教育」

昭和30年代は戦後新制度のいわば建設期であり、大学教育についても

「大学における専門教育が知識体系の教育であるのに対し、一般教養は価値的判断の能力を養うものである」（「大学における一般教育について」、国大協、昭37.3）

と性格づけている。しかしながら、新学制の導入が多分に他動的であった、という歴史的事情もあり、旧制度の大学と高校・高专が「大学」となった。そのなかで、具体的には学部教育が専門教育であり、学部以前の段階は一般教養教育とされたのである。このため、ともすれば、

「一般教育は専門教育よりも程度が低く、本来の大学教育ではないという先入観」

（「大学における一般教育と教養課程の改善について」、国大協、昭44.11）

が温存される一因となった。

学部・講座制は研究・教育の両面にわたって、わが国の大学における基本組織である。それぞれの専門学部が、専門教育を担当するのは当然であるが、基礎教育を含めた専門教育のみで、大学教育が完成されるとしてよいだろうか。専門教育の場であっても、一般教育の理念を活かすことは可能とする意見もある。制度よりも内容であり、教育するものの意識が重要である。本委員会の見解としても、「一般教育を理念通り実施するためには、まず担当者は専門研究者であると同時に、高い識見と幅広い教養を身につけた教育者であることが要求される」のである。単なる知識の伝達は容易であるが、価値的判断の能力を養う教育は、「程度の低い」ものではありえない。

本来、「大学」は、専門教育の場である。しかし、知識体系の教育のみでよいのか、とい

う反省が一般教養教育の登場を促したのである。一般教育は、既存の大学教育に対する問いかけである。制度的な一般教育の枠内での改善努力のみでは、効果は期待し難いにも拘らず、大学構成員の多くにこの点が強く自覚されることがなかったのも事実であろう。

「学部」の基本的性格は、旧制度と同様である。旧制大学のイメージは「学部」のなかに伝承されている。

「旧制の大学は、明治以降の洋学を重要な使命として、戦後の復興にも大きな役割を果たした。しかし、単なる洋学の時代は終ろうとしている。」

（「教養課程組織改編に関する調査報告書」、国大協、昭54.5）

海外に知識を求め、その導入と伝達を主体とした時代の大学教育は、過去のものである。新しい大学像は、自ら考えねばならない。多くの提言があり、制度の改革も論じられている。しかし、「制度」が大学組織の現実をどれほど動かし得るのかは、戦後新制度における教養課程の運命にも窺えるところである。大学にある人々の意識、意欲に根差す改革でなくてはなるまい。

時代に対応する高度の専門教育の場として、大学院の充実が計られつつある。学部教育の内容も、旧制教育の踏襲のみが求められているわけではない。日本の大学教育を将来に向けてどう進めるかということは、今大学にある人々の課題であり、自ら工夫しなければならないものである。過去の歴史的事情に沿源する「先入観」としてではない、新しい「本来の大学教育」は、一般教養教育と専門教育に共通の課題なのである。

§ 2 調査法の概略

今回のアンケート調査が企画・実施されたのは、昭和58年11月のことである。

調査を実施した大学は、当時の教養課程特別委員会委員の所属する国立13大学であり、調査対象者として各大学各学部ごとに、38年卒業生5名、53年卒業生5名を無作為に、ただし当該大学の現職教官を除外して抽出し、合計660名に調査用紙を送付、協力を依頼した。回答提出の締切昭和59年1月末日までに、返送されてきた回答の総数は368であった。住所変更等により返送された分45を差し引くなら、回答率は $368/615=59.8\%$ である。調査実施大学名および各大学・卒業年次別の回答者数を下表に示す。

	岩手大学	山形大学	埼玉大学	東京大学	東京水産大学	新潟大学	静岡大学	名古屋大学	京都教育大学	山口大学	香川大学	九州大学	熊本大学	その他	合計
昭53年卒	8	11	11	22	4	24	16	23	2	16	6	27	19	1	190
昭38年卒	11	9	12	21	3	21	5	27	5	19	10	19	15	1	178
計	19	20	23	43	7	45	21	50	7	35	16	46	34	2	368

【注】卒業大学名を明記しなかった者1名と、調査大学以外の大学名を記入した者1名を、その他に分類した。

調査結果の概要は、すでに昭和59年6月、「学部卒業生を対象とする『大学教養課程教育の内容と改善に関するアンケート調査』結果の中間報告」として、国立大学協会総会において報告された。この中間報告は、各設問・各選択肢に対する回答数の卒業年次別・人文系－自然系別統計と、それに対する簡単なコメントを含んでいる。

当初、今回の調査は、後の一層大規模な調査のための準備作業として計画された。しかし、このアンケート調査で、卒業生の教養課程教育に対する不満や要望は十分に明らかであると判断されたので、上述の中間報告に、各設問に関する個別意見および教養課程教育全般に対する自由意見を整理して加え、当委員会の調査報告書として公表することとした。回答者が各設問について自由に書き記した意見を、どう整理するかについては、いろいろ意見が別れるところである。そのひとつとして、一般教育の理念や大学教養課程教育の現状に対して、肯定的意見

と批判的な意見とを各設問ごとにそれぞれ要約して紹介し、その論拠を明示するという案がある。しかし、この案では、編集する側の見解があまりにも前面に出すぎる怖れがある。この点を危惧して、今回は卒業生の意見をあまり手を加えずに、可能なかぎりそのままの形で公表することにした。この方が、今回の調査の趣旨にもっともよく合致するであろうと考えられるからである。むろん、最少限の編集はなされているから、かならずしも卒業生の意見のすべてが、文字通りそのままの形で再録されているのではない。

なお、この報告書では、アンケート調査の質問項目はすべて原文のまま ☐ で囲って示した。また人文系・自然系の区分については、教育学部、教養学部を人文系に加え、文理学部は人文系・自然系の別から除外した。各設問の調査結果に対するコメントには、各学部別のデータも加え、その一覧表をⅡの末尾に掲載した。これは、将来、大学教育という統一的視点から、各学部専門教育に一層密着した形で教養課程教育の改善を試みる際の参考に資するためである。しかし、学部によって回答数に大きな差異があるので、あくまでも参考程度に留めていただきたい。

むしろ、各設問および教養課程全般に対してよせられた数多くの卒業生の生の声の方に、傾聴すべき点、今後の改革に資すべき点が多く存するように思われる。

§ 3 回答者の略歴

アンケート調査に際してなされた卒業生の略歴に関する質問事項、およびそれに対する回答の概略は以下のとおりである。

おそれ入りますが、あなたのご略歴を伺いたと思います。該当する欄にご記入ないし、番号に○印をおつけ下されば幸いです。

年 齢 歳

性 別 1. 男 2. 女

大学入学 昭和 年、 大学入学

1. 文学部 2. 教育学部 3. 法学部 4. 経済学部
5. 理学部 6. 医学部 7. 薬学部 8. 工学部
9. 農学部 10. 学芸学部 11. 文理学部 12. 体育学部
13. 学部(1～12以外の場合) 14. 科 類

卒 業 昭和 年、 大学卒業

1. 文学部 2. 教育学部 3. 法学部 4. 経済学部
5. 理学部 6. 医学部 7. 薬学部 8. 工学部
9. 農学部 10. 学芸学部 11. 文理学部 12. 体育学部
13. 学部(1～12以外の場合)

大学院経験

1. なし 2. 有り

②の場合: 大学大学院 研究科

1. 修士課程中退
2. 修士課程修了
3. 博士課程進学

あなたの現在の主な職業について、下記のリストの中からもっとも適切と思われるものを1つだけ選び、その番号に○をおつけ下さい。

	職 業 名	注
1	民間大企業体	主として人を使って仕事をし、自分は事務や作業にばかり従事しない者(ふつうは課長以上、企業主を含む)
2	(資本金が5,000万円をこえるもので、従業員数が300人をこえるもの)	専門的な知識や特殊な技術・能力を必要とするもの
3	の	管理責任をもたず、自ら事務や作業に従事するもの(ふつうは係長以下)

4	民間中・小企業体	管 理 職	上に同じ
5	(資本金が5,000万円以下のも の,または従業員数が300人以下のもの)	専 門 職	"
6		一 般 職	"
7	公 共 企 業 体	管 理 職	"
8	(公社・公園・公庫・ 営団など)	専 門 職	"
9		一 般 職	"
10	公 務 員	管 理 職	"
11	(国家・地方とも)	専 門 職	"
12		一 般 職	"
13	教 員	大学・高専 教員	
14		高 校 教 員	
15		小・中校 教員	
16		その他の教育 関係機関	教育関係の研究所、特殊学校、各種学校、予備校など
17	医 師 ・ 薬 剤 師		開業医、病院勤務の医師を含む (大学教員の場合は - 13へ)
18	自 由 業		芸術家、宗教家、著述家、弁護士、会計士、弁理士、経理士等
19	大 学 院 生		
20	主 婦		主婦で無職のものに限る。
21	無 職		
	その他 (具体的にお書き下さい)		

(ご協力ありがとうございました。)

回答を寄せた卒業生の学部別・職業別内訳

区 分		人 数		職 業 別	53年卒	38年卒	計	
卒 年 別	昭53卒	190 (41)	1	民間大	管理職	1	44	45
	昭38卒	178 (20)	2	企業体	専門職	15	8 (1)	23 (1)
	計	368 (61)	3		一般職	26 (2)	2	28 (2)
学 部 別	文 学 部	20 (7)	4	民間中	管理職	4	5	9
	教育学部	64 (25)	5	・小企	専門職	5 (2)	1 (1)	6 (3)
	法 学 部	18 (2)	6	業体	一般職	3	0	3
	経済学部	25 (1)	7	公共企	管理職	0	5	5
	理 学 部	38 (3)	8	業体	専門職	1	0	1
	医 学 部	31	9		一般職	3	0	3
	薬 学 部	19 (7)	10		管理職	2	9 (1)	11 (1)
	工 学 部	40 (1)	11	公務員	専門職	14 (2)	12 (1)	26 (3)
	農 学 部	47 (4)	12		一般職	24 (2)	5	29 (2)
	学芸学部	7 (2)	13		大・高専	11 (1)	19 (1)	30 (2)
	文理学部	20 (2)	14	教 員	高 校	19 (3)	27 (4)	46 (7)
	体育学部	0	15		小・中校	22 (11)	16 (7)	38 (18)
	そ の 他	38 (6)	16		その他	0	2	2
	大 学 院 経 験	な し	292 (59)	17	医師・薬剤師	17 (2)	16 (1)	33 (3)
		有 り	76 (2)	18	自 由 業	1	3	4
修士中退		3	19	大 学 院 生	4 (1)	0	4 (1)	
修士修了		32	20	主 婦	13 (13)	3 (3)	16 (16)	
博士進学		41 (2)	21	無 職	2 (2)	1	3 (2)	
				未 記 入	3	0	3	
			計		190 (41)	178 (20)	368 (61)	

【注】()内は女子を内数で示す。

II 調査結果とコメント

§ 1 一般教育の理念

設問Ⅰ-A 大学教養課程教育の中で得た最大のものは何であったか。

Ⅰ 今日大学は、専門教育と並んで一般教育を重視し、しかも両者が互いに相補的關係に立つものであることを基本方針として、昭和24年に発足したものです。この場合の一般教育は、「特定の専門に偏る弊害を避け、広く学問における認識方法を教授し、普遍的研究態度を養成し、人間性豊かな社会人の育成を目指す」という理念のもとに行われるものとされています。

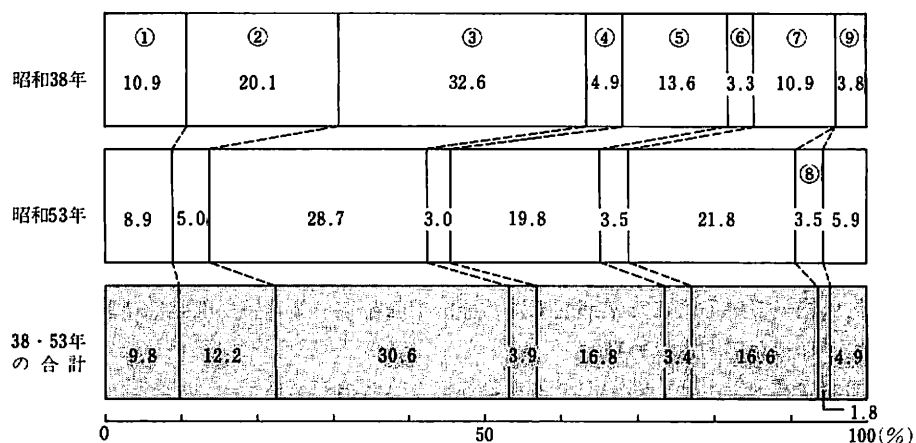
大学において、いわゆる教養教育の中軸をなしているのは、この一般教育であるといえます。

A. そこで、最初にお伺いします。あなたが大学教養課程の教育の中で得られた、最大のものは何であったとお考えでしょうか。下記のうち1つだけに○をおつけ下さい。

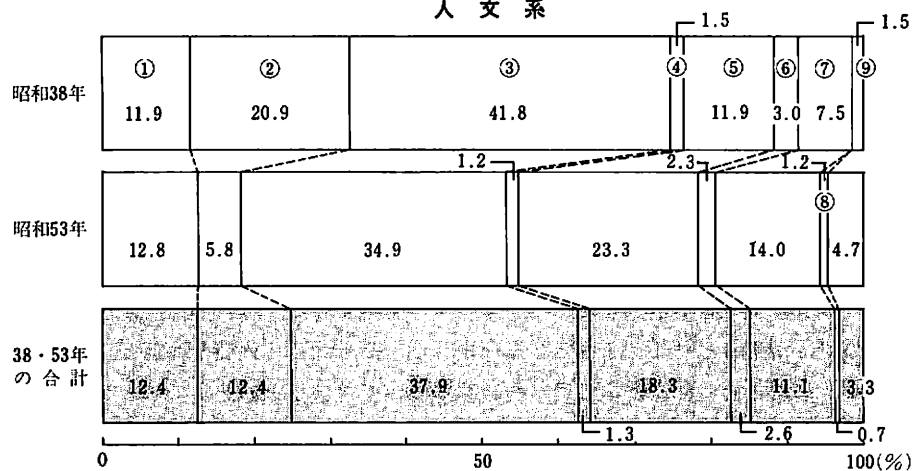
1. 広く学問への取組みかたというべきものを身につけた。
2. 社会人となるための人間性を養った。
3. 学問の入門的・概論的知識を得た。
4. 専門の学修に必要な基礎学力を固めた。
5. 専門以外の分野にも興味を持つようになった。
6. 外国語の力を身につけた。
7. 身についたものはほとんどない。
8. 以上のいずれでもない。
9. その他：自由にお書き下さい。

③「入門的・概念的知識」が31%で最も高く、これはとりわけ38年人文系で高い(42%)。一般教育の理念の線上にある、①「広く学問への取組みかた」、②「社会人となるための人間性」、⑤「専門分野以外への興味」の総和をとれば、38年45%、53年34%と、ほぼ40%に近いが、これに③を加えれば、38年77%、53年62%、全体で69%であり、⑦の17%と対比するなら、ほぼ卒業生は一般教育の理念に即した教育がなされていたと考えているように思われる。

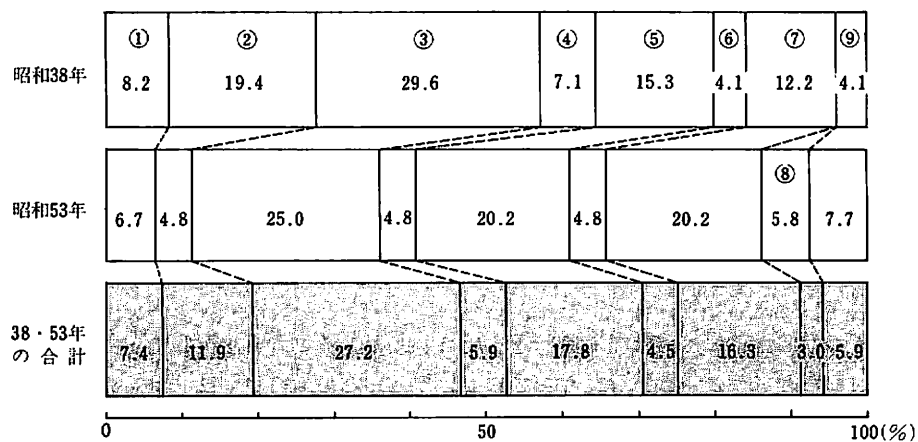
I-A



人文系



自然系



その内訳では、②が38年20%、53年5%と、新・旧の間に極端な差を示している。人文系卒業生と、自然系卒業生の双方に共通した傾向である。これは一般教育が「社会人として必要な教養を身につけさせる」という点では、時代の変化に適応できなかったことを示すのか。

理念の中核に相当する①の「学問への取組みかた」が、10%に過ぎないことは、理念と現実の背離の一端を示す。ただし、①と③とが相補的であるとみれば、38年44%、53年38%、全体として40%であり、一応、その基本線は貫かれているとみることもできる。

⑦の「身についたものはほとんどない」の回答は、全体として17%で、⑤の「専門分野以外への興味」と並んで2位にあるが、38年11%に対し53年22%と、新卒業生とくに自然系卒業生に偏っている。また学部別では、経済学部卒業生23%、医学部卒業生23%、工学部卒業生19%が平均よりも高い。

本設問の回答内容には、新・旧の年代差が目立つものが多い。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

(1)「人間関係の中から、人間的な幅の広さと人生への姿勢を得ることができた。また、学問への取組み方、社会人となるための人間性を得ることができた。」

(2)「身についたものは、あまりなかったように思う。」 (38年教育学部卒)

(3)「私は理学部に入学しましたが、教養部の時、専門基礎科目でない宗教学に興味を持ちました。その宗教学は原始宗教のシャーマニズムの講義でした。教官の情熱がひしひしと伝わり、いつの間にかそのとりこになってしまいました。それから、人間とは何か、人間が考えるとは何かと考えさせられ、哲学の道へも興味が湧いてきました。そしてヘーゲル哲学へと読書が進み、今、若い頃に哲学書を読んだ事が大変良かったと思っております。」

(4)「部活動と寮生活の影響(寄与)も大きかった。」 (38年理学部卒)

(5)「身につけたものはいろいろあるが、大学教養課程の正規の教育の中で得たものはなかった。それとは別な形で教官との接触により、上の①を得たと思う。」

(6)「教科、教官にもよるが、総じてつつこみが甘く、高校に毛のはえた程度でものたりない。教官にも「一般」だから……という意識があるのか、「この学問はこんなにも興味深いのだよ」という気魄が感じられないことが多かった。もちろん専門教科と比較しての話であるが。」

(7)「学問は自由で楽しいものと知った。」

(8)「他の学部、学科の友人達と深く交わる機会を得た。」 (53年理学部卒)

(9)「いくつかの講義には、とても興味をそそられたが、そこから出発して広くあるいは深く学んでいかなかったことが、今になって残念に思う。高校教育までは、単一人物を追求する時間もなく、教師の主観をはさむ余地がなく、画一的な指導要項的思考に落ち着かざるを得な

いが、大学では深く、また研究者の個人的意見が聞け、1つの参考意見として拝聴できおもしろかった。」 (53年薬学部卒)

(10)「高校の教育の補充のようで、あまり実効がなかった。」 (38年文理学部卒)

(11)「高等学校教育の延長でしかなかった。」 (53年農学部卒)

なお、上記(1),(4),(8)のほかに、「他学部他学科(専門の異なる)友人を得た」という意見を述べた者が6名あり、ほかに教養課程で身につけたものとして「体力の向上」(53年工学部卒)を挙げる者、「授業をさぼるくせがついた」(53年医学部卒)と述べる者もある。

**設問Ⅱ－B 一般教育の理念の目ざすものを、
どの時期に何を通じて学んだか。**

B. あなたのご経歴のなかで、このⅡの前文に示されたような、一般教育の理念に基づく内容を、学ぶ契機となったのは主として何を通じてだったのでしょうか。下記から2つまで選んで○をおつけ下さい。

1. 大学以前の高等学校までの教育を通じて。
2. 大学の教養課程教育を通じて。
3. 大学の専門課程教育あるいは大学院の研究教育を通じて。
4. 社会人となってからの仕事上の経験を通じて。
5. 学校や職場においてではなく、自分自身の読書や伝達情報を通じて。
6. 家族、家庭、知友による薫陶を通じて。
7. 未だに学べていない。
8. 以上のいずれでもない。
9. その他：自由にお書き下さい。

回答が比較的各項目へ分散していることは、大学卒業者が教養教育を生涯を通して学ばれるべきものと見なしていることを示すように思われる。②「教養課程教育を通じて」は22%で④「社会人となつての仕事上の経験」と首位に並ぶが、内訳は②④ともに38年に高い。53年に顕著なのは、⑤「自分自身の読書や伝達情報を通じて」の19%で、53年のみについては最高の回答率を示し、38年の10%に倍する変遷を見せる。

他方④「社会人となつてからの仕事上の経験を通じて」の著しい減少(29%から15%へ)が見られるが、これは社会経験の長短によるものと思われる。

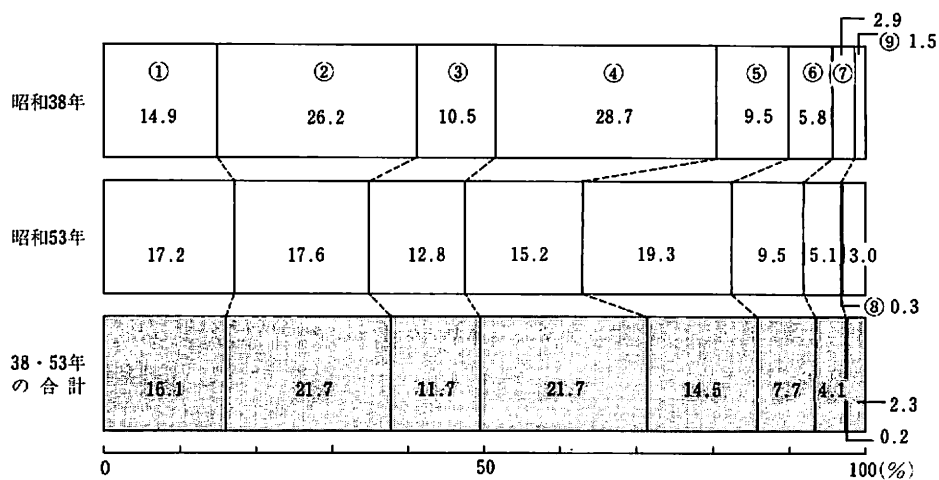
人文系・自然系の間に大きな差は見られない。学部別では②の数値の低いのは経済学部11%、医学部14%、薬学部10%などであり、経済学部と薬学部では①「高校までの教育」が、それぞれ21%、16%で2位を占める。他方、⑤の数値の高いのは法学部29%、理学部19%、医学部20%でそれぞれ2位、経済学部では29%で1位となっている。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

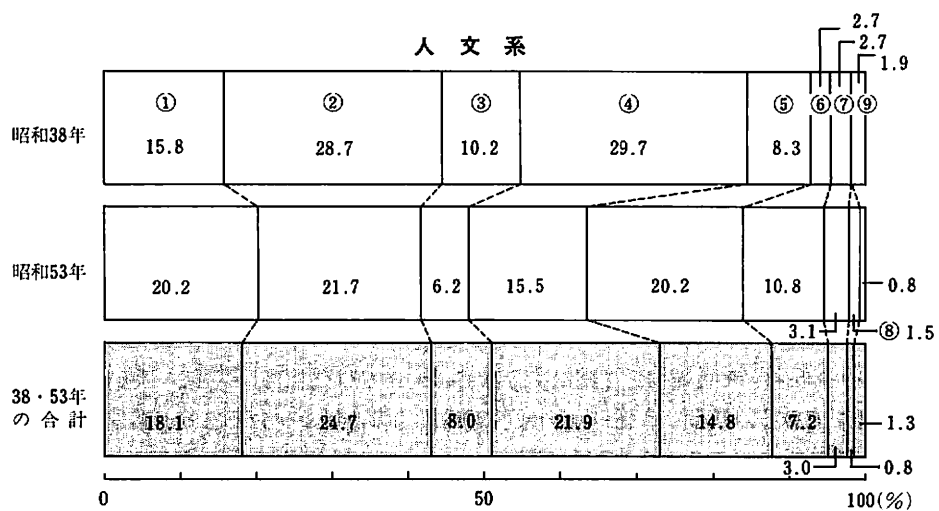
(1)「大学時代の自由な雰囲気での交友、勉強を通じて。」

(2)「特定の専門に偏る弊害を避け……最近になって学際的共同研究を通じてわかった。広く

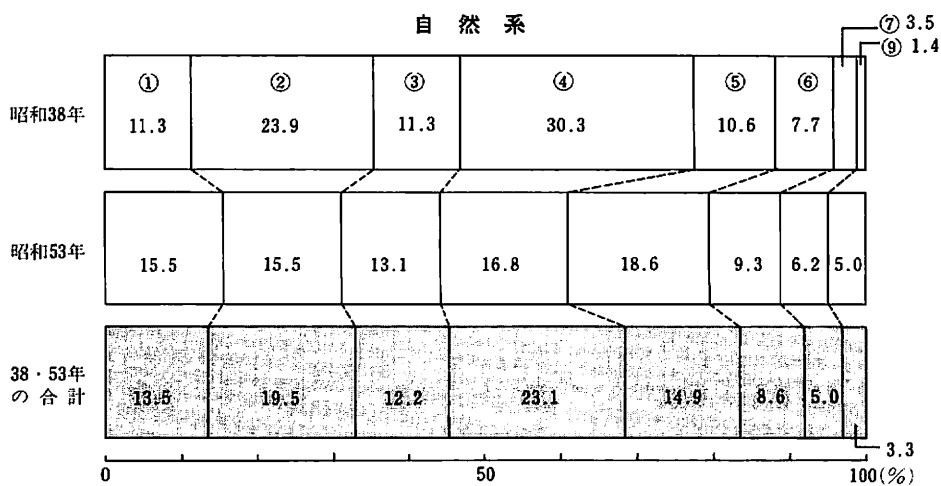
I-B



人 文 系



自 然 系



学問における認識方法を教授し、普遍的学究態度を養成し……専門の研究を通して。人間性豊かな社会人……教養教育。まだ未熟」
(38年理学部卒)

(3)「教養課程では講義を聞いただけで、その意義は理解していなかったのではないかと思います。質問もしなかったし、また質問ができるような授業は少なかった。ノートを取るだけで。」
(38年農学部卒)

(4)「私の場合、専門課程が「教養学部教養学科」という幅広い教育をめざすところでしたから、教養課程と専門課程の厳密な区別がありません。但し、後者の方がずっと学ぶところが大きかったようです。」
(38年教養学部卒)

(5)「大学進学のためと割り切って、がむしゃらに取り組んだ高校時代の受験勉強が、実は一般教養、知識として身につけている。大学一般教養課程の教授と、進学校の高校教師では熱意がちがう。目的が異なるので一概には断ぜられないが、大学の一般教養課程もせめて専門なみの情熱を注ぐべきだ。専門外の学生が混っているからといって手を抜くと、学問的興味は半減し、本来の目的からそれることになる。」

(6)「私の場合、専門課程での卒論研究が先生に私1人という形であったために、人間的なつきあいができ、研究態度を肌で感じることができ、ここで学ぶことが多かった。また、大学在学の間、高校の野球部のコーチをしたことが、自分にとって指導性等を身につけるのに非常に役立った。」
(53年理学部卒)

(7)「いわゆる大学を高等教育機関とするならばやはり専門教育がメインであり、一般教育はそのサブである。そういう意味の一般教育は最初の2年で充分であり、多すぎるぐらいだ。ただ生涯教育で考えるような要素が前文ではみられる。前提が立派すぎるのではないかな？職業を前提におく高等教育と、職業を前提におかない高等教育とでは内容（一般、専門）が違おうであろう。」
(53年農学部卒)

以上のほかに、「学生同士の学習会や自主ゼミその他」(53年教育学部卒)、「スポーツクラブでの友人との交流から」(53年医学部卒)、「学生時代のアルバイト(家庭教師、肉体労働)の必要性から」(53年歯学部卒)という意見もみられる。

設問Ⅱ－C 一般教育科目単位の一部を他の教育科目で振替えることについて

C. 大学設置基準では、昭和46年から、一般教育科目単位の殆どまでを、外国語科目あるいは専門科目の単位で代替してよいことになりました。この振替えを許す大学がしだいに多くなっています。このことをどのようにお考えですか。下記のうち1つだけに○をおつけ下さい。

1. すくなくとも国立大学では振替えを行わず、一般教育の充実を図るべきである。
2. 振替えは、専門教育カリキュラムの過密がどうしても避けられない特定の学部、学科(たとえば工学部の一部)に局限すべきである。
3. 振替えを外国語科目だけに限るなら、賛成である。
4. 全単位の殆ど以内ならば、大学の現状からやむを得ないと思う。
5. 振替え可能の枠をむしろ拡大して、大学や学部の特色を伸ばす方がよい。
6. 以上のいずれともいい難い。
7. その他：自由にお書き下さい。

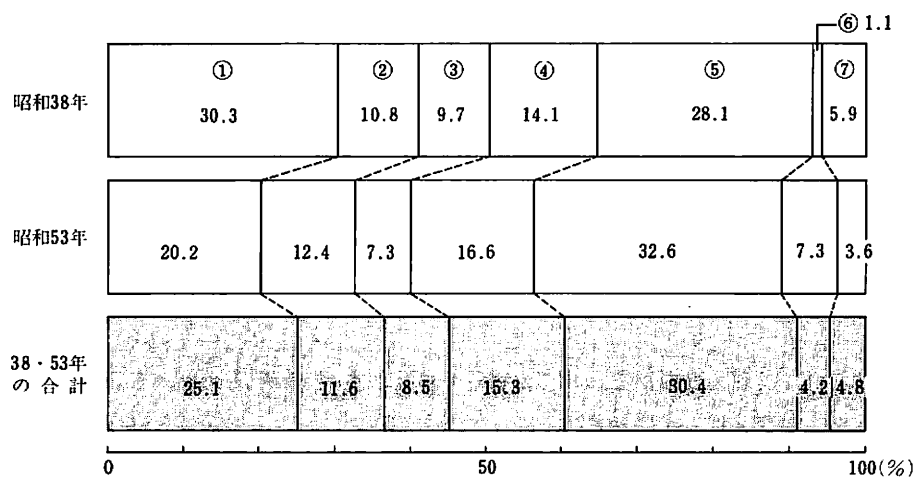
全体としての1位は、⑤「振替枠をさらに拡大の方向」(30%)であり、これと正反対の①「振替えに反対」は⑤よりすこし低い数値(25%)を示す。「振替えに反対」は38年自然系でとくに高い(40%)。しかし、53年自然系では①「振替えに反対」23%に対し、⑤「拡大の方向」35%と逆転している。人文系では、⑤「拡大の方向」が38年(31%)、53年(40%)ともに1位であり、①「振替えに反対」はそれぞれ22%、17%に止まる。

一般教育批判ないし縮小論は、一部の予想に反して、むしろ人文系の側に高い。また、両系とも、新卒業生のほうが、より批判的な立場をとっている。

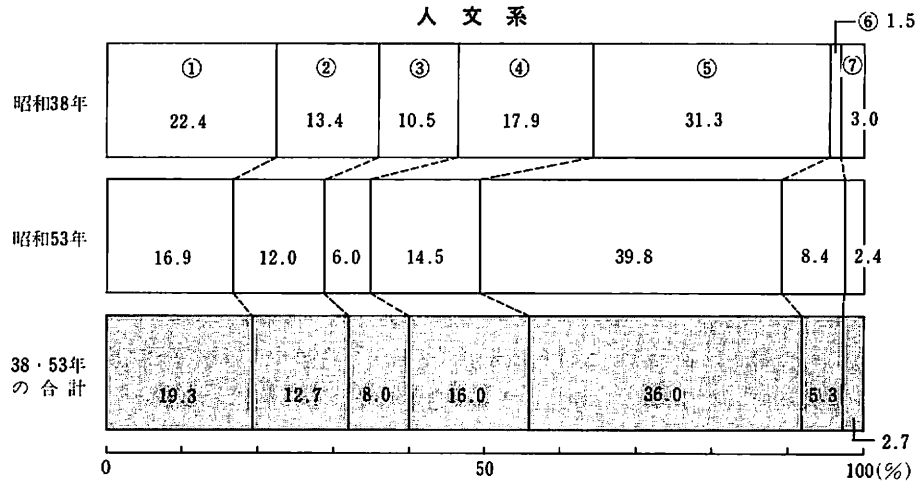
学部別に見るなら、⑤は文学部43%、教育学部39%、経済学部39%、文理学部56%、その他40%で1位、法学部では21%、薬学部では24%で、④の「全単位の殆ど以内ならば、大学の現状からやむを得ないと思う。」のそれぞれ27%、30%について2位である。これらの学部では④、⑤の振替え賛成派は、法学部の47%から文理学部の67%まで達する。他方、理学部、医学部、工学部、農学部では、①はいずれも30%以上、ほぼ35%前後で1位である。

しかし、この結果はかならずしも人文系の学部卒業生の側に一般教育軽視の傾向が強い、ということを示すものではないであろう。というのは、理工系の学部ほど、人文・社会系の学部には一般教育と専門教育との対立はみられないからであり、人文・社会系学部の卒業生にとっては専門教育そのものが一般教育的性格をもつ、とも考えられるからである。

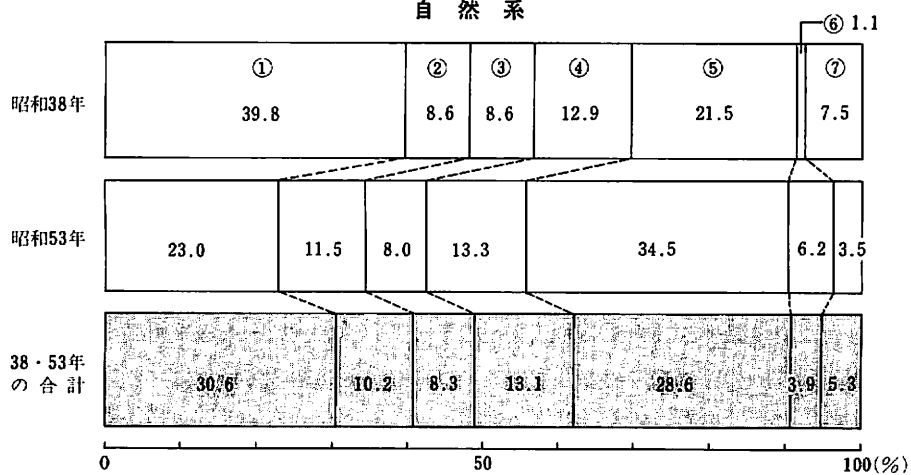
I-C



人文系



自然系



この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

- (1)「専門が細分化されている為、もっと専門の周辺の学際的なものを学ぶのが良い。その為には残念ながら、いわゆる一般教育はさけられないだろう。」 (38年経済学部卒)
- (2)「本来なら①が望ましいが、現実には教養科目（特に理工系学部学科における文系科目）は、単位を取るために、義務的に履修しているように思われる。従って、教育理念から離れている？」 (38年理学部卒)
- (3)「医学部の場合、わずかでも純学問的雰囲気を感じられたのは、教養の生物学、化学、法学、経済学、心理学などの一般教養科目であり、専門（医学）の教育はぼう大にすぎ、自由な発想や思考の芽をつみとる気がした。」 (38年医学部卒)
- (4)「社会人としての基礎を学ぶ期間だと考えます。一般的に企業での教育は専門的になりますので、大学での一般教養を重視しています。」 (38年工学部卒)
- (5)「学生の専門教育を深く追求すれば、自然に関連した分野を見る必要がでてくるので、大学によっては杓子定規に考える必要はないだろう。」
- (6)「大学の専門校化を阻むには、一般教養科目を重視すべきであると思います。」 (38年教養学部卒)
- (7)「総合大学では、他学部の専門課程でも受講できるようにすれば、一般教育などというカリキュラムは不要になるように思う。」
- (8)「その大学及び学部の特色を出すべく、色々の形態があつてよいと思う。むしろ国立大学で一律に決めるべきでないと思う。しかし、なるべく一般教育の充実をはかった方がよい。」 (53年法学部卒)
- (9)「専門分野の一部を教養に下ろしたらいいのではないか。教養科目は専門にあげない方がよい。」 (53年医学部卒)
- (10)「高校を卒業し、大学へ進学する場合、最も学びたいものは専門科目であり、3年、4年生では、むしろ就職あるいは大学院への進学を考え、教養科目の修得と専門科目修得の2コースに分けてはどうか。」
- (11)「国立大学に入学してくる学生は、入った学部に応じた職業につくとは限らないから、広く教養を深めるべきだと思う。高校では、広い教養を身につけるような教育は行われていないから。」 (53年理学部卒)

以上のほかに、「一般教育の内容を軽減しない条件で」（５３年文学部卒）単位の振替えに賛成。外国語科目への単位の振替えについては、「一般教育のうちいくつかのテキストに、外国語のものを採用するのが賢策」（３８年教育学部卒）、「賛成。なお、その際、外国語の授業を「読本」重視から、実用外国語教育に重点をおく必要あり」（５３年文理学部卒）といった意見が見られる。

設問Ⅱ－D 「大学における一般教育不要」論 の論拠に対する賛否

D. 大学教育の中に、一般教育をとりたてて設定しなくてもよいという意見が、一部にあります。下記の各項はその論拠を集めたものです。その中に、あなたが同意されるものがあれば3つまで○を、強く不同意のものがあれば3つまで×を、おつけ下さい。

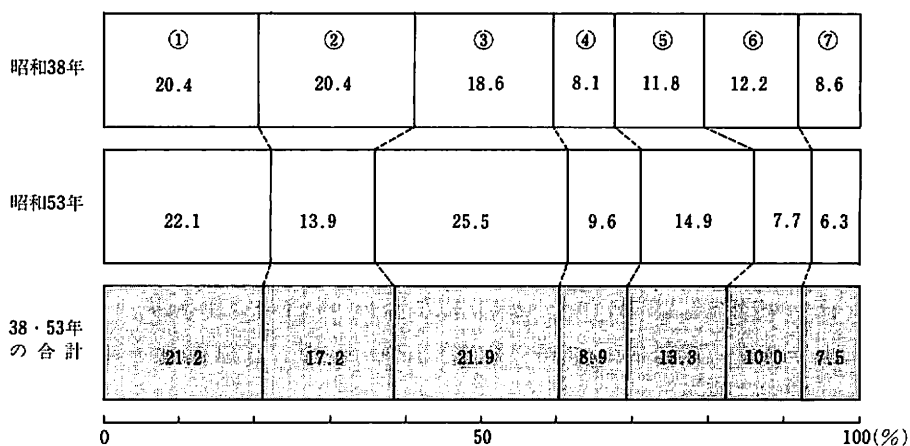
1. 一般教育と専門教育は、本来区別がつけられないものである。
2. 一般教育の理念として謳われている内容は、むしろ専門教育を通じて身につけることができる。
3. 一般教育の理念と現実の背離はすでに抜き難く、一般教育は空洞化するばかりである。
4. 現代は教養に関する情報の伝達機関が発達しており、大学で一般教育を施さなくても足りる。
5. 現代の大学では、専門教育として必要な内容があまりに多く、一般教育を容れる余地がない。
6. 一般教育は実質的に高校で行われており、それで十分である。
7. その他：自由にお書き下さい。

×の総数555と○の総数420の差から、一般教育不要論が全体としては支持されていないことがわかる。とくに、④「情報伝達の発達により、大学での一般教育不要」と⑥「一般教育は高校で十分である。」に対する○の合計(19%)と×の合計(57%)の大きな差は、大学での一般教育の必要性を示す。とくにこの差は人文系(19%対60%)よりも、自然系(12%対58%)に大きい。

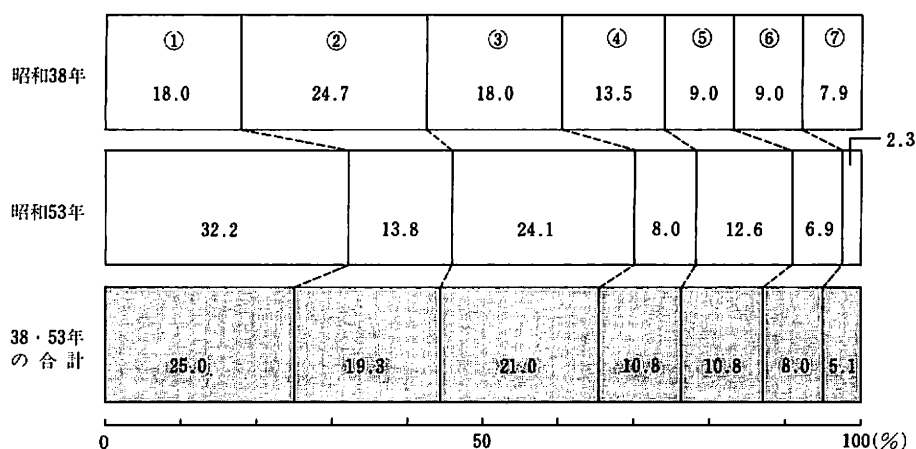
しかし、③「理念と現実の背離はすでに抜き難い」の○22%および①「一般教育・専門教育は本来区別し難い」の○21%は、ともに同項目への×の数値を上回っている。とくに年度別に見るなら、③に対する○の増加と×の減少は、38年から53年にかけていわゆる「一般教育の空洞化」が着実に進行していることを示している。また、①と②「一般教育の内容は、むしろ専門教育を通じて身につけることができる」に対する○の合計(38%)と×の合計(18%)と対比させてみるなら、専門教育との関係では、大学における一般教育の独自性や必要性は、あまり回答者には認識されていないようである。とくにこの傾向は人文系(44%対16%)に強い。

全分野にわたって×が○を大幅に上回っている④「情報伝達の発達により大学での一般教育不要」および⑥「一般教育は高校で十分である」について、前者④への×が38年31%から

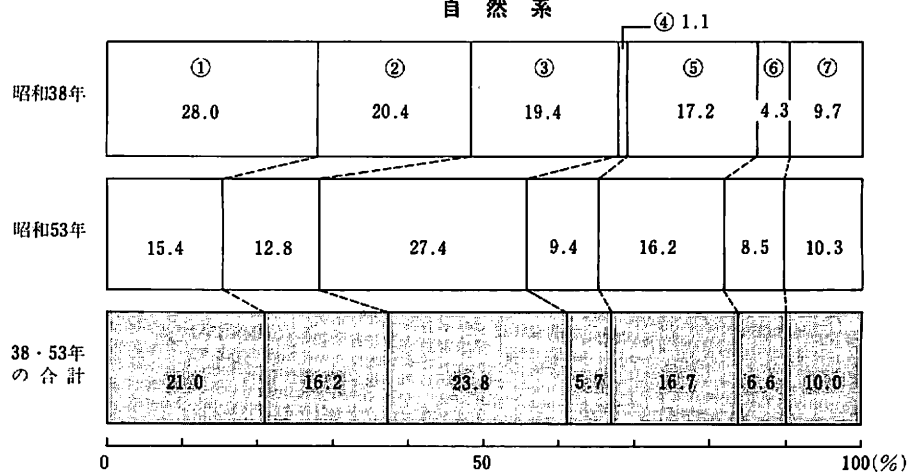
I-D(o)



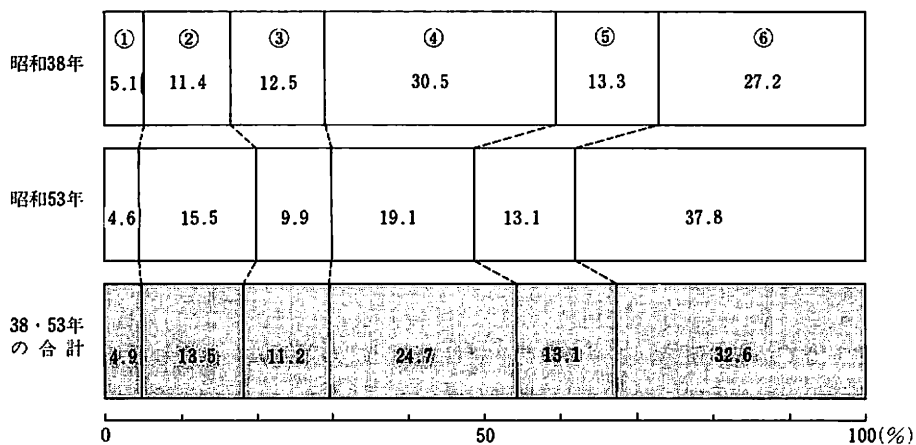
人 文 系



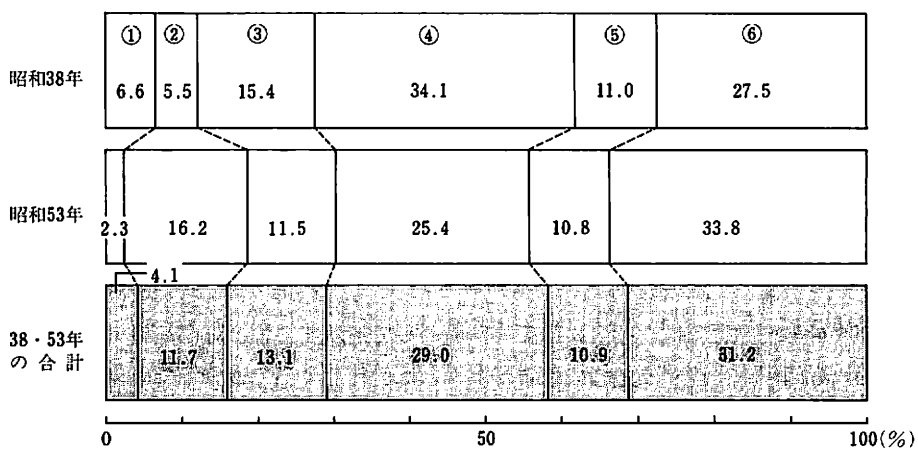
自 然 系



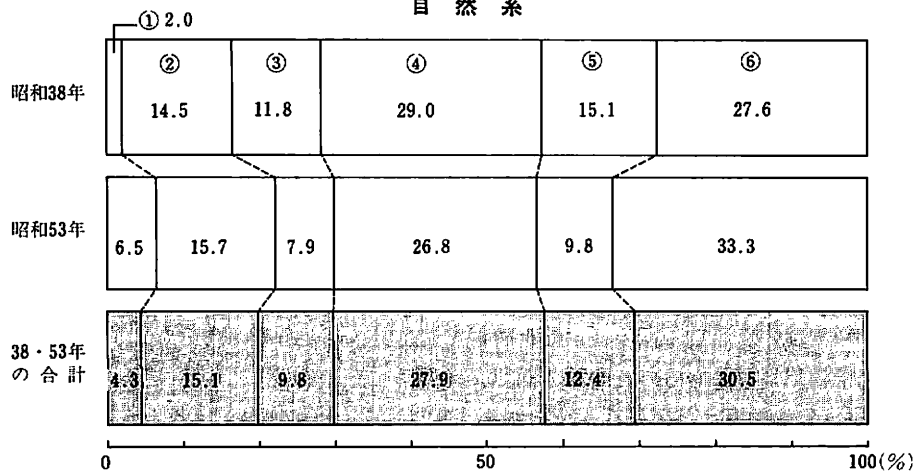
Ⅰ-D(x)



人 文 系



自 然 系



53年19%へと減少していること、および後者⑥への×が38年27%から53年38%へと増加していること、にはそれなりの理由があると考えられる。

学部別では、文学部では①と②、教育学部では①、法学部では①と③、経済学部では③、理学部と医学部では④、薬学部と工学部では⑥、農学部では①が、それぞれ一般教育不要論の主要な論拠とされている。

この設問に関して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

(1)「大学を出てからの研修、勉強で専門教育はもっと進んだものを得られるが、すくなくとも大学の教養課程時代では、一般教育は切りすててはならない。(大学院での研修の機会があるのだから。)」

(2)「各専門分野において、予備知識なり教養としての一般教育は必要であるか。飽くまでも、その専門分野と密接な関連をもったやり方で導入すべき教育が理想であると思う。」

(38年文学部卒)

(3)「高校教育にもっと自由な学問への導入が加味されれば、今の一般教育をとりたてて役立てなくてもよいが、現状ではやはり大学教育に一般教育は不可欠であろう。」

(4)「もっと一般教育の充実を図ることが必要だと思われる。専門馬鹿といわれるような、狭い分野にしか知識をもたない偏った人間をつくらないために。」

(38年教育学部卒)

(5)「2年半の専門課程では、社会に出て専門職として通用する程、専門知識の習得は難しい。徹底的に専門領域に達する勉強の仕方がわかれば、社会に出て他分野でも自分の努力で独学が出来る。一方、教養課程の学問は高校教育の延長にあり、大学で教育を受けなくても独学で(努力すれば)習得出来るものとする。」

(38年経済学部卒)

(6)「ものの考えをしっかりと持つには、哲学が非常に重要である。哲学を学ぶ適齢期は、高校高学年から大学にかけての時期だと考えている。現在の大学入試制度が改善されない限り高校高学年は無理であるから、大学教養課程の初期に哲学への道の端緒を設定しなければ、学卒も歌うことを忘れたカナリヤになってしまうだろう。」

(7)「真に専門教育を重要と考えるのであれば、一般教育の重要性は言うまでもない。」

(8)「高校では文科系、理科系に分れた教育が行われており、大学低学年で一般教育を行うことは、それなりに意義がある。」

(9)「大学教育全体を通じ、真の「一般」教育を拡充すべきである。今日の大学の動向は、大学を専門学校化しつつあるのではないか。」

(10)「入試、教養教育は必須科目を設定する。専門科目に教養課程が続く、あるいは単に高校レベルまで下げる必要がないと思う。」

- (11)「将来専門とする分野以外(特に理科系は人文系分野)を、一般教育としてやるべき。偏らない思考をするために、是非必要と思う。」
- (12)「現在における一般教育とは何か。昭和24年の発足当時のものと、同じではないように、思われます。」
(38年理学部卒)
- (13)「高校のみで、必ずしも最終的な専門分野を決定できるものではない。一般教育を受けつつ、そのなかで、将来の進路が決定できれば理想的(以前の東大式の教養学部制に同意する)。過密が避けられなければ、修業年限を延長すればよい。」
- (14)「一般教育の内容を高めるための、教授スタッフの充実、設備の拡充を、まず第1に行うべきである。現実のレベルに合わせて、一般教育の位置づけを低めることは、大学が本来社会的に担う責任を放棄することになりかねない。」
- (15)「勿論、一般教育との関連で専門教育のあり方も、十分検討されなければなりません。医学教育は、特殊な面が多いので、一般化できないが。」
(38年医学部卒)
- (16)「高校生にとって、高校教育が大学受験のためのものになっている現状では、大学入学後における一般教育の充実こそ、真に真理と学問に対する正しい探求心と知性を養うものであると確信する。」
(38年文理学部卒)
- (17)「自分の知る範囲では、専門教育を重視した体制では単能的人間は出来ても、哲学的な思考の出来る人間は養成されていない、と感じております。」
- (18)「クイズ番組に強く、女の子のようにおしゃべりばかりの学生、卒業生を見るにつけ、なぜ大学の一般教育(一般教養)を通じ、より高遠な人間形成に努めなかったのかと問いたい気持ちになる。」
- (19)「理科系の学生に対する文科系の一般教養の先生に、偏見(理科系学生にはあまり必要でない。)がなければよいが。もし少しでもあれば、授業は空洞化する。勿論この反対もあろう。」
- (20)「私達の頃の一般教育は、それなりに意義があったと思います。一生涯読書をしていくという、自分を深め高めていく姿勢のようなものを、この教養(一般)で学べたらと願います。(今の大学で)」
(38年教養学部卒)
- (21)「学部によって異なるため一概にいけないが、文学部での経験によれば専門教育といっても、枝葉をつついたようなものばかりで、体系的な教育はされなかった。ここでいう一般教育は、専門をやる上での体系的なバックグラウンドをつくることではないかと思う。現状では、一般教育ではバクゼンとしすぎ、専門教育では末節ばかりである点が問題だと思う。」
(53年文学部卒)
- (22)「一般教育はあった方がよい。高校までの学習は試験のためだが、大学では自分の興味あるものを学習できる。大学の先生方は、1つのものを専門に研究しているため、高校の先生

から学ぶのとは違った講義がきける。大学の講義をきいて、始めて興味をもったもの(私は哲学)があった。自分の前に、また違った方向が見えてきた感じがした。」

(23)「一般教育は必要です。しかしあまりにも浅く広くする必要は感じません。もっともっと大学や学生の個性を尊重すべきだと思います。」 (53年教育学部卒)

(24)「大学は専門学校ではない。一般教育を通じ人格、思想形成がなされるべきで絶対に必要である。一見無駄と思われる一般教育が、実は社会に出て必要なものであり、大学の時しかこういう事は学べないと思われる。専門知識は社会に出て、十分身につけられるものである。」 (53年法学部卒)

(25)「このDの間では前提が問題だと思う。まず学生の側であるが、学ぶことをきらい、できれば自由な時間がほしいという前提での意見が多いのではないか。その意見は除くべきだと考える。次に教師の側だが、一般教養の授業にはあまりに教科書を教える者が多すぎ、中には棒読みの者もいる。これでは、一般教養はいらないとの声が出て、当然。特に一般教養では生徒も頭は白紙に近いので、教師は生徒に学問を売るセールスマンの気持ちでのぞみ、自分の学問領域に生徒の興味をおこさせ、ひきずりこむという積極的な授業があれば、このような設問はいらないのではないか。」 (53年理学部卒)

(26)「一般教育は不要である。語学と専門基礎科目のみで十分である。」 (53年医学部卒)

(27)「単に単位取りに終わっている現状では、空洞化と言われてしまうが、まじめに出席した講義はまだ印象に残っているぐらい面白いものであった。一般教養は、結局は自分で身につけてゆくしかないが、興味ある内容を、深く勉強できる機会として大変有意義と思う。」 (53年工学部卒)

(28)「専門教育によって受けた専門知識を使う人間として、いわゆる知識人として、必要なものを一般教育で吸収すべきである。一見ムダであるが、それが全人格的なものの基礎となるであろう。単に合理的に考えるなら、そのへんの職業訓練校や専門学校で十分であろう。「学問の府」としては、ムダも必要なのではないか？」

(29)「一般教育は大学生の教養として、専門教育、実社会に直接関係なくとも必要だ。」 (53年農学部卒)

(30)「大学での一般教育で取り上げられる内容が、私の考える一般的なものの以上に高度であり、人間性豊かな社会人となるために必要以上の内容が、含まれていたような気がする。特に数学についてその思いが強い。」 (53年水産学部卒)

以上のほかに、「一般教育は、いくらあっても充分という事はない。問題は受講する学生の態

度である。」(38年薬学部卒)、「ただし、授業を通じて、先生方と討論ができるようであればと感じる。」(38年農学部卒)、「ただし、時間的制限の為に入門的、概論的にとどまるのは仕方ない。」(53年歯学部卒)、「一般教育は本来は必要なものであるが、一般、専門を通じて内容の希薄化や重複があるため、時間的な余裕がなくなっていると思う。この傾向を修正せずして、一般教育を除外することは、大学の本来の目的を失わせるものと思う。教養課程を廃止すれば専門学校と同じ。」(38年歯学部卒)といった意見がみられる。

総体として、一般教育不要論の主要な論拠を提示したこの設問には、それとは対照的に一般教育擁護論が多くの回答者から寄せられており、きわめて印象的である。

§ 2 総合科目

設問Ⅱ 総合科目を組み入れた一般教育体系

Ⅱ 一般教育の改善の一環として、従来の単一科目の一部を、人文・社会・自然の分野に関わらない、「総合科目」（たとえば、国際経済協力、エネルギー論、海の科学など）という授業形態に代えることが、多くの大学で試みられています。

この総合科目は、多数の教官の協力と連繋によって、一般教育の形態としてもっともふさわしいものとなっているという、高い評価のある反面、単一学科目の持つ訓練的要素を欠きがちであるとか、また専門教育科目の侵蝕による一般教育の縮小と偏りの補綴にすぎないなどの、批判もないわけではありません。

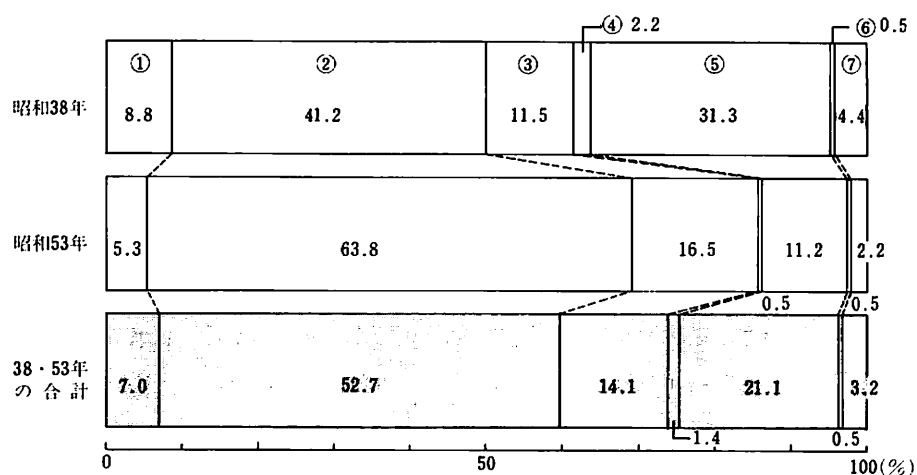
このような総合科目を考慮に入れた一般教育体系として、あなたは下記のいずれが望ましいとお考えですか。1つだけ選んで○をおつけ下さい。

1. 単一科目はできるだけ総合科目に変更する。
2. 単一科目と総合科目を並立させ、学生に自由に選択させる。
3. 総合科目は一般教育のごく一部分にとどめるべきである。
4. 従来の単一学科目方式を崩してはならない。
5. 総合科目の体験がないので、よくわからない。
6. 以上のいずれでもない。
7. その他：自由にお書き下さい。

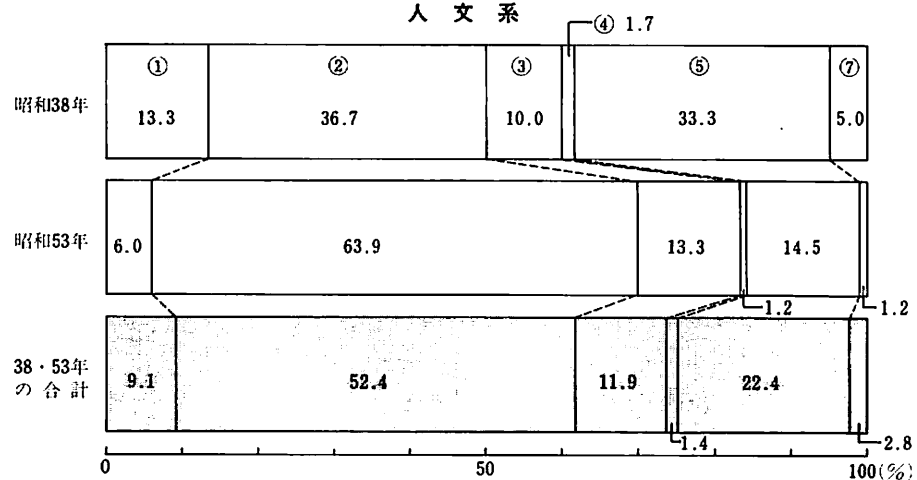
すべての分野にわたって、②の「個別科目・総合科目の並立」が圧倒的的支持を得ており、設問の設定にやや適切を欠いた点があったかと思われる。それにしても、年度別に見るなら、②の著しい増加とともに、⑤「総合科目の経験がない」の極端な減少は、総合科目が単一科目と並ぶ一般教育科目のひとつの柱として、すっかり定着したことを物語っている。他方、①「単一科目はできるだけ総合科目にする」の減少と、③「総合科目は一般教育のごく一部にとどめるべきである」の増加は、回答者が総合科目に対して過度の期待をいだいてはいないことを示す。

学部別では、まず第1に⑤「総合科目の経験がない」と答えた回答者は、農学部35%、医学部29%で多く、反対に理学部では5%、法学部では11%でその受講率は高い。②に対して高い数値を示したのは法学部67%、理学部64%であるが、理学部では③に対しても18%で、これは工学部の27%に次ぐ。①には、文理学部の20%、経済学部の15%が高い数値

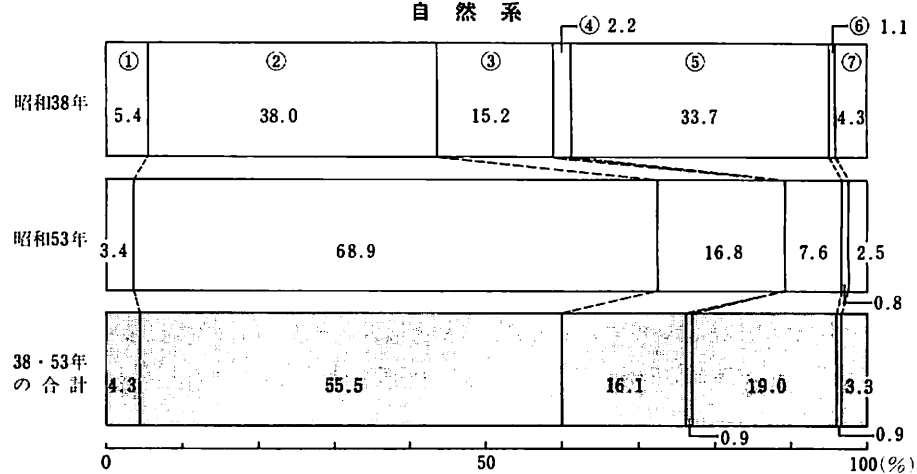
II



人 文 系



自 然 系



を示している。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

- (1)「総合科目のようなものは、改良または充実させて、広く行えるような努力をすべきではないか。」 (38年教育学部卒)
- (2)「単一科目のうち、基本的な科目は従来どおり履習させることが妥当と思うが、一部の科目は学生の選択により、総合科目への振替をみとめてもよいと思う。」 (38年法学部卒)
- (3)「内容はよくわからないが、実用的テーマであり、所謂受験科目でない点、人生の幅を拡げてくれるように思う。」 (38年経済学部卒)
- (4)「理系の学生には文系の総合科目を、文系の学生には理系の総合科目をというのが理想と考えている。又、別の観点から見ると、総合科目は多数の教官が携わるので、開講前に充分討論して思想統一しておかなければ、総合科目に名をかりた安易なこま切れ講義になってしまう恐れが秘められている。理系・文系を問わずその系の総合科目を、と考える場合には専門課程の後期に設定しなければ、境界領域の問題は理解できないだろう。」
- (5)「総合科目は問題意識を喚起し、将来の探究テーマを考えさせるために大事である。と同時に、興味をはっきりしている時のために単一科目が必要。」 (38年理学部卒)
- (6)「ともかく選択の可能性が大きければ大きいほどよいように思う。単一科目→総合科目のステップで、前者の不合格者は、後者を履修できないことにしたらどうか。」
- (7)「“総合”が理想的に実現した場合は良いが、内容的にバランスを欠いた場合に問題が発生しないか。また“評論家”養成所にならないか危惧。」 (38年医学部卒)
- (8)「形式を変えても、本質的な解決にはならない。変更することはかえって本質を見失い、表層的な変更にすぎない。」 (38年薬学部卒)
- (9)「学問や研究の発展は、時代や社会の要求という側面があるが、大学の一般教育はあくまで基礎的な科目の修得を第一義とすべきだと思う。」 (38年文理学部卒)
- (10)「自由選択がよいと思いますが、その際、指導教官（あるいはカウンセラー）と必ず相談し、自分の学修計画とその科目選択の意義について、よく考えて、指導教官の承認を得ることが必要だと考えます。」
- (11)「講義に出ない学生が多い現状をじっくり見つめ、学生が1人でも多く受講できるような

内容が必要です。形式ではなく中味です。その意味において、総合科目はとてもいいと思います。」
(53年教育学部卒)

(12)「一般教育の方式を変えても、学生の興味をそそらないものであっては、今までと変わらないと思う。特に医、理、工学部の場合は、時間的ゆとりをもって行った方が良い。」
(53年医学部卒)

(13)「総合科目で出来るものはまとめた方が良からうが、単一科目でなければならぬものもあるであろう故、一概には言えぬ。」
(53年農学部卒)

(14)「単一科目と総合科目との並立が良い。ただし、単一科目はもう少し減少しても良いと思う。」
(53年人文学部卒)

以上のほかに、「総合科目を是非受講したかった。」(53年理学部卒)「教官間の連けいが充分になされていない」(53年水産学部卒)という感想がある。

§ 3 専門基礎科目

設問Ⅳ－A 理系の自然分野一般教育の実質をどのように意識・評価していたか。

Ⅳ 理科系学部では専門教育・一般教育を通じて、カリキュラムが密であるのが通例で、学生の学習負担も大きいといわれています。その中で、教養課程での自然分野の一般教育科目の多くは、「専門教育の一環として、専門知識を受け入れ、原理を理解するのに必要な知的訓練を行うための科目－専門基礎科目」に、実質上相当するという一般的認識があるかと思われます。

A. あなたが履修した自然分野一般教育科目についての、あなたの認識と評価はいかがでしたか。下記のうち1つだけに○をおつけ下さい。

1. 専門の基礎と考えており、また、その意味で役立った。
2. 専門の基礎と考えていたが、結果的にはさほどその役に立たなかった。
3. 専門の基礎と一般教育の両面をもっていると考えていたし、その点で満足であった。
4. 専門の基礎と一般教育の両面をもっていると考えていたが、専門基礎の色彩が濃すぎた。
5. 専門とは直接関わらない一般教育科目と考えており、その点で満足であった。
6. 専門とは直接関わらない一般教育科目と考えていたが、専門基礎に偏って不満であった。
7. 以上のいずれともいい難い。
8. その他：自由にお書き下さい。

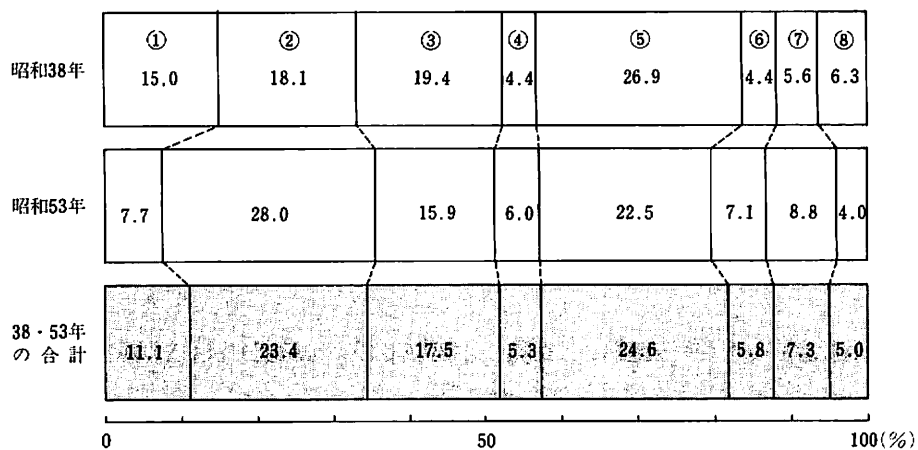
この設問の回答は、全体よりも自然系の方の回答のほうが意味があると思われる。

「専門の基礎と意識していた」①＋②が、38年38%、53年51%と、基礎科目的認識への傾斜を深めている。それにもかかわらず、①「その意味で役に立った」と②「その意味では役に立たなかった」の比率は、38年18:20、53年9:43と大差を示す。

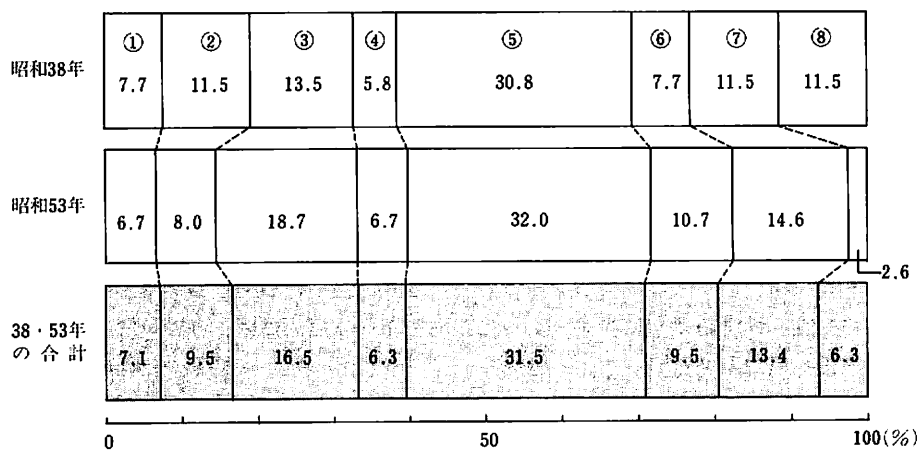
一方において、「専門に関わらない一般教育と意識していた」⑤＋⑥は24%であり、38年29%から53年19%へ減少している。

本設問については、自然系の新・旧の意識の差が、かなり明らかである。選択肢①、③、⑤

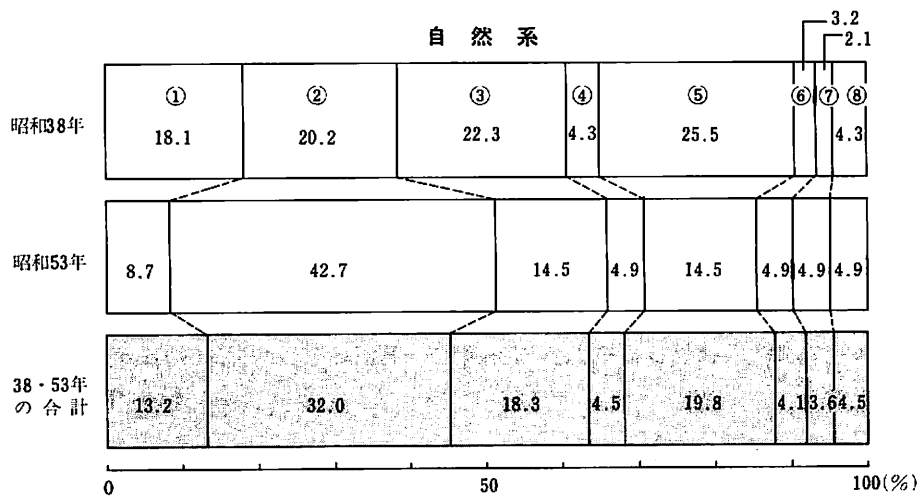
III-A



人 文 系



自 然 系



は、意識は異なりつつも、それぞれに学科内容に満足している場合に相当し、①+③+⑤はいわば「満足度」を表すともいえる。この数値は全体で51%であるが、38年66%に対し、53年は38%である。

学部別にみれば、②に対して、とくに医学部40%、薬学部50%、工学部33%、農学部33%に高い数値がみられる。また文学部が④「専門基礎の色彩が強すぎた」+⑥「専門基礎に偏って不満であった」の合計に25%を示すのは、ある意味で当然としても、理学部のそれが22%で、①+③の合計44%に比較するなら、理学部卒業者3人のうち1人は、自然分野一般教育があまりに基礎専門的であることに、強い不満をもっていることが明らかとなる。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

- (1)「自然分野の一般教育科目は、大学入試のために得た内容とあまり変わらない場合があったように思う。文科系の者としての経験からすると、科学の歩み、科学的認識の歩みといったようなことを学べたらよかったと思う。」
- (2)「自然分野一般教育科目は、専門の基礎、一般教育の両面を持っていたように思われたので、自分としては満足だった。」
(38年教育学部卒)
- (3)「残念ながら水準と言ひ、内容と言ひ、既修の事項のくり返しで、かつ無気力で魅力の無い講義であった為、時間の無駄という感じだった。自分を不動の中心としたテキストや教材選びでなく、受講者の到達点、関心をもっとくみ取り、何事にも対処してほしかった。」
- (4)「高校の生物、地学のように受験用でなく、あるテーマについて、かなり詳しく教わったので今でもよく内容を覚えている。」
(38年経済学部卒)
- (5)「専門の基礎と考えていたが、当時は十分に消化できなかった。身についたのは大分後であった。」
(38年理学部卒)
- (6)「専門の基礎と一般教育の両面を持っていると考えていたが、いずれも、内容の突込みが足らず、不満足であった。」
(38年医学部卒)
- (7)「専門の基礎と、一般教育の両面を持っていると考えた。しかしもう少し専門の基礎としての比重があった方が、よかったのではないかと思います。」
(38年工学部卒)
- (8)「学生時代①であると思っており、一般教育の一面があるとは思っていなかった。」
(38年教養学部卒)
- (9)「生物学を選ぶと、内容は遺伝に関することばかりだったようだ。「生物学」といった提示

の仕方より、もっと細かく分化したものを並べ、選ばせたい。」

- (10)「文科系だったので、自然分野は、単位取得が難しいとの印象しかなかった。」
(53年教育学部卒)

- (11)「専門学科以外の学生も多数受講していたが、この人たちにも、学究的楽しみが分けられていれば幸いである。」

- (12)「実験はある程度役に立った。」 (53年理学部卒)

- (13)「専門の基礎と考えていたが、結果的にはまったく役に立たなかった。」
(53年医学部卒)

- (14)「自分の専門分野と関連する一般教育科目はほとんどなかった。」 (53年農学部卒)

設問Ⅲ－B 理系自然科学を制度上の基礎教育 科目に位置づけることについて

B. 理科学部学生が教養課程で学ぶ自然分野の科目の相当部分は、制度の上でも専門基礎科目として、一般教育の枠外に出したほうがよいという、意見があります。

あなたのご経験から、このことをどう思われますか。下記のうち、もっとも望ましいと考えられる方向に（1つだけ）○をおつけ下さい。

1. 一般教育の位置を動かさず、専門にとらわれない内容を堅持する。
2. 制度上は一般教育のままとするが、専門科目との連繫に十分留意する。
3. 専門基礎科目として明確化し、4年一貫の効率的教育を行う。
4. 以上のいずれともいい難い。
5. その他：自由にお書き下さい。

回答意見は①～④の3つの選択肢に3分されているが、ほぼ現状の肯定もしくは据置きに相当する、②「一般教育のままとしながら、専門教育との連繫に十分留意」が最高の38%を示す。ただし、①を「一般教育堅持」とみなし、②の趣旨を後半部「専門教育との連繫に十分留意する」に置いて、②＋③の合計を①と対比させるなら、その差は歴然である。しかし、むしろ年度別にみて、②の減少と④「いずれともいい難い」の増加をどう解釈するかが問題であろう。

①「一般教育の線を堅持」は全体として28%であるが、その内訳が自然系に高く(31%)人文系に低い(21%)ことは、設問Ⅲ－Cの意見分布とも関連して注目に値する。

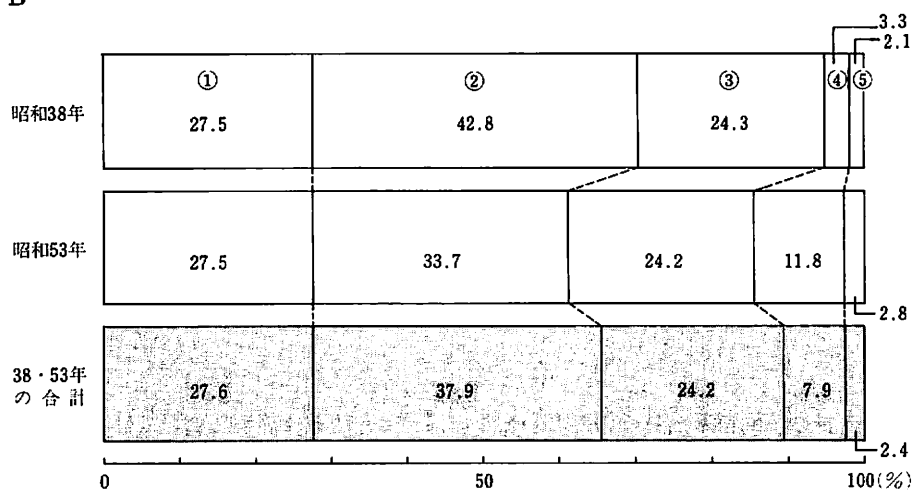
学部別に見るなら、この設問についてはとくに大きな意見の違いがある。文学部では②、③、④がそれぞれ29%で同数、教育学部では②38%、①26%、法学部では②36%、③27%、経済学部では④39%、②28%、理学部では①37%、②と③が27%で同数、医学部②55%、①29%、薬学部では③56%、②28%、工学部では②41%、①33%、農学部②45%、①35%などである。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

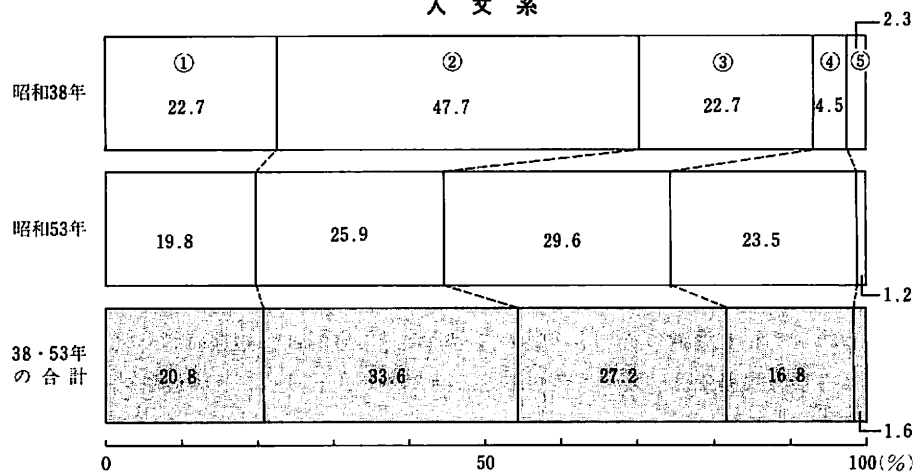
(1)「何も4年の枠の中で詰め込まねばならぬとせず、教育すべき中味が増えたのであれば、6年でも7年でもかけるべきではないだろうか。その学生が、一生進歩し続けるために。」

(38年経済学部卒)

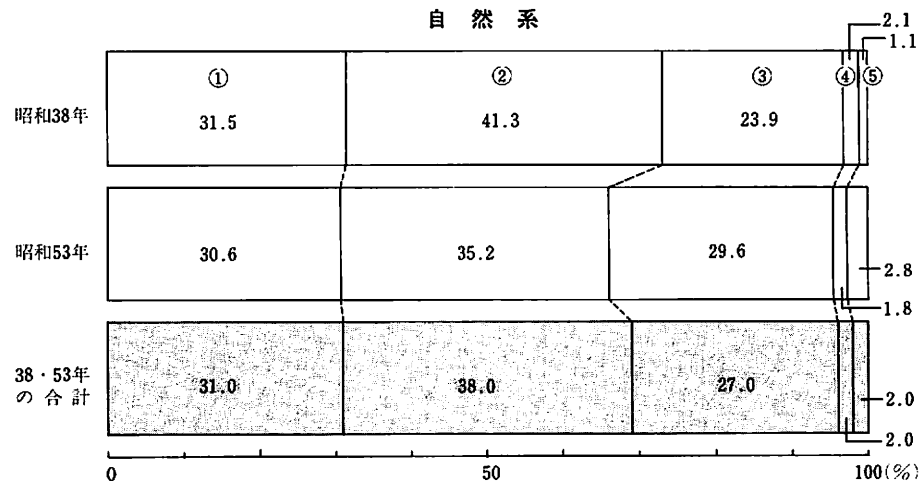
III-B



人文系



自然系



(2)「前文の知的訓練を行うための科目と考えると、1～2年間でほぼ完成するとは考えられず、そのための端緒と考えても4年間ぐらいは必要と考えている。」 (38年理学部卒)

(3)「教育は教官の人間性で行われるものであるもので、連続性を無理につけると不自然となる。最小限のハードルを設定して、それを clear したら次へ進むという原則は堅持すべし。」 (38年医学部卒)

(4)「自分の専門に直接関連した一般教育の科目は、専門基礎科目と考えていた。」 (38年文理学部卒)

(5)「自分自身は、文科系出身なのでわからないが、現在の教養課程においては 1)専門の基礎となるもの 2)専門にとらわれず視野を広めるためのもの、の2つが存在しているように思われる。両者の考えを、どのように考えるかは、1つの研究課題となると思われる。」 (53年教育学部卒)

(6)「私は大学4年で完結ではなくて、専門に入ってはじめてその分野の入門であると考えている。というのも、何をやりたいとの気持ちはあっても、細くどれをということになれば、専門に入ってはじめてその方向がつかめるという状態だ。だから専門で自分の興味の方向を見出し、それを大学院で深く追求するのが自然だと思う。1～2年はやく始めたからといって、その効果はどうか？」

(7)「数学は必修科目であったが、数学をさほど必要としない学生と同じクラスに入れられて、一般教育科目として受講した。そのため教官の熱意も専門との連繋も薄く、自分の能力不足も手伝って専門課程では、えらく苦勞した。今でも、マトリックスや波動方程式を見るとドキッとする。」 (53年理学部卒)

設問Ⅳ－C 文系一般教育の中に専門基礎の要素があるか。

C. 文科系の学部にとっても、外国語は別として、一般教育科目の中に専門基礎科目に当るものがあるとお考えでしょうか。下記のうち1つに○をおつけ下さい。

1. 文科系にも当然存在し、制度上でも一般教育と区別すべきである。
2. ある程度は存在すると思うが、制度上で一般教育から分けるほどのものではない。
3. 文科系の中にも、実験系の学科などで理科系に近いものまであり、いちがいいえない。
4. まったく存在しない。
5. 以上のいずれともいい難い。
6. その他：自由にお書き下さい。

②の「ある程度存在するが、制度的分離は不要」が57%と圧倒的で、新・旧による傾向もない。設問の設定に不十分な点があったと思われる。ただし、年度別に見て、①「文化系にも当然存在し、制度上でも一般教育と区別すべき」が減少し、②が増加していることにはそれなりの意味があるようにも思われる。

②に対しては、人文系と自然系では、25%以上の差がある。とくに医学部では②29%、③33%、①21%であるのに対して法学部では、②83%、③0%、①11%である。これは人文系の学部では、基礎と専門とが截然と区別された、いわゆる「積み上げ式」の専門教育がなされておらず、したがって回答者もそうした区別にあまり敏感ではない、ということを示している。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

(1)「自然系の経験からすると、教育概論のような講義も教養課程にあってよいと思う。」

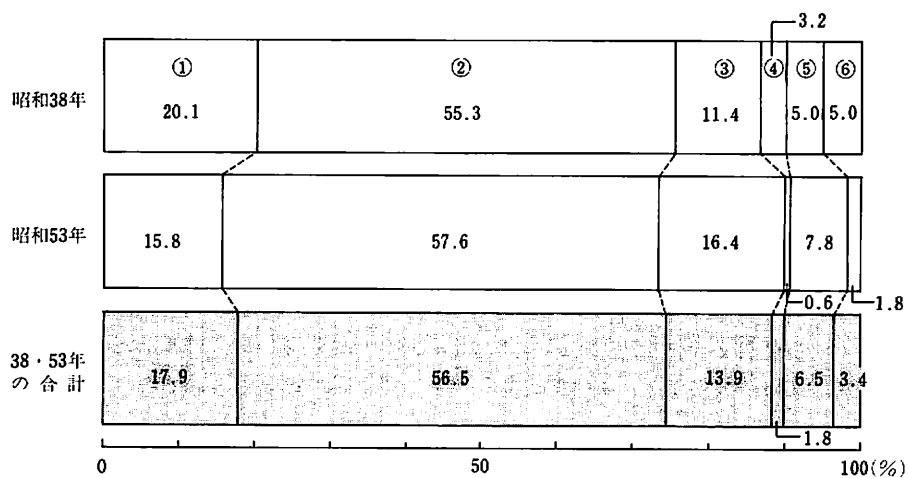
(38年教育学部卒)

(2)「専門基礎科目の教育を充実すべきです。」

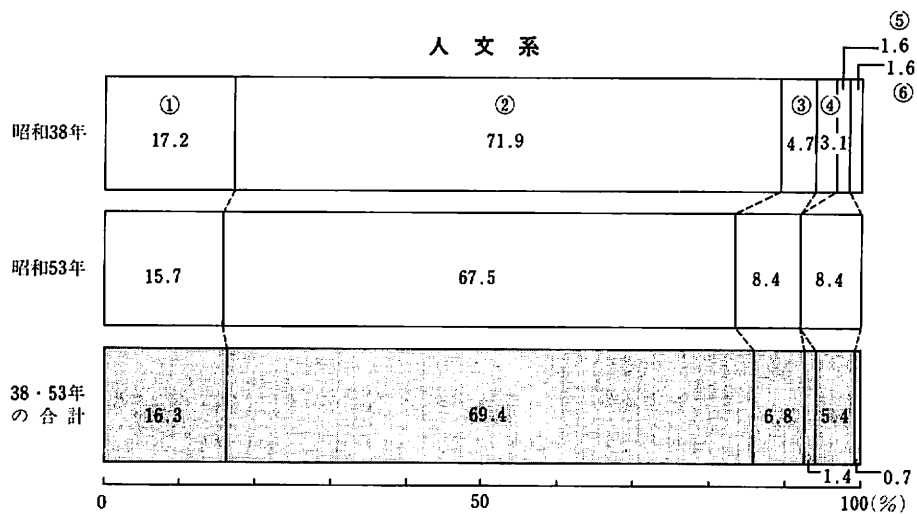
(38年経済学部卒)

(3)「専門課程に移っても、要は指導教官によるものと思います。しっかり哲学に裏付けされた学識を持った指導教官であれば、自ら基礎的な考え方、知識を体系づけて、教育すると思い

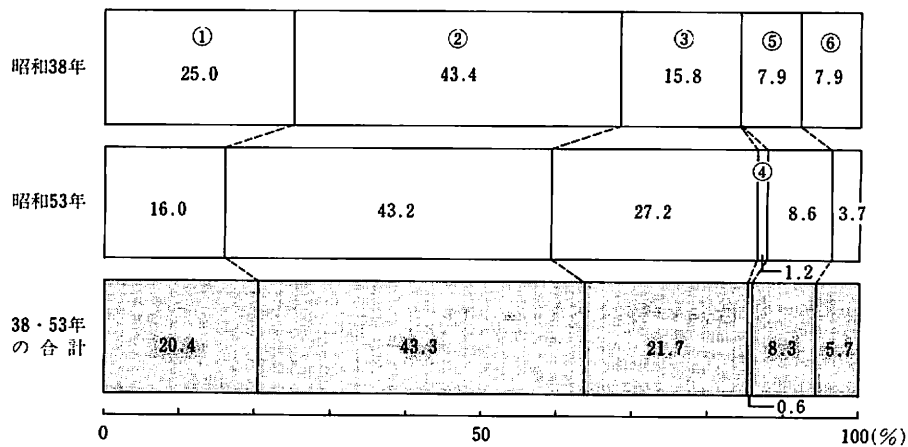
III-C



人 文 系



自 然 系



ます。」

(4)「文科理科の区別は比較的古風な概念であり、教養部としては余りはっきり区別することは必要ないと思う。ただ必須、選択の点にて学生に選別させればよい。」(38年理学部卒)

(5)「外国語は文科・理科系を問わず基礎科目であり、専門書、関係文献が少なくとも読める素地を養うことは必須である。」(38年薬学部卒)

(6)「物理専門であったが、我々理科系のものにとって、一般教育の文科系科目は楽しく、興味もて、また将来にとっても有意義であった。これが真の study だと思った。」(38年文理学部卒)

(7)「教授の得意とするところのみをとり上げすぎるので、専門的になってしまうような気がする。」(53年理学部卒)

前の設問Ⅳ-Bと同様に、この設問に対して回答者が自由に記述した意見はきわめて少ない。しかし、専門基礎科目を設置すべきか否かは、人文系自然系を問わず各大学各学部がそれぞれ独自の研究教育上の観点から決定すべき事柄であることを考慮に入れるならば、この点について回答者に多くを期待することは、むしろ筋違いであろう。

§ 4 外国語教育

設問Ⅳ－A 外国語の学力（能力）をもっとも身につけた過程

Ⅳ 大学教育の中で、外国語教育は一般教育と密接な関連をもち、一般教育とともに教養課程教育の中心をなしています。

A. 外国語の学力（能力）*を、あなたがいちばん身につけられたのは、いつの時期だったでしょうか。またどのような方法だったでしょうか。下記のうちから2つまで選んで○をおつけ下さい。

（* 語学力とはどういうものか。その定義や範囲については、各様の考えかたがあるでしょうが、ここではそれもあなたご自身の受取りかたにお任せします。）

1. 高校での学習と大学受験勉強によって。
2. 大学教養課程の履修によって。
3. 専門課程での修練によって。
4. 卒業後の実社会での仕事上の必要に迫られて。
5. 海外の留学、駐在等によって。
6. 大学外での自学・自習によって。
7. 以上のいずれともいい難い。
8. その他：自由にお書き下さい。

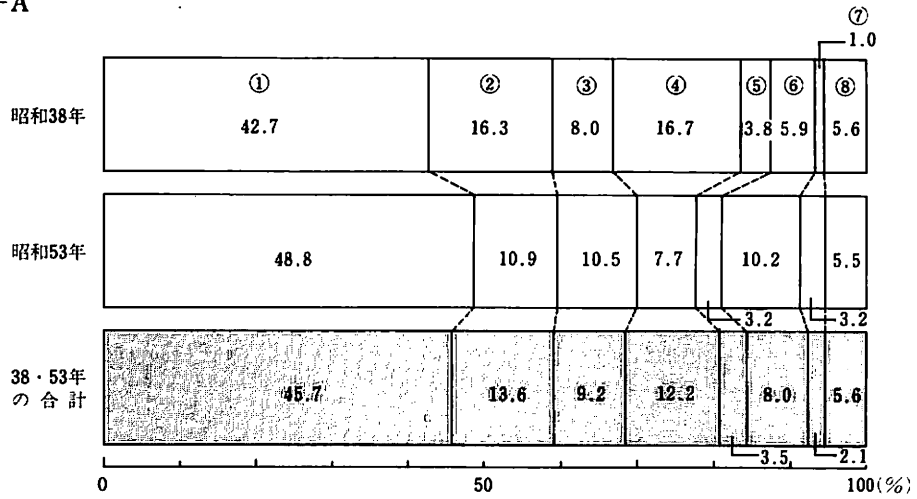
①の「高校と大学受験勉強」が46%で最高であり、②の「大学教養課程」は14%である。②－①の差は、38年26%から、53年38%へと拡大している。

学部別には、②に対して、文科系の文学部は15%、教育学部16%、法学部18%であるのに対して、理学部10%、医学部9%、薬学部6%である。③「専門課程での修練」に対しては理学部が16%ともっとも高い数値を示し、④に対しては文学部18%、医学部23%、工学部28%、⑥に対しては法学部が18%を示す。

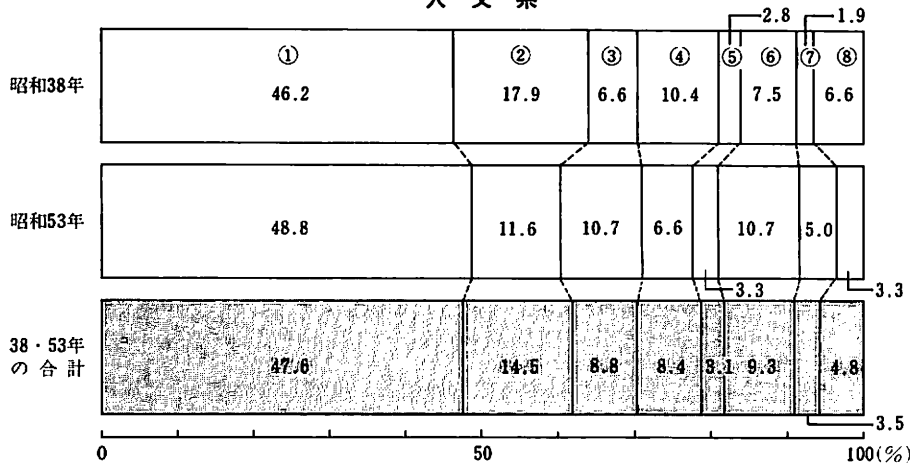
以上の回答は、その一方において、回答者の極めて多数が、「外国語」の能力＝「英語」の能力と受けとめたことを示している。

④の「実社会での仕事上の必要によって」とする回答が、38年17%＞53年8%であるのは、実社会経験の長・短に関係があろう。この設問Ⅳ－Aの回答では、一般に人文・自然系

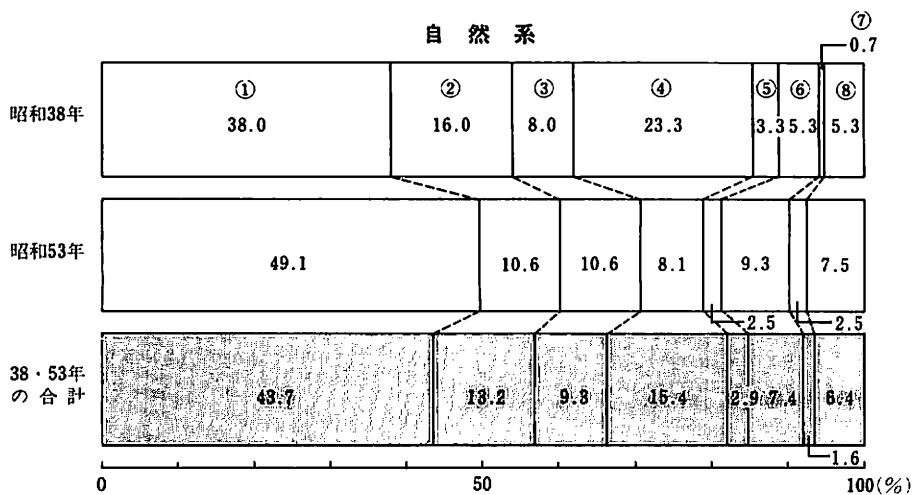
Ⅳ-A



人 文 系



自 然 系



の差が小さいにもかかわらず、上の④のみについて38年自然系が23%で、他の年度・分野の数値の2～3倍に達している。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

(1)「難解な文学を得意とする文学部の教師に、語学教育をさせてはならない。語学嫌いをつくるだけである。英語の小説を読む楽しみは実社会に出てから知った。」

(38年経済学部卒)

(2)「教養課程の語学(第1、第2)は、ほとんど役に立たなかった。教育方法(講読式)が良くない。」

(3)「文系の生徒には実験・実習がない。その分とも一般教養で、外国語以外に人文科学・社会科学の履修科目数を増すべきだと思う。」

(38年理学部卒)

(4)「英語の基礎教育は、高校のレベルで充分。教養部の英語は、屋上屋を作る曲型。」

(5)「教養で必要とされる英語教育は、①会話能力の徹底的訓練、②英語圏の歴史、地理を完全に抱括した英文学入門、③自らの主張を長文の作文で表現する能力。」

(6)「特に、中学校での英語教育が最も充実していたと考えている。教師は自らも出来る限り英語でやりとりしながら、発音、会話力、読解力をつけさせるよう努力していた。高校教育は「単語記憶学」、大学教養は「訳文学」であったと極言できる。」

(38年医学部卒)

(7)「現在も勉強中であり、学生時代にやっておけばと、反省している。」(38年農学部卒)

(8)「講師には、母国語を使用している外国人に依頼すべきであると考えます。」

(9)「語学は最後は演習(留学・外国人との直接接点)によって仕上げられる。」

(38年教養学部卒)

(10)「自分の外国語の力は正直に言えば、受験のためのものであり、現在の職業では特に必要としないので、もう大半は忘れてしまい、能力が身についたとは言いがたい。」

(38年学芸学部卒)

(11)「中学・高校での学習(英会話も含めた授業)」

(53年文学部卒)

(12)「中学時代の学習。海外旅行に行ってみて。」

(53年教育学部卒)

(13)「あとの質問にも出てきますが、大学での外国語の授業(特に英語)は、ほとんど無意味

なものでした。」

(53年経済学部卒)

(14)「外国語の学力とはどういうものかよくわかりませんが、知識のみなら①。本当の力はついていないと思う。」

(53年理学部卒)

(15)「大学院進学後、英文論文、雑誌を読む必要にせまられその過程にて学習した。」

(16)「語学がきらいで、大学教養課程では、単位修得のため、しかたなく講義に出席した。」

(53年医学部卒)

(17)「大学院での研究の中で。大学時代、高校生の家庭教師をしている中で。」

(53年工学部卒)

(18)「卒業後の会話教室に通って。」

(53年薬学部卒)

(19)「大学でのクラブ活動(ESS)によって。」

(20)「卒業後に“会話”に興味を持つようになったが一般教養ではほとんどやらなかったと思います。自分で勉強し、もっと若い頃からやっておくべきだったなあ、など思ったりしています。」

(53年農学部卒)

この設問以降、Ⅲ「卒業生の提言」も含めて、(1)および(2)に代表される旧来の訳読中心の外国語教育法に対する批判、というよりもむしろ嫌悪感は、回答者の自由に記述した意見の基調をなしている。

設問Ⅳ－B 教養課程で外国語の学習に最大の時間・労力を費やしたことについて

B. 教養課程を通じて、学生は外国語の学習に最大の時間を費やしているという、普遍的な調査結果があります。あなたの場合もそうだったのではないのでしょうか。そしていま、そのことをどのようにお考えでしょうか。下記のうち1つだけに○をおつけ下さい。

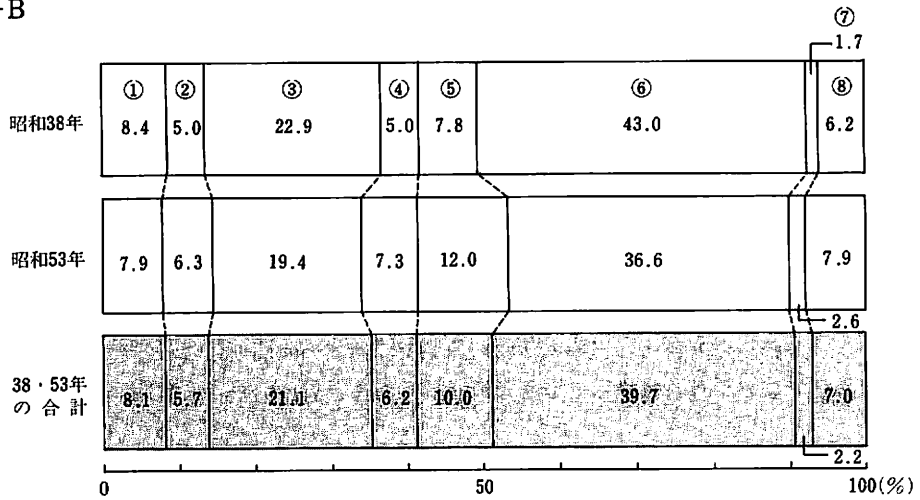
1. それでよかった。教養課程では外国語の勉強がもっとも大切であると思う。
2. それでしかたがなかったと思う。ほかに時間をかけて学習しなければならないものはなかった。
3. それ以上に、外国語の勉強にもっと時間をかけておけばよかったと、後悔している。
4. 一般教育科目の学修の方に力を注いでおけばよかったと思う。
5. 専門の基礎学力をつける方に力を注いでおけばよかったと思う。
6. 外国語の学修に最大の時間を費やしたとは思わない。
7. 以上のいずれともいい難い。
8. その他：自由にお書き下さい。

⑥「外国語の学習に最大の時間を費やしたとは思わない」の回答が最も多く（40％）、この設問は適切さを欠いたようである。⑥以外でも、③の「それ以上に外国語を勉強しておけばよかった」が21％と高く、他はそれ以下に分散している。

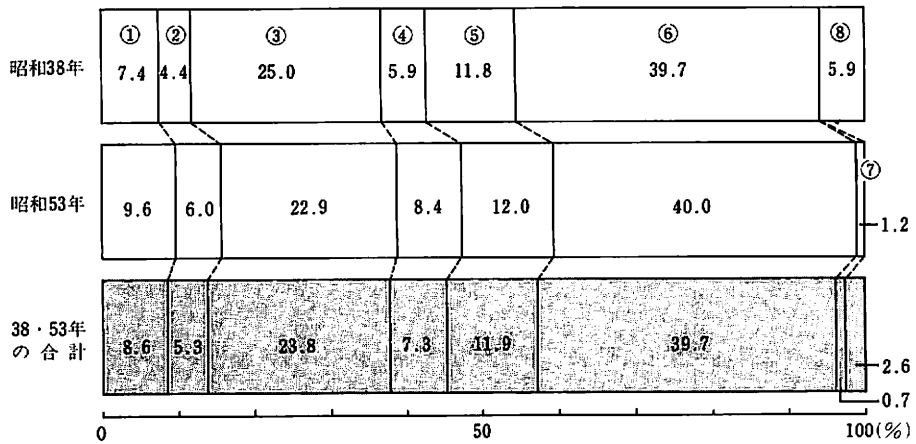
ただし、学部別には、かなりの数値の違いが見られ、これは外国語を中心にしてみた各学部学生の受講態度を反映するものと思われる。①「外国語の勉強がもっとも大切」に対してもっとも高い数値を示すのは経済学部と薬学部（ともに14％）であり、もっとも低いのは工学部の2％である。②「ほかに時間をかけて学習しなければならないものはない」に対しては、文学部の14％が最高であり、③に対しては①とは対照的に工学部36％が最高で、文学部29％、医学部28％が続く。④「一般教育科目」に対しては教育学部10％、医学部9％、⑤「専門の基礎学力」に対しては、文学部19％、教育学部14％がそれぞれ高く、同様に、④経済学部4％、文学部5％および⑥医学部3％、法学部6％がそれぞれ低い数値を示す。⑥に対しては、法学部50％、教育学部43％であるのに対して、同じ人文系の文学部24％、経済学部29％で低い数値のグループを形成する。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

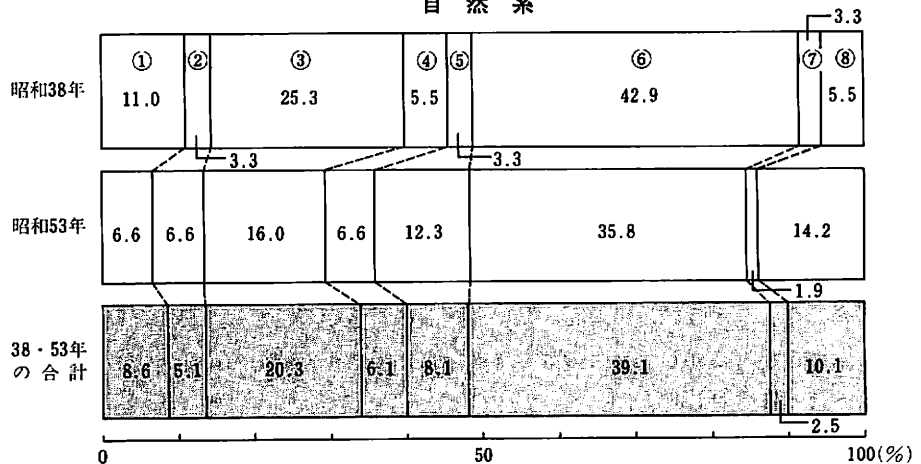
Ⅳ-B



人 文 系



自 然 系



- (1)「確かに時間をかけて勉強したが、調べ、読解を中心とする学習であったと思う。今、考えると聞く、話すといった学習に時間をかければよかったと思う。」 (38年教育学部卒)
- (2)「語学は社会に出て常に負い目となってつきまとった。大学の語学をサボったのではないが、周囲のレベルが高く、やっとなついていったという実感がある。」
- (3)「外国語の教育はもっと充実すべきである。我々が教わったのは、外国文学で無駄であった。」
- (4)「確かに、語学学習の為に教養課程があった感が強いが、もっと「喋れる、聴ける」能力をつけるよう改むべきである。日本人教師も原語で講義する時間を設けるべきである。理科系の余り必要でない科目をけずってでもその必要はあると思う。」 (38年経済学部卒)
- (5)「教養部の外国語では、英、独を選択したが「訳文学」で負担が多かったことは事実であるが、それを通じて英、独文学を鑑賞できたとも考えられないし、語学力が付き、専門学習の視野の拡大になったとも考えられない。」
- (6)「ドイツ語(医系)を大幅に削減すること。ドイツ語の優位性を改革すべし。もしやるならば小人数にしばらく会話ができるまで行うこと。フランス語、イタリア語、スペイン語、中国語などで同様に行えとよい。」
- (7)「教養課程で習得した語学はその後の専門課程、卒業後の仕事の上でも非常に役立ったので満足しているが、もう少し時間は少なくてよかったと思う。」
- (8)「日本語(母国語)で的確に自己表現できない学部学生が多い。外国語の前に日本語で書き話す能力を教養部で training できないものか。」 (38年医学部卒)
- (9)「英語の教育は目的を失っている。英語学の教育は必要なく、英語をもっと生きた言葉として理解する必要がある。そのためには、こんなに長時間は不要であると思う。」 (38年薬学部卒)
- (10)「外国語に最大の時間を費やさなかったのが、外国語の勉強にもっとはげんでおけばと思っている。単に単位を習得しただけであったと思う。」 (38年農学部卒)
- (11)「外国語を修得するコースと、外国語を必要としないコースとに分けたらよいのではないかと思う。」 (38年文理学部卒)
- (12)「外国語の実力をつけたのは、教養課程での外国人教官(アメリカ人、カナダ人)のクラスでした。LLラ及び自由対話。私は外国語の学習が好きだったので、時間をついやしたという気はない。しかし、自分の好きな語学だけでなく、他のものも、もう少しやっておけば良かったとは思う。」 (53年教育学部卒)

(13)「ただし他の一般科目が大したことなかったのではなく、外国語が結果的に一番手間と時間をくったというそれだけのことである。」

(14)「外国語の学習は大切だったと思うが、大学の講義では本当の力はつかなかった。高校の延長のような気がしたし、かえって独語など全く教授の一方的な講義の進め方であった。」

(53年理学部卒)

(15)「現在までは、語学が出来なくても不自由はないと思う。将来、後悔するかも知れないが。」

(16)「外国語の学習には非常に時間を費やし、それは大切であったとは思いますが、一番大切というわけでもなかった。いやいや勉強する(単位をとるため)のではなくて、マスターしようという目的のもとに、密度高く勉強するのが好ましいと思う。」

(17)「英語に関しては高校までの英語力で充分であり、教養課程ではまったく勉強せずに試験をパスした。時間はかけなかった。また語学授業の程度も独語に関してはある程度勉強したが、実社会で、ほとんど必要ないとわかっていたので趣味的に授業をうけた。」

(53年医学部卒)

(18)「時間をかけるばかりで、非効率的だった。」

(53年工学部卒)

(19)「教養課程では講義用テキストの精読であったが、その後は専門課程の間も原書を読むこともなく、その力を応用することがなかった。語学はあくまで手段なので、それを使ってもっと広くいろんな分野を学び、実践力をつけるべきだったと思う。」

(53年薬学部卒)

(20)「試験勉強に終わってしまい、外国語という、別の体系、思考方法、文化を味わえなかった。」

(53年人文学部卒)

(21)「外国語の学習にある程度の時間を費やしたが、それが負担だと思ったことはないし、将来役に立っても立たなくても、そういう時期に、外国語を学習するということは国際人としての自覚を持つうえで、大切なことだと思う。」

(22)「就職する際、外国語と直接関係のない職種であったせいも、現実的には何の役にも立たなかったようである。その外国語を修得する時間を、他の一般教養的分野にでも費やしていれば良かったと思われる。しかし、趣味として現在でも外国語と接するのは非常に楽しい。」

(23)「20歳前後が語学力を身につける最適の時期にあたるので、現状でよいと思う。」

(53年農学部卒)

**設問Ⅳ－Ｃ 英語教育は講読中心であるべきか、
実用訓練中心であるべきか。**

Ｃ．教養課程での英語の授業形態をめぐって、外国語教育の性格が、「教養教育」であるべきか「実用教育」であるべきかという論争があります。このことは、これまでの英語教育が講読演習に重点を置いて行われてきたことに根ざすものです。

あなたが受けた英語教育を振りかえって、いまどのようにお考えでしょうか。下記のうち１つだけ○をおつけ下さい。

- １．講読中心でなかったので答えられない。
- ２．講読中心でよかったと思う。
- ３．講読中心でよかったと思うが、教材が後の専門分野に関連したものであってほしかった。
- ４．講読とともに、実際の活用のための訓練がほしかった。
- ５．実際の活用のための訓練に集中してほしかった。
- ６．以上のいずれともいい難い。
- ７．その他：自由にお書き下さい。

過去の講読中心の教育に対し、実用訓練を要望する声が強く、④「講読とともに実用訓練」と⑤「実用訓練のみ」の合計は７６％に及ぶ。最も批判的な５３年自然系では、⑤が２６％に達する。

全般としては④の「講読とともに実用訓練」が５７％を占め、現実的主流意見を形成しているが、年度別に見れば、④が１７％減であるのに対して、⑤は１２％増である。③の「講読でよいが、専門に関連した内容を」も１０％を数える。

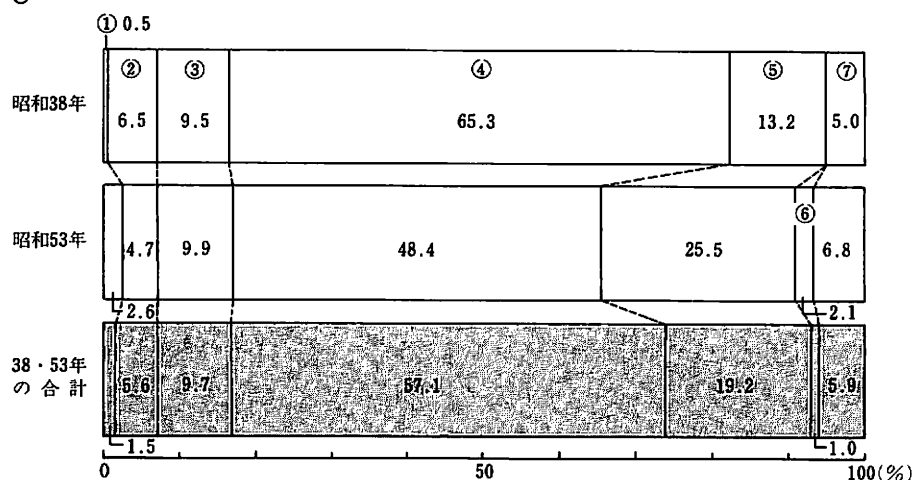
他方、講読中心の英語教育法に肯定的な立場の②「講読中心でよかった」と上記③の総計は、１５％にとどまる。

学部別では、③に対しては理学部１８％、文学部１５％が高い数値を示し、法学部０％、医学部３％が極端に低い数値を示す。④に対しては薬学部２９％が最低であり、⑤に対しては、薬学部４３％、経済学部２７％が高い。

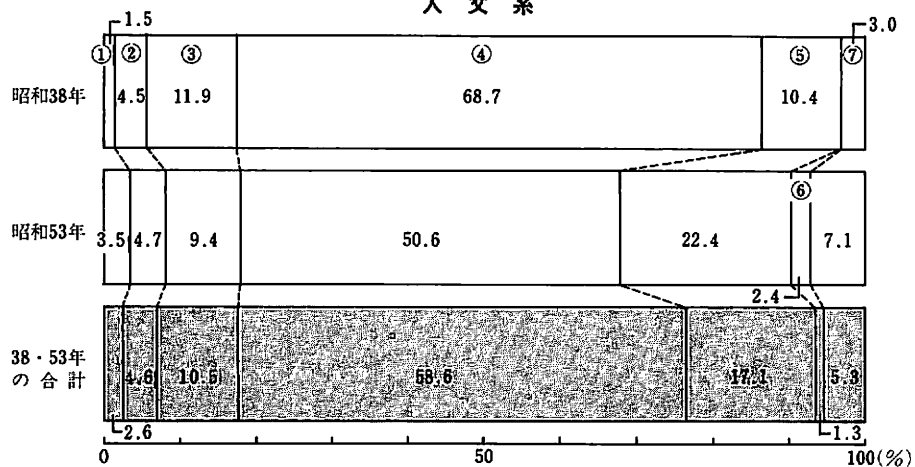
この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

(１)「大学入学までに少なくとも６年間英語を学んできているはずだが、中には、私のようにま

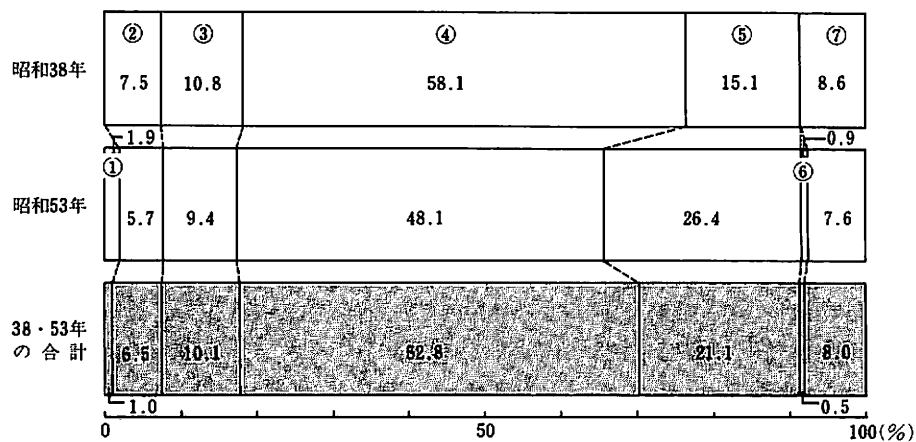
Ⅳ-C



人 文 系



自 然 系



- まったく苦手なものもいると思う。もう一度初歩からやりなおす講座が欲しかった。」
- (2)「契約書の英語は、実社会では、必須不可欠の知識であるが、学校では皆無である。セミナーの講義も不十分であり、憂うべき現象と思っている。」 (38年教育学部卒)
- (3)「講義も実用のうちと思うが、カリキュラムは多くの中から選択させればよい。ただし、実際に使う場を与えることが必要と思う。一般読者向けで、その学生が専攻したいと思っているテーマの英文の解説記事を読ませる。講演を聞かせるなど。」
- (4)「講義中心であったが、高校時代より低レベルで、何の興味もわかなかった。」
- (5)「専門課程に進むと、外国語はどうしても講義中心となってしまいます。会話を中心とした実用教育も、卒業年次まであってしかるべきだと思います。会話術のような実学は、短期間に集中して、また長期に継続してその効果が出てきます。」 (38年理学部卒)
- (6)「私自身は、実際の活用を他に持っていたので、講義中心でよかったが、一般的にはいくらでも実際に使える外国語を教えた方が良いのではないか。」
- (7)「講義力は高校時代が最高で、教養の英語教育で低下する。そんな講義は中止して会話、作文に徹すべし。」
- (8)「私達の受けた講義は、英文学、哲学であり、文学、哲学に対する講師の情熱を感動して聴いていたような記憶がある。」 (38年医学部卒)
- (9)「実用英語、会話というと、発音記号、アクセントの位置など意味のない勉強に時間がとられすぎる。」 (38年薬学部卒)
- (10)「外国語がもっとも不得意な科目であった。どちらがよかったなどという意見はない。もっと声を出して読むことをやっておけばと思っている。一般会話の講座があってもよかった。」 (38年農学部卒)
- (11)「教養としての英語と実用としての英語の各々の概念、その区別があいまいなため、あまりに一般的な質問には答えられない。ただし、大学の英語は実用を目的としてはいないと思う。自然に学生個人の努力で「実用」にふりむけられるだけの学力をつけるべきものだろう。もちろん、その場合の実用とは、「話す」ことだけをいうのではない。」 (38年教養学部卒)
- (12)「講義と会話L.Lの双方を選択したが、双方とも不十分（とりわけ後者）であった。講義、実用の二者択一という教育ではなく、総合的な力量を養う方法を工夫することが必要なのではないか。ただ、実用面をさらに重視してほしい。」
- (13)「いかなる授業形態であっても、その学生の必要とする力によって、形態は変えられるべきだと思う。」

(14)「国際人といっても実際問題として、それらは少ない人数である。中学、高校と講読中心なので、大学くらいは形態をかえてやってほしい。高校の学習方法とかわりがない。」

(53年教育学部卒)

(15)「私が学んだのは英語のための英語の勉強ではなく、英語を読むことにより、その内容を理解する為であり、その点、講義内容があり、充実していた。」

(53年法学部卒)

(16)「実社会ではやはり「読む」ことが一番多いが、文学作品なんぞばかり読んでいては全く役に立たない。見当ちがいの分野の論文が読めてこそ、大卒の値打ちができる。」

(17)「講読は高校までに得たもので、その後も何とか対処できると思われる。とくに研究では、英語でディスカッションできないと得るものが少ない。」

(53年理学部卒)

(18)「専門分野に関連した講読と、実際の活用のための訓練を両方行なうのが良い。現在の講読は目的が不明確で、高校時の英語と変わらない。講読の教材としては、専門分野に関連してほしかった。」

(19)「特に外人教師による生の英会話の授業が是非欲しい。そうでないと、卒業後、外人との交渉や会談で非常に困るし、講読中心など英語に対する興味が半減する。まずしゃべる訓練を。」

(20)「英語の授業が、いわば英文科の学生に対する講義の亜流に終わっている。例えば理系の学生がシェークスピア文学の字句の解釈をする必要はないと思う。」

(21)「高校卒業までの6年間にもわたって英語教育を受けており、それまでで十分に身につけているはずである。講読、会話とに可能となっていなければおかしい。」

(53年医学部卒)

(22)「英語教育は、大学入学以前の英語教育で十分ではないだろうか。教養課程での外国語教育は第二外国語のみでよいと思われる。」

(53年薬学部卒)

(23)「英語的(英米人的?)物の考え方を研究するという意味では講読中心でよからうが、果して今英米人と始終接しているわけでもないのに、今にすれば実地の訓練が必要だったかどうかは、大いに疑問だ。」

(53年農学部卒)

設問Ⅳ－D(i) 英語以外の外国語の履修状況

D. 英語以外の（第二）外国語について伺います。

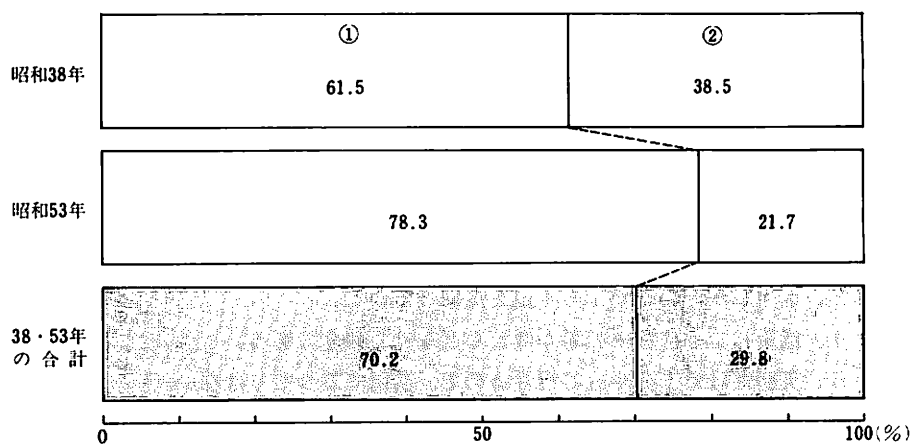
(i) あなたが教養課程で修得された、英語以外の外国語の単位数は、大きく分けて下のいずれに近いでしょうか。どちらかに○をおつけ下さい。（正確な記憶でなくてけっこうです。）

1. 8単位前後
2. 4単位以下

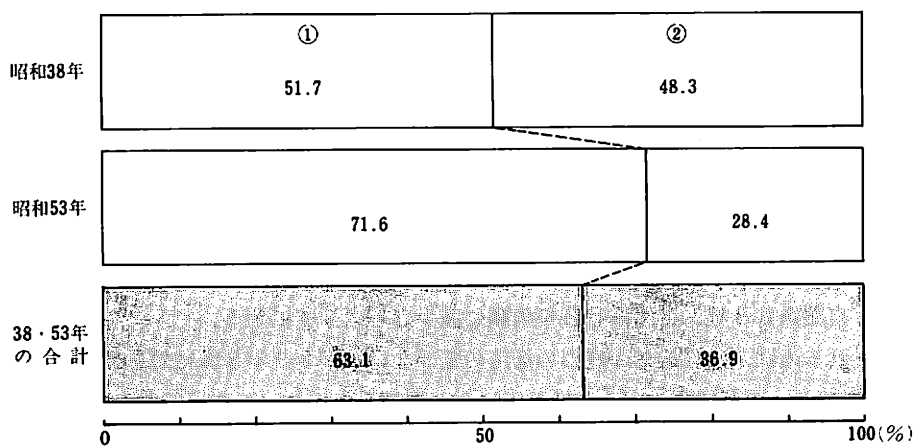
①「8単位前後」が38年62％から、53年78％へと16ポイント増加している。これは英語以外の外国語の教育条件がある程度改善されたことを示す。とくにこの傾向は人文系よりも自然系に強い。53年自然系では、②「4単位以下」は16％にすぎない。

学部別では、②の数値が高いのは教育学部53％、経済学部36％、法学部31％で、第二外国語については人文系の学部の方が、自然系の学部よりも、むしろ劣悪な条件のもとにおかれている。

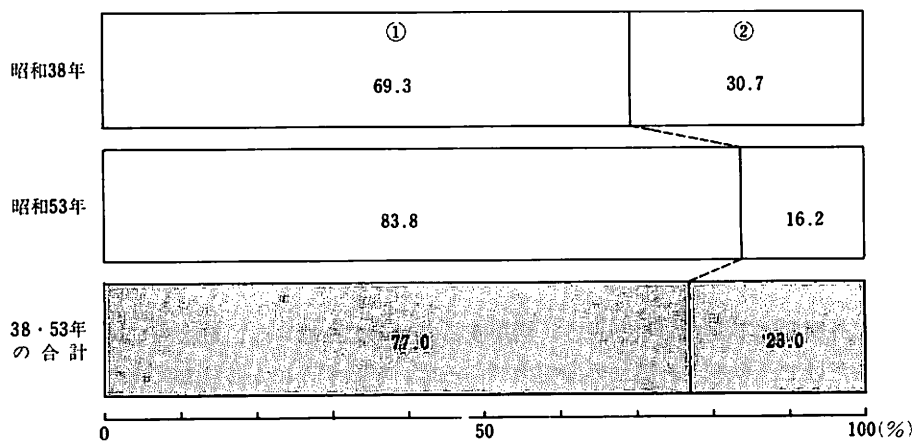
Ⅳ-D-(i)



人 文 系



自 然 系



設問Ⅳ－D(ii) 英語以外の外国語の活用状況

(ii) あなたはその外国語を、お仕事の上にどのように活用してこられたでしょうか。下記のうち1つだけに○をおつけ下さい。

1. 教養課程で得た語学力を、十分に活用して、満足している。
2. 大いに活用しているが、そのためにはその後の学習訓練に頼らねばならなかった。
3. 活用したいのだが、力不足を後悔している。
4. 活用しようにもその場がほとんどなく、残念である。
5. 英語だけで十分やって行けるので、活用するつもりはない。
6. 直接活用はできないが、文学的・語学的素養という点で、社会的活動の上に役立っていると思う。
7. 以上のいずれともいい難い。
8. その他：自由にお書き下さい。

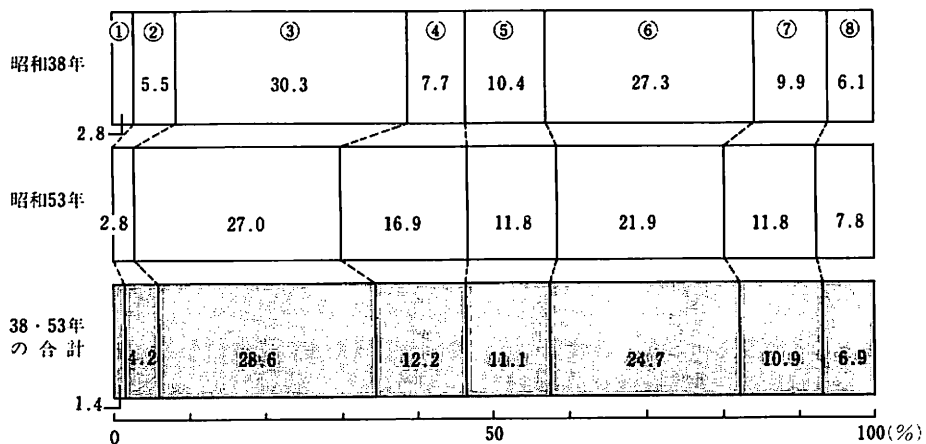
全般としては、③「活用したいが力不足」が29%で最も高く、⑥「活用はしてないが、文学的・語学的素養として」の25%がこれに次ぐ。ただし、学部別には、経済学部は③20%であるのに対して、⑥は36%である。⑥の回答は、人文系38年に高く(38%)、人文系53年、自然系38年、自然系53年の順に減少して17%に到る。

注目されるのは、④「折角の能力の活用場がない」が38年8%に対し53年17%、⑤「英語一本でやって行ける」が人文系6%に対し自然系14%、の2点であろう。当然のことながら、⑤に対して、学部別では理学部、医学部がそれぞれ15%、工学部が18%と高い数値を示す。他方、人文系の学部はいずれも平均よりかなり低い数値を示すが、法学部では0%である。

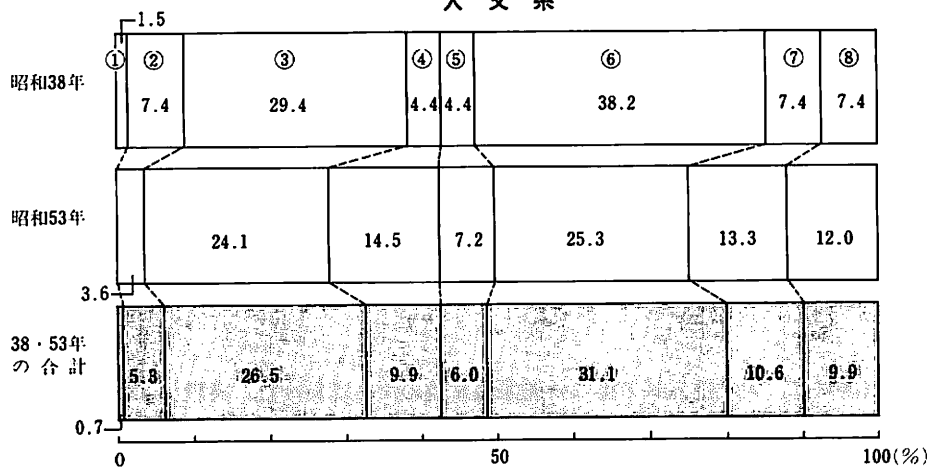
この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

- (1)「ドイツ語、仏語を履修したが、身につかなかった。会社で、英語の外に、必要にせまられて、スペイン語を身につけた。」
(38年経済学部卒)
- (2)「第二外国語は不要であると思う。活用するだけの力もないし、機会もない。たった1年間習っただけで、今思うと第二外国語の「いろは」をわずかにかじったにすぎず、習って良かったという気持ちはあまりない。」
(38年教育学部卒)

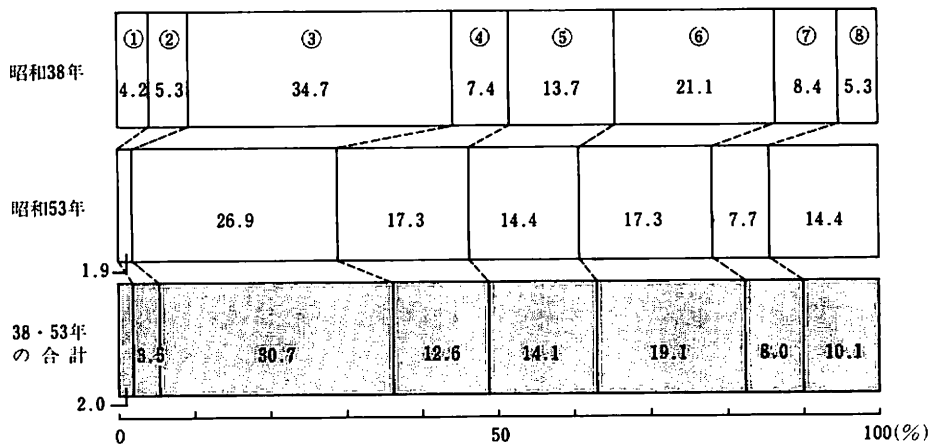
Ⅳ-D-(ii)



人 文 系



自 然 系



(3)「教授陣の分布の都合上、独語に偏しすぎである。仏・伊も重視すべし。」

(38年医学部卒)

(4)「①に○をつけたが専門書、専門文献を講読するのみ。作文力、会話力は残念ながら自信なし。活用したいが、力不足のため英語だけにたよっている。」

(38年工学部卒)

(5)「外国生活も何年か経験しているが、教養課程の外国語のみでなく、中高も含めて何の役にも立たなかった。」

(38年文理学部卒)

(6)「今のところ英語もめったに必要ないが、やはりときたま、必要になる。その時あわてても遅い。第二外国語は全く無意味であった。」

(53年理学部卒)

(7)「今となっては、不必要なドイツ語教育の為に、教養の2年間の大半をさかれてしまったのは非常に残念であった。周囲には、ドイツ語一単位の為の留年が数多くおりドイツ語偏重には、イヤ気がさしていた。第2外国語は不必要であると思う。英語のみで十分ではないだろうか。」

(53年医学部卒)

(8)「現在はほとんど活用する機会が少ないが、大学院及び学部中講座配属後の研究活動においてある程度の必要があったため、必要にせまられての学習訓練がもとで、ある程度力がついたと思われる。特に、大学院への進学試験科目に必要であったため」

(53年工学部卒)

(9)「実質的には、大学院入試の第二外国語の試験のためであった。実際にはほとんど活用されていない。むしろ英語の勉強時間が減った分だけマイナスであった。」

(53年農学部卒)

この項目での代表的な意見は、(10)「第二外国語はまったく身につかなかったし、現在ではすっかり忘れてしまった。しかし活用する場もなく必要も少なく、したがって不都合もない。」

(38年教養学部卒、38年農学部卒、38年文学部卒、53年経済学部卒、53年農学部卒、53年水産学部卒、53年人文学部卒)であるが、(11)「十分にではないが活用している。」(53年人文学部卒)、(12)「活用する場も少しはあり、満足している。」(53年歯学部卒)という意見もある。

§ 5 保健体育教育

設問Ⅶ 保健体育教育の評価

Ⅶ 教養課程を中心に行われているものに、もう一つ、保健体育教育があります。あなたが「大学において保健体育教育を受けたこと」を、現在の目で総合的に評価して下さい。

(i) 下の各欄の、該当すると考えられるところに○をおつけ下さい。

		体 育 実 技	講 義	
			体 育 理 論	保 健 理 論
イ	たいへん役に立った			
ロ	かなり役に立った			
ハ	あまり役に立たなかった			
ニ	まったく役に立たなかった			
ホ	以上のいずれともいい難い			

(ii) 保健体育教育の内容に不満があったとすれば、特にどんな点だったでしょうか。自由にお書き下さい。

体育実技の評価が、38年のやや否定寄りから、53年のほぼ相半ばにまで向上していることは、体育設備の充実、指導内容の改善が、この間にもたらされたことと関連しているかと思われる。学部別にみれば、教育学部、法学部、薬学部では㊷と㊸の和が50%に達している。

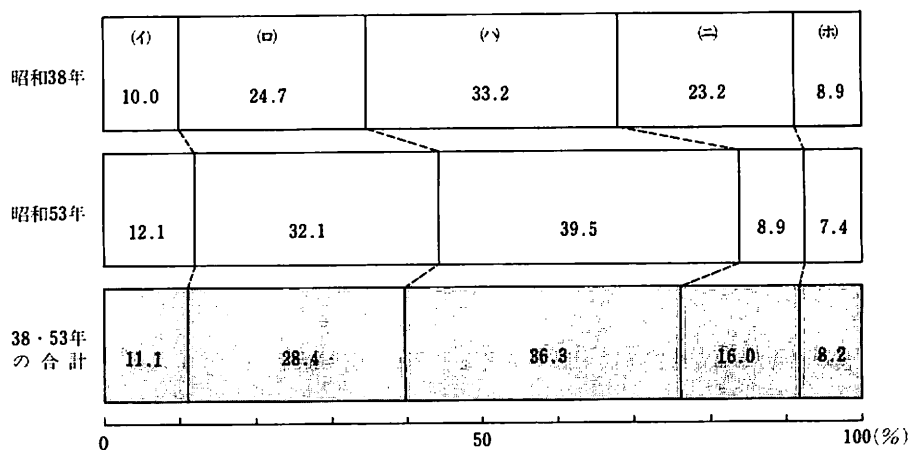
しかし、体育講義に対する評価は低く、否定寄り70%は、肯定寄り20%を大きく上回る。

設問(ii)に回答者が記述した意見は次のとおりである。

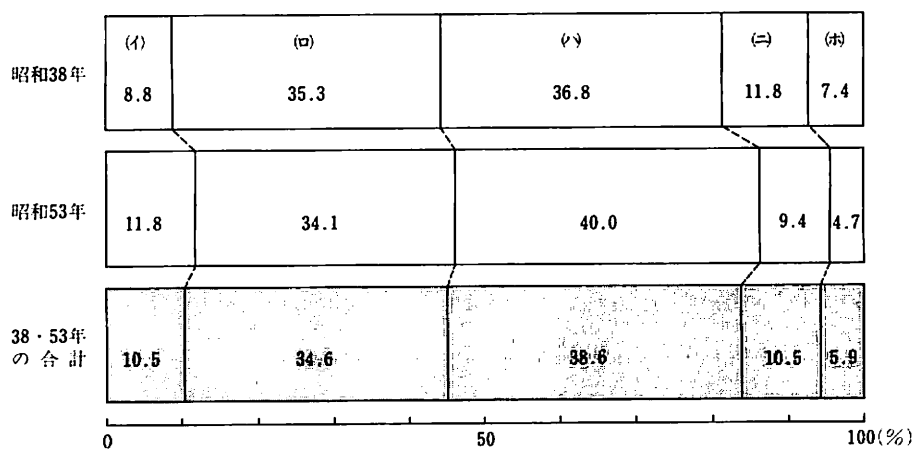
- (1)「実技はもう少し厳しくしてよかったと思う。気分転換的雰囲気であったように思われます。」
- (2)「時間が少ない。ふりかえてみると、何を学んだのか記憶がないほど印象がうすい。社会人となった場合、簡単に役立てて実行できる健康法やスポーツ実技の授業がほしかった。」

(38年文学部卒)

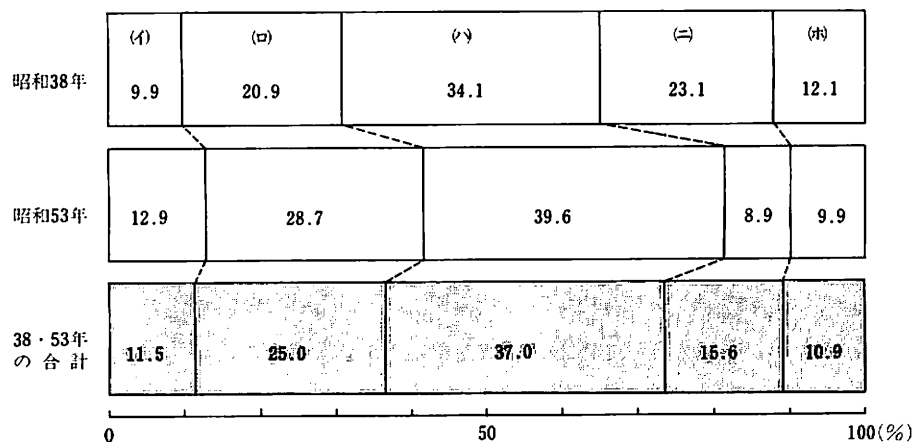
Ⅴ－(i) 体育実技



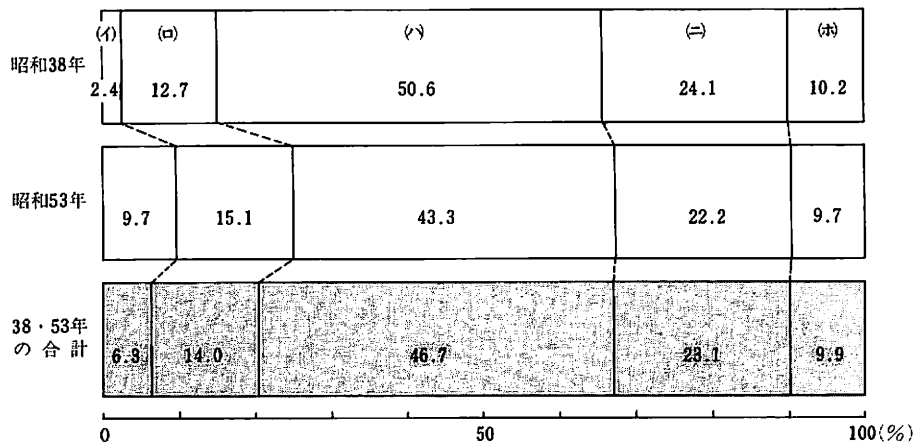
人 文 系



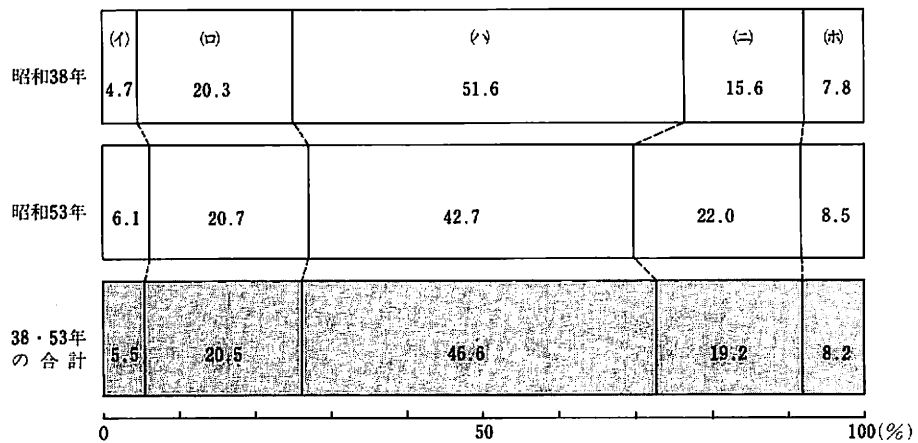
自 然 系



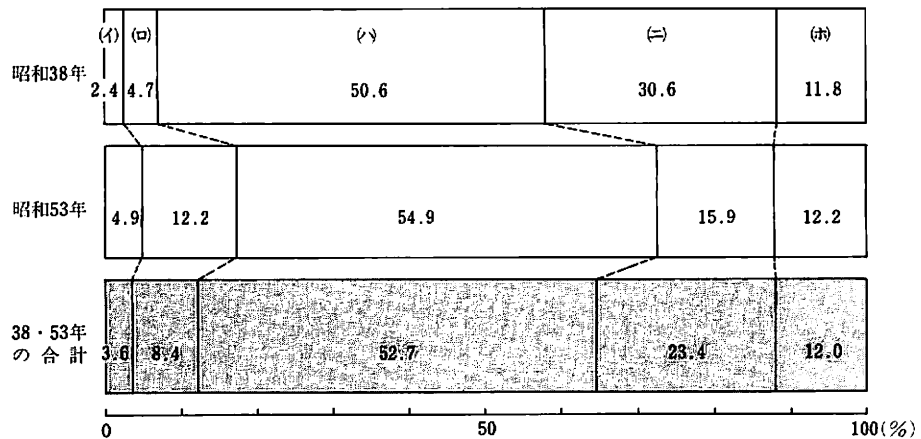
体育理論



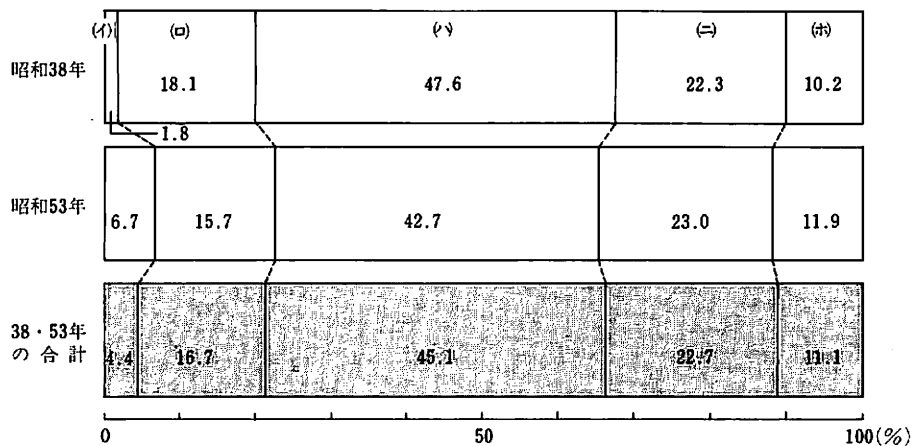
人文系



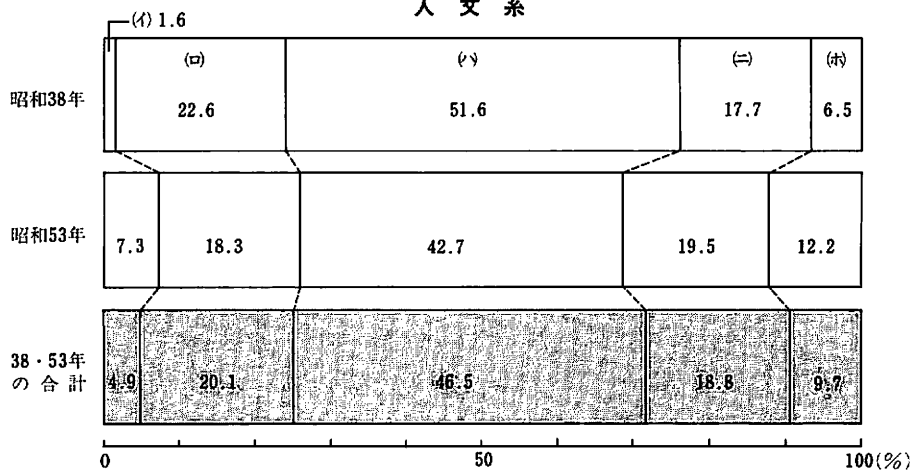
自然系



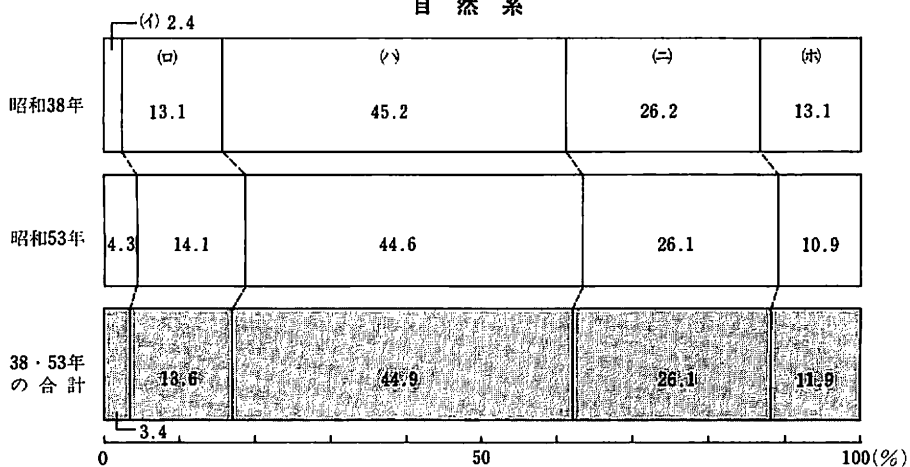
保健理論



人文系



自然系



(3)「大学の保健は、高校の保健のむしかえしにすぎず、単に卒業のための単位修得にすぎなかった。予防医学、成人病医学の講義なども設けた方がよいと思う。」

(4)「生涯体育に結びつけていくための、オリエンテーションの意味をもたせたらどうか。体育実技は、高校時代にできなかった種目を選択できたので有効だったように思う。」

(5)「選択の幅が、もう少し広がられたらよいのではないと思う。」

(6)「実技が遊びに流れがちであった。あまりに自由放任で少しも指導がなかった。在学時代は、まだ体育関係の施設が整っておらず、多人数のため充分なことができなかった。」

(38年教育学部卒)

(7)「実技は選択する科目を抜けてほしかった。長く続けられるものを、選択するのがよいと思う。」

(38年法学部卒)

(8)「実技はレクリエーション的要素があって楽しかったが、講義はあまり意味がない。」

(9)「講義は公衆衛生が中心であったが、もっと公衆衛生の場合は、疫学的方法論あたりまで深くつっこんでほしい——特に最近は公害等がさがわがれている世間であり、社会人として最少限必要であるから。」

(10)「評価自体きわめていい加減なものであった、という印象が強い。」

(11)「“ 何のプラスにもならなかった ” は言いすぎかもしれないが、その様な感想しか残っていない。残念です。」

(38年理学部卒)

(12)「講義は一般教養に必須とは思わない。選択制にすべきである。」

(13)「全く受けた教育の内容を記憶していない。実技も必修のようでしたが、マスコ競技教育で、個人の体力、適性を無視した教育が行なわれたため、大学では意味がない、全く不必要と思います。」

(14)「実技指導について教官が不熱心であった。体育系のクラブ活動を行っている学生は、体育実技は必要なし。理論、保健についても省略するか、クラブ活動を行っている学生に対する特殊な教育をすべし。」

(38年医学部卒)

(15)「実技はまったくお遊び程度という印象があった。講義は必ずしも徹底的にサボったという記憶はないが、現在では、何を学習したのか全く覚えていない。講義が必要であるとは全然思わない。」

(16)「楽しく体を動かすことの出来るスポーツ（趣味としてのスポーツ）が、習えたら良かったと思う。」

(17)「実技は、体力維持という意味で、4年間あるべきだと思う。」

(18)「いいかげんであった。私は高校時代バスケットの選手だったために、授業で先生のかわりに教えさせられました。それで優だからいいようなもの——さて。」

(38年薬学部卒)

(19)「特に不満はなかった。(i)の設問で “ 役立つ ”、 “ 役立たない ” に区別するのは難しい。しかし学校教育の一部として必要である。」

(20)「保健体育教育については、当時あまり関心がなかったので、内容の記憶がない。授業方法は今であれば、スライド等を使ってもっと魅力的になると思うが、広い教室で講師の話を聞き、ノートをとるだけだったので、印象に残らなかったのかもしれない。今では、たいへん関心があります。」

(21)「知的好奇心を満足させる何等の内容がなかった。受ける方も、又、教える方も全く情熱なし。」
(38年工学部卒)

(22)「体力の増進・健康管理等は常に個人個人が気をつけ、自分自身で管理して行かなければならないものであるが、このための基礎となる体育に関する教育は、中・高に比べ大学では時間数も少なく、授業に対する取組み方にも、真剣さが不足していたように思われる。」

(23)「在学中は、日常生活の中で最も不足する「体を動かす機会」として、保健体育の教科を考えていた。今日的には、ストレス解消かも知れない。その点で、特に教育的効果を期待すべきでなく、特に不満はない。小生の場合、中学、高校でやらなかった種目を実技の中で楽しんだ。講義の中では、実技に対する学問的理論づけとして、中学、高校では得られなかった「物の考え方」が身についたと思う。」
(38年農学部卒)

(24)「実技は有意義であったが、講義は専門的すぎて、親近感がなく、理解もできなかった。生涯教育の観点に立った教育であってほしい。」
(38年学芸学部卒)

(25)「保健理論は不十分であり、より広汎かつ専門的な講義が必要だと感じた。単位数が少なかったため、履習する内容も少なかった。」
(38年文理学部卒)

(26)「女子学生を交えた “ お遊び ” 程度で大して役に立たなかった。よりハードで少しでも体力、技力を向上させるものでなければ、意味がない。体を鍛えることや、学生間の人間関係を醸成するには役立ったが、学問的なものとしては、高校時代の学習で十分である。」

(27)「実技は授業としてやらねばならないもののでしょうか。運動不足を解消することはよいことですが、他に何か知恵はないのでしょうか？少なくとも、学生が何らかの運動を定期的にやっているかを証明できる場合（運動部で活動している場合など）、免除するなどを考えてはどうでしょうか？」
(38年教養学部卒)

(28)「全般に、単位数が少ないのではないかと思われる。講義は内容を記憶していない。」

(29)「体育系のサークルに入部していたこともあり、実技など物足りなかった。遊びとほとんど変らず。」
(53年文学部卒)

(30)「失礼な言い方だが、高校時代十分鍛えられた私にとって、実技はまるでレクリエーショ

ンである。ただ、ではどういうものをどういうやり方でやれば満足できるか、という問いに
対しては、よいアイデアが浮ばない。」

(31)「今、小学校で体育を担当しているが、現場での研修で学んだものがほとんどで、大学で
のことはほとんど役に立っていない。大学での思い出は、単位修得のために半強制的に実技
をさせられたことしかない。」

(32)「社会人になってからの職場の保健・衛生、体力づくりや、教員になってからの学校保健
や個人指導、又は生涯教育につなげられるような知識やとりくみに、プラスになるような内
容がほしかった。つまり、勤めてから、職場や、学校での保健体育を実践し、啓発する能力
を養えるような内容が必要。」
(53年教育学部卒)

(33)「私は単に「単位」にしばられて出席したのみであり、何故、大学で保健、体育教育を受
ける必要があったのか理解していない。」

(34)「実技は別として、保健、体育理論の講義の記憶がほとんどないような状態ですので、そ
れほど印象の薄い内容の講義であったことが不満です。」

(35)「講義については、内容が中途半端。もう少し実生活に即した知識等が欲しい。」

(53年法学部卒)

(36)「保健・体育は生涯にかかわることなので、もっと実社会、実生活に役立つ内容がほしか
った。実技には各々人数制限があって、希望の種目がとれなかった。」

(37)「施設が十分に整備されていない。(特に更衣室がない。)」

(38)「出席すれば単位がもらえた。実技については、時間が少な過ぎる。この点については、
大学教育ばかりでなく、高校までの教育についても言える。」
(53年経済学部卒)

(39)「実技及び講義の両面とも高校教育より劣る。大学教育の専門性というものが、保健体育
の内容にあったか疑問である。」

(40)「実技は数が少なすぎ、時間が短い(週1時限)。新体操や柔道など、大学で教えることに
なっている高度な技もある。が、実質上修得不可能。」

(41)「実技の面では実際に部活動をしていた関係で、体力的なレベルアップはできず、他の者
の体力レベルが低すぎたため、遊び的な状態だった。」

(42)「保健や理論では概論ではなく、もっとつっこんだ講義が聞きたかった。自分の生命(生
活)を学問的に検討する視点がゼロで、しかたなく「決まっているから講義する」という風で
苦痛であった。知的快感も全くなく、貴重な時を残念だった。」

(43)「4年生まで体育実技だけでも欲しかった。」

(53年理学部卒)

(44)「必要性、意義づけについて疑問の点が多かった。」

(45)「小、中、高校での保健体育とまったく同一であり単なる時間つぶしでしかない様な授業
であった。性教育特に避妊の方法や医療問題の社会的側面といった事を、本物の専門家に聞

- きたかった。実技に関しても、クラブ制にして、専門家にコーチしてもらった方が良いのではないだろうか。大学で体育を必ずしも全部のコースともやる必要はないと思われます。何か1つのクラブ、同好会（社会人又は大学の）に参加させるぐらいで、実技はよいと思われます。」
- (46)「体育が不得手な学生が多いと思う。そのような学生に対して、体力づくりの必要性和、スポーツの楽しさを認識させてくれるようなユニークな教育を望む。（例えば、思い切ってゴルフなどの種目を取り入れる、合宿をするなど。）」
- (47)「印象がありません。」 (53年医学部卒)
- (48)「実際役に立たない。実技をもっと重視すべし。」 (53年薬学部卒)
- (49)「実技は、遊びの時間に過ぎず、技術的指導など、一切なかった。選択できる種目が少なかった。内容はゲームがほとんどで、その割に出欠が他に比べて厳重で、レクリエーションと思っていた内容にかかわらず、かなりの制約を受けていた。」
- (50)「実技は健康管理の意味で有意義と思うが、1期（半年）の間に1つ1つの種目に対して体系的に教える態度があつて欲しかったと思う。」 (53年工学部卒)
- (51)「体育実技まで必要かどうか大いに疑問だ。そこまで、大学側が面倒をみる必要があるのか？ただ保健理論に関しては、非常に興味深い講義を聴くことができた。」
- (52)「全く息き抜きの意味しかなかった。遊び気分の教師と学生の間で何の学問的意義があったのかわからない。それよりは、高校時代の授業の何と意義深かったことか。」 (53年農学部卒)
- (53)「高校までで経験したことであり、新しいスポーツに触れてみたかった。実技の面で設備が不十分のため、希望どおりの選択ができなかった。また、もっと本格的に教えていただきたいかった。テニスなど人数の割に先生の数が少ない。」 (53年人文学部卒)
- (54)「医学系の学生にとっては、保健理論は専門教育内容と重複するか、矛盾する内容に、結果的になってしまった様に思える。実技はそれなりに楽しかったが、講義は保健体育とは全然関係のない内容だった。」 (53年歯学部卒)
- (55)「大体の大学では、実技は週一回です。これは回数としては中途半端であるかと思われます。週2～3回にするか、さもなくば、全廃にすべきかと思われました。」 (53年教養学部卒)
- (56)「体育及び保健を講義される事の必要性に自分自身としては疑問があった。実技については設備の不足、時間の不足を感じた。大学教養課程には必要なし。高等学校で充分。」 (53年水産学部卒)

§ 6 一般教育と専門教育

設問Ⅳ 高校新課程への大学の対応、とくに一般教育と専門教育の今後について

Ⅳ 大学卒業生に対する社会的な要求は、新制大学発足時に比べると格段に高度化し、履修すべき専門の知識・技術の範囲の拡大と内容の充実が望まれているといわれています。一方において、中等教育の指導要領の改正に伴って、高校卒業生の平均学力は、今より低いものになると予想されます。この状況の中で、4年間（医・歯を除く）の大学教育期間では、実社会に役立つ卒業生を送り出すことは困難だという意見さえ、大学内に出ています。

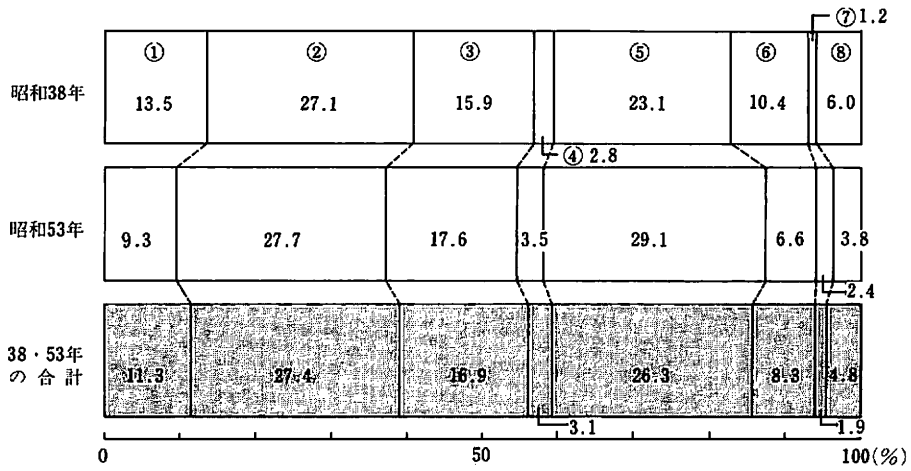
この問題への対処について、とくに一般教育と専門教育の関係をどうしたらよいか、以下の考えかたの中で適切と思われるものに、2つまで○をおつけ下さい。

1. 入学者選抜方法の改善工夫によって、専門教育に対応できる学生を厳選すれば、現状の教育体系を維持できる。
2. 一般教育と専門教育の連繫を強めることによって、専門教育の効率を高める。
3. 専門教育の充実拡大のためには、一般教育の一部縮小もやむを得ない。
4. 一般教育の内容充実のためには、専門教育の到達レベルの一部引き下げもやむを得ない。
5. この機会に専門教育の内容を考え直し、教育の「量」を必要最小限にし、その分だけ「質」を完全なものにする方向に改める。
6. 現制度の中では解決は無理であり、大学修業年限を延長（たとえば5年）するほかない。
7. 以上のいずれともいい難い。
8. その他：自由にお書き下さい。

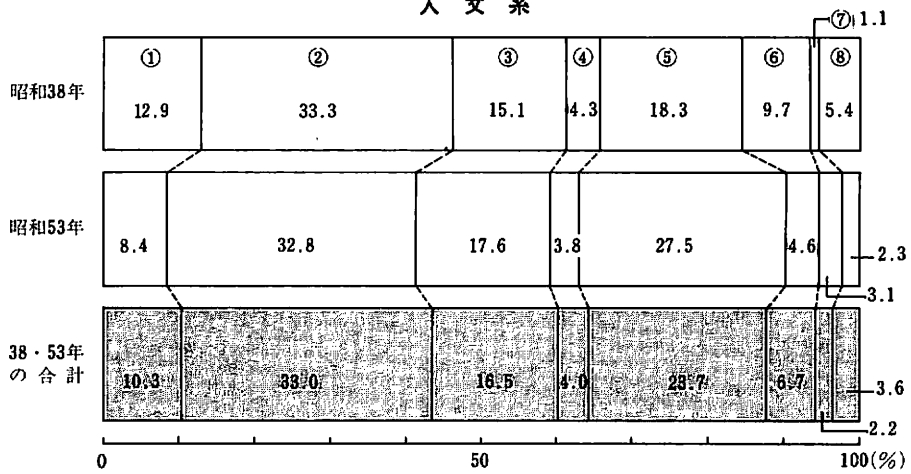
②「一般教育と専門教育の連繫強化」（27％）と⑤「専門教育の量を縮小して質を充実」（26％）の二つの回答率が高い。その内訳において、前者②が人文系に高く（人文系33％、自然系23％）、後者⑤が自然系に高い（人文系24％、自然系30％）ことは、注目に値する。また、年度別には、②はほとんど変わらないのに対して、⑤は38年23％から、53年29％へ増加し、この傾向はとくに人文系に著しい（18％から28％へ）。

③「一般教育の一部縮小もやむなし」の17％に対し、④「専門教育の到達レベル引下げ」

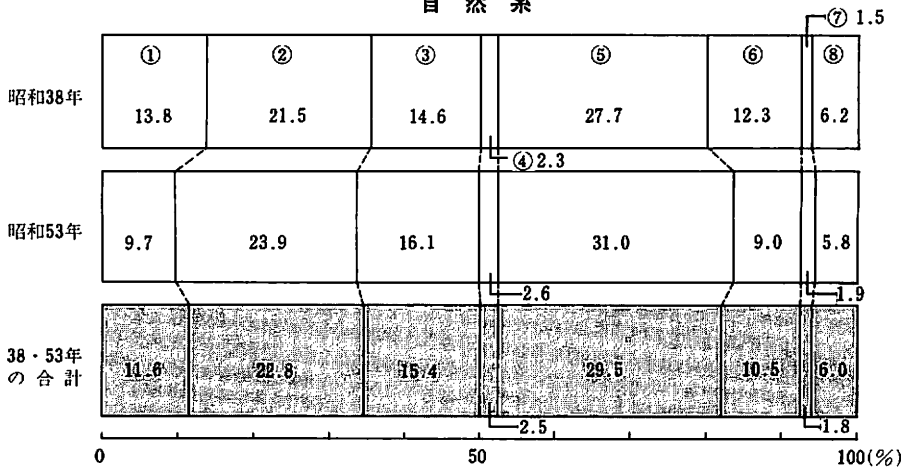
VI



人 文 系



自 然 系



はほとんど0%である。学部別では、③に対して文学部27%、医学部20%、文理学部32%が高い数値を示す。

この設問に関連して、回答者が自由に記述した意見は次のとおりである。

- (1)「専門課程での必須科目単位が、必ずしも専門と関係なく、もっと専門分野に集中できるように単位修得規程を改善すべきだ。」
(38年文学部卒)
- (2)「三年ないし四年制の専門学校と五年制の大学とに分けるべきだと思う。中・高合わせて五年制とすることを前提とする。一年間の無駄が、はぶけると思う。」
- (3)「現在の大学生は、高校生よりも勉強せず、また中学生よりも勉強していない。それで卒業できるのがおかしい。」
(38年教育学部卒)
- (4)「偏差値教育からは思考力の充実は望めず、暗記力だけが秀でた人間が作られる。暗記力だけでは、新しい仕事を処理する能力はないと考えられます。高校入試大学入試の改善が重要と思います。講義では学問に対する情熱を汲み取り、その他の指導で問題解決の糸口をサジェスションする。」
- (5)「教養課程から専門課程への移行時の選考を難しくし、専門課程でも試験を難しくし、勉強しないと卒業できなくすべきである。落第制又は、ある年次(6～8年)で卒業できなければ停学処分とする。今は8年で退学。」
- (6)「①に近いが、知識教育で選抜するのではない。逆に思考力で選抜すれば、一般教育と専門教育と両方こなせる学生を入れることができる。そのような学生が高校教育で増えるように選抜制度を改善する。」
(38年理学部卒)
- (7)「大学教育は、専門の知識、技術への取り組み方を学ぶにとどめるべきであり、実際の仕事の中で知識・技術を拡大し、高める努力をすべきである。勿論、学問の進歩とともに、大学での再教育も必要となろう。」
- (8)「根本的に、高校卒業生の平均学力を今より低下させるような中等教育の方針には反対である。」
- (9)「中高一貫教育(旧制・中学－5年制)にもどすべきである。」
- (10)「どの程度の専門家を大学で育てるか、という質の設定がむずかしい。社会の要求は多様であるから、すべての領域で高度の専門家を作り出すことは、むずかしいのではないか。私の経験では、大学では知識の習得そのものに無駄な時間を割きすぎて、応用する訓練が著しく欠けていたと思う。この点を改善すれば、大学は4年ないし6年で充分と思う。」
- (11)「高校の授業内容が平易になったとしても、高校生の学習時間は変わらないだろう。指導要領の改正そのものが悪いのだが、とにかく学生は努力してレベルを維持するであろう。その

中から学習意欲のあるよい学生をとるには、共通一次は不適當なのではないだろうか。」

- (12)「大学卒業生に対する社会的要請は高度化していることは確かであるが、逆に強い体力と集中力と目的意識さえ確かであれば、大学時代相当さばっていて、知識が極めて不十分であっても、卒後の数年の努力で「秀才」を追い抜くのは、通常みられる現象である。大学の講義・実習の意義を軽視するわけではないが、それより大切なものがあるような気がする。大学として極めて重視すべきものに、スポーツ、芸術、音楽を中心とするクラブ活動がある。「フットボールの全米優勝の回数と、ノーベル賞受賞者の数が大学のランクを決定する」という米国の大学観は参考にすべきものがあると思う。」 (38年医学部卒)

- (13)「実社会にでてから、実力をつけるためには、基本的な理解力と、困難にもくじけない態度を大学4年間で修得すれば、学校教育の目的は達成されると思う。」 (38年薬学部卒)

- (14)「教員免許との関連もあり、5年が適當であると思う。」 (38年文理学部卒)

- (15)「大学はもちろん社会に貢献すべきですが、「すぐ社会に役立つ卒業生を送り出す」という形での貢献が望ましいのかどうか、大いに疑問です。技術教育をほどこす場所では（少なくとも全面的には）ありません。むしろ「役立たない人間」を作り出す場所として大学を想定し、大学と「実社会」との関係の変化を求めているかがでしょうか。」

- (16)「多数の学生から、3年間で殆どの単位を修得したと聞きます。自分自身もそうでした。大学にはまだまだ時間はあると考えますので、質・量ともに充実したものが考えられるべきと思います。」 (38年教養学部卒)

- (17)「教育実習をインターン制のように、期間を伸ばす必要があると思う。その為には5年に（教育大学）なるのもやむを得ないと思う。」 (38年学芸学部卒)

- (18)「現在の大学生は、自由時間が多いわけだから課題を多くする。大学の内容をもっと深めて、自宅学習がなければ卒業できないようにする。」 (53年文学部卒)

- (19)「情報は増加しても、その情報の処理能力を身につければ充分である。専門分野は別にしても、一般教育分野では、質的に内容を見直し厳選することもできるのでは？」

- (20)「現制度のままでは無理で、学生同志、上級生と下級生、教官との結びつきを強くし、チームワークを養えるような体制にすべきである。また、その中で、学生の自律性を高め、キメの細かい指導体制が必要である。」

- (21)「②とともに、一応一般教育のワクを守りながら、学生自身の学習度および動機づけなどを考えに入れて、学生の側から申請があれば、教養部生でも学部3年の授業を単位として取れるという特別制度をつくる。その際、その学生の実力と方向性をよく知っている指導教官あるいは授業担当教官とその学生との面接により、その申請を承認するか決定し、プログラ

ム計画に自由度をもたせる。」

(53年教育学部卒)

- (22)「一般科目を精選し、高校や大学専門課程との重複を避ける。一方、高校と大学専門課程との連けいに留意し、効率化をはかる。」
- (23)「やはり学びたくない者を入れない。又は大学は学ぶ所という印象をつけるために、内容をきびしくし、学ばない者は卒業できないような体制をつくるべきである。そうすれば、真に学ぶ者だけが入学し、高度な要求にも努力をもってこたえと考える。」
- (24)「大学での教育が実社会に直接役立つことはほとんどないと思う。役立つとしたら、学ぶ本人が先の事をよく考えているか、あるいは何とか役立てようと努力しているという場合しかなく、これはまれなケースと思う。またいくら専門教育を受けても、それをそのまま利用できる社会というのもまれである。どちらかと言うと、大切なのは専門教育を通しての基本的な考え方、筋の立て方をいかに身につけさせるかではないだろうか。」
- (25)「私が在学した当時、大学を卒業したからといって、即、社会的に貢献できるような人材はいなかったように思う。また在学中、学部変更したり、退学していったものも数多かったように思う。大学を考える前に、小、中、高のあり方をもう一度問い直さないと、大学では学校と社会の間のギャップは、うめつくせないのではないのでしょうか。」(53年理学部卒)
- (26)「大学院への進学率を高めるべきだと思う。そのために、より充実した奨学金制度で学生への金銭的負担を軽減すべきだと思う。」(53年医学部卒)
- (27)「一般教育の充実によって、専門知識を独習できるように図ったほうが良い。進級にかかわる単位取得条件、単位数ならびに単位取得の際の条件(点数等)をもっときびしくし、学部内での人材を厳選する。」(53年工学部卒)
- (28)「大学生活において重要なのは、学習だけでなく、人間形成の面もあげられると思う。応用的なものについては、基礎がしっかりしていれば、社会に出てからでも充分学習しうるものだと思うので、大学の学習形態は現状のままで、人間形成に時間を費せるような余裕のあるカリキュラムにして欲しい。」(53年農学部卒)
- (29)「一般教育の内容についても「量」から「質」への転換をすべきであり、それによって専門、一般にわたって浮いた時間を、もっと社会との関連を持つ実際的活用のために使用すべきである。大学修業年限は、これ以上延長すべきでない。」(53年歯学部卒)
- (30)「法学については、米国のように、別の学制にすべきである。」(53年人文学部卒)

付表

各設問に対する回答の学部別統計

Ⅰ-A

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	15.8	7.9	11.1	15.4	10.3	9.7	8.3	2.3	8.0	0.0	21.1	16.2
2	10.5	11.1	27.8	11.5	7.7	12.9	8.3	16.3	16.0	28.6	21.1	0.0
3	36.8	44.4	27.8	23.1	20.5	9.7	20.9	37.2	36.0	42.9	21.1	40.5
4	0.0	3.2	0.0	0.0	5.1	12.9	8.3	2.3	4.0	0.0	5.2	2.7
5	26.3	12.7	22.2	23.1	25.6	16.1	8.3	18.6	16.0	14.3	5.2	18.9
6	0.0	3.2	0.0	0.0	2.6	6.5	12.5	0.0	6.0	0.0	0.0	5.4
7	5.3	11.1	11.1	23.1	15.4	22.5	12.5	18.6	12.0	14.3	15.8	10.8
8	5.3	0.0	0.0	0.0	5.1	3.2	8.3	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7
9	0.0	6.3	0.0	3.8	7.7	6.5	12.5	4.7	2.0	0.0	10.5	2.7
総票数	19	63	18	26	39	31	24	43	50	7	19	37

【注】1) 38年卒と53年卒のデータを総合して扱った。

2) 表における数値は各学部の各問における総票数中、各項目の票数の割合であり、小数点第2位で4捨5入したものである。(範囲は99.9～100.1%とする)

3) その他の学部としては、人文、教養、法文、水産、理工、歯学部が含まれる。

(以下同様である。)

Ⅰ－B

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	19.4	19.1	17.9	21.1	8.1	14.0	16.1	15.4	13.3	9.1	33.3	16.7
2	22.6	27.7	32.1	10.5	21.0	14.0	9.7	24.6	24.0	9.1	33.3	21.7
3	12.9	6.4	3.6	7.9	17.7	12.0	12.9	7.7	10.7	0.0	4.8	13.3
4	29.0	23.4	10.7	18.4	17.7	22.0	29.0	23.1	26.7	54.5	9.5	21.7
5	0.0	7.4	28.6	28.9	19.4	20.0	9.7	13.8	10.7	27.3	14.3	15.0
6	12.9	9.6	0.0	7.9	3.2	8.0	16.1	13.8	5.3	0.0	4.8	5.0
7	0.0	3.2	7.1	5.3	6.5	8.0	3.2	1.6	5.3	0.0	0.0	3.3
8	3.2	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
9	0.0	2.1	0.0	0.0	6.5	2.0	3.2	0.0	4.0	0.0	0.0	3.3
総票数	31	94	28	38	62	50	31	65	75	11	21	60

Ⅰ－C

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	19.0	28.8	15.8	7.7	36.6	34.3	17.6	34.9	31.3	14.3	22.2	13.2
2	4.8	10.2	21.1	19.2	2.4	9.4	11.8	11.6	18.8	28.6	5.6	10.5
3	14.3	5.1	10.5	3.8	4.9	9.4	5.9	9.3	8.3	0.0	0.0	15.8
4	14.3	10.2	26.3	19.2	22.0	9.4	29.4	11.6	8.3	42.9	11.1	7.9
5	42.8	39.0	21.1	38.6	17.1	28.1	23.5	27.9	22.9	14.3	55.6	39.5
6	4.8	5.1	0.0	7.7	4.9	3.1	11.8	0.0	6.3	0.0	0.0	5.3
7	0.0	1.7	5.2	3.8	12.2	6.3	0.0	4.7	4.2	0.0	5.6	7.9
総票数	21	59	19	26	41	32	17	43	48	7	18	38

Ⅱ-D

(○)

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	32.1	27.4	27.3	24.2	20.0	23.7	9.5	21.4	25.0	8.3	11.1	17.3
2	32.1	19.4	9.1	9.1	13.3	21.1	14.3	16.7	18.8	33.3	14.8	15.4
3	10.7	24.2	27.3	27.3	28.9	26.3	19.0	19.0	20.8	8.3	22.2	23.1
4	3.6	6.4	18.1	24.2	4.4	7.9	4.8	11.9	0.0	16.7	18.5	9.6
5	10.7	8.1	9.1	6.1	13.3	10.5	23.8	23.8	18.8	16.7	7.4	15.4
6	7.2	8.1	0.0	6.1	4.4	0.0	19.0	4.8	8.3	16.7	18.5	9.6
7	3.6	6.4	9.1	3.0	15.6	10.5	9.5	2.4	8.3	0.0	7.4	9.6
総票数	28	62	11	33	45	38	21	42	48	12	27	52

(×)

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	3.4	3.3	7.7	0.0	1.9	4.9	3.3	5.1	5.4	0.0	17.3	4.1
2	3.4	12.1	20.5	6.2	11.1	13.1	13.3	13.9	14.9	0.0	17.3	16.3
3	13.8	14.3	7.7	15.6	14.8	9.8	6.7	10.1	4.1	33.3	3.4	10.2
4	34.6	27.5	20.5	34.4	16.7	26.2	30.0	25.4	33.8	33.3	24.1	30.6
5	13.8	11.0	12.8	9.4	16.7	19.8	13.3	13.9	5.4	0.0	10.3	16.3
6	31.0	31.9	30.8	34.4	38.9	26.2	33.3	31.6	36.5	33.3	27.6	22.4
7												
総票数	29	91	39	32	54	61	30	79	74	6	29	49

Ⅲ

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	5.6	4.8	5.6	15.4	2.6	9.7	4.5	4.9	2.0	20.0	20.0	10.8
2	50.0	55.6	66.6	50.0	64.1	41.8	59.1	53.7	44.9	60.0	40.0	51.4
3	16.7	12.7	11.1	11.5	17.9	9.7	9.1	26.8	14.3	0.0	5.0	13.5
4	5.6	1.6	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	5.0	0.0
5	22.1	25.4	11.1	19.2	5.1	29.1	18.2	14.6	34.7	20.0	25.0	18.9
6	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	0.0	4.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
7	0.0	0.0	5.6	3.9	5.1	9.7	4.5	0.0	2.0	0.0	5.0	5.4
総票数	18	63	18	26	39	31	22	41	49	5	20	37

Ⅳ-A

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	5.0	8.8	0.0	11.1	14.6	13.3	16.7	13.9	10.2	16.7	18.8	6.1
2	10.0	12.3	0.0	0.0	14.6	40.0	50.0	32.6	32.7	16.7	31.3	24.2
3	15.0	21.1	16.7	11.1	29.3	6.7	11.1	23.3	16.3	16.7	12.5	12.1
4	5.0	10.5	8.3	0.0	12.2	0.0	0.0	2.3	4.1	0.0	6.2	3.0
5	25.0	21.1	58.4	33.3	7.3	23.3	16.7	23.3	26.5	50.0	18.8	39.4
6	20.0	10.5	0.0	5.6	9.8	0.0	5.6	0.0	6.1	0.0	6.2	0.0
7	20.0	8.8	8.3	27.8	4.9	6.7	0.0	2.3	2.0	0.0	6.2	9.1
8	0.0	7.0	8.3	11.1	7.3	10.0	0.0	2.3	2.0	0.0	0.0	6.1
総票数	20	57	12	18	41	30	18	43	49	6	16	33

Ⅳ－B

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	14.2	26.4	18.2	22.2	36.6	29.0	11.1	33.3	34.7	0.0	16.7	29.0
2	28.6	37.7	36.4	27.8	26.8	54.8	27.8	40.5	44.9	75.0	38.9	32.3
3	28.6	20.8	27.2	5.6	26.8	12.9	55.5	26.2	16.3	25.0	33.3	32.3
4	28.6	13.2	18.2	38.8	4.9	0.0	0.0	0.0	4.1	0.0	5.6	3.2
5	0.0	1.9	0.0	5.6	4.9	3.3	5.6	0.0	0.0	0.0	5.6	3.2
総票数	14	53	11	18	41	31	18	42	49	4	18	31

Ⅳ－C

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	23.8	14.0	11.1	20.0	19.4	20.8	23.5	17.6	21.1	0.0	11.8	20.0
2	66.7	70.2	83.3	72.0	45.2	29.1	47.1	44.1	50.0	42.9	58.8	57.2
3	9.5	3.5	0.0	4.0	16.1	33.3	23.5	11.8	26.3	28.6	5.9	17.1
4	0.0	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	28.6	11.8	0.0
5	0.0	10.5	5.6	0.0	9.7	8.4	5.9	11.8	2.6	0.0	5.9	5.7
6	0.0	0.0	0.0	4.0	9.7	8.4	0.0	11.8	0.0	0.0	5.9	0.0
総票数	21	57	18	25	31	24	17	34	38	7	17	35

Ⅳ－A

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	42.4	50.0	50.0	57.1	46.8	38.6	42.4	40.0	45.2	40.0	44.8	47.2
2	15.1	16.0	17.9	11.4	9.7	8.8	6.1	15.3	21.9	10.0	13.8	9.4
3	6.1	9.6	0.0	5.7	16.1	7.0	9.1	6.2	9.6	0.0	13.8	15.1
4	18.2	4.3	3.5	8.6	9.7	22.8	9.1	27.7	8.2	20.0	10.3	9.4
5	6.1	2.1	0.0	2.9	1.6	3.5	9.1	0.0	1.4	0.0	13.8	7.5
6	9.1	8.5	17.9	8.6	9.7	7.0	9.1	6.2	8.2	10.0	3.4	3.8
7	0.0	3.2	10.7	0.0	1.6	1.8	3.0	0.0	1.4	0.0	0.0	3.8
8	3.0	6.4	0.0	5.7	4.8	10.5	12.1	4.6	4.1	20.0	0.0	3.8
総票数	33	94	28	35	62	57	33	65	73	10	29	53

Ⅳ－B

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	9.5	6.9	11.1	14.3	7.0	6.3	14.3	2.4	8.7	0.0	5.0	12.9
2	14.3	3.4	0.0	7.1	7.0	6.3	0.0	2.4	6.5	0.0	15.0	6.5
3	28.6	20.7	22.2	21.4	11.6	28.1	14.3	35.7	19.6	14.3	10.0	25.8
4	4.8	10.3	11.1	3.6	7.0	9.4	4.8	7.1	4.3	0.0	0.0	3.2
5	19.0	13.8	5.6	10.7	11.6	3.1	9.5	9.5	6.5	0.0	10.0	12.9
6	23.8	43.1	50.0	28.6	39.5	31.3	38.1	38.1	39.1	85.7	45.0	35.5
7	0.0	0.0	0.0	3.6	0.0	0.0	4.8	4.8	4.3	0.0	5.0	3.2
8	0.0	1.7	0.0	10.7	16.3	15.6	14.3	0.0	10.9	0.0	10.0	0.0
総票数	21	58	18	28	43	32	21	42	46	7	20	31

Ⅳ-C

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	5.0	3.2	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.6
2	5.0	4.8	5.9	3.8	7.7	8.8	9.5	0.0	8.2	0.0	15.8	2.8
3	15.0	8.1	0.0	7.7	17.9	2.9	9.5	9.8	8.2	28.6	10.5	16.6
4	55.0	54.8	88.2	57.8	48.7	52.9	28.6	63.4	59.2	57.1	42.1	50.0
5	20.0	21.0	0.0	26.9	15.3	14.8	42.9	22.0	18.4	14.3	31.6	16.6
6	0.0	1.6	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	2.8
7	0.0	6.5	5.9	0.0	10.3	17.7	9.5	2.4	6.1	0.0	0.0	5.6
総票数	20	62	17	26	39	34	21	41	49	7	19	36

Ⅳ-D

(i)

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	85.0	47.3	68.8	64.0	80.5	96.7	75.0	73.8	72.9	14.3	64.7	73.5
2	15.0	52.7	31.2	36.0	19.5	3.3	25.0	26.2	27.1	85.7	35.3	26.5
総票数	20	55	16	25	36	30	16	42	48	7	17	34

(ii)

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	0.0	0.0	5.3	0.0	0.0	3.0	5.3	2.3	2.0	0.0	0.0	0.0
2	4.8	8.3	5.3	0.0	0.0	6.1	10.5	4.5	0.0	0.0	0.0	5.7
3	38.1	25.0	42.1	20.0	33.3	39.3	31.6	29.5	26.0	28.6	11.1	14.3
4	4.8	8.3	10.5	16.0	12.8	9.1	15.8	15.9	12.0	28.6	16.7	8.6
5	4.8	6.7	0.0	8.0	15.4	15.2	5.3	18.2	12.0	0.0	22.2	8.6
6	33.3	23.3	31.5	36.0	17.9	12.1	21.1	20.5	24.0	28.6	22.2	31.4
7	9.5	16.7	5.3	8.0	7.7	0.0	5.3	2.3	16.0	14.3	22.2	17.1
8	4.8	11.7	0.0	12.0	12.8	15.2	5.3	6.8	8.0	0.0	5.6	14.3
総票数	21	60	19	25	39	33	19	42	50	7	18	35

Ⅳ-(i)

		文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
体 育 実 技	たいへん役に立 った	9.5	11.3	16.7	7.7	7.9	9.7	16.7	16.7	8.2	28.6	11.1	10.8
	かなり役に立 った	33.3	41.9	33.3	23.1	26.3	12.9	33.3	26.2	18.4	0.0	27.8	43.2
	あまり役に立 たなかった	38.1	29.0	38.9	53.8	44.7	38.7	11.1	33.3	46.9	42.9	33.3	37.8
	まったく役に 立たなかった	14.3	9.7	11.1	7.7	13.2	25.8	22.2	14.3	14.3	14.3	16.7	5.4
	以上のいずれ ともいい難い	4.8	8.1	0.0	7.7	7.9	12.9	16.7	9.5	12.2	14.3	11.1	2.7
	総 票 数	2 1	6 2	1 8	2 6	3 8	3 1	1 8	4 2	4 9	7	1 8	3 7
体 育 理 論	たいへん役に立 った	5.0	8.5	0.0	4.0	5.7	0.0	0.0	5.0	2.3	0.0	0.0	5.4
	かなり役に立 った	10.0	28.8	17.6	16.0	8.6	0.0	5.6	2.5	14.0	16.7	11.8	24.3
	あまり役に立 たなかった	50.0	42.4	58.8	36.0	48.6	48.1	44.4	60.0	46.5	50.0	52.9	45.9
	まったく役に 立たなかった	25.0	13.6	17.6	36.0	20.0	48.1	33.3	27.5	20.9	16.7	23.5	13.5
	以上のいずれ ともいい難い	10.0	6.8	5.9	8.0	17.1	3.8	16.7	5.0	16.3	16.7	11.8	10.8
	総 票 数	2 0	5 9	1 7	2 5	3 5	2 7	1 8	4 0	4 3	6	1 7	3 7
保 健 理 論	たいへん役に立 った	0.0	8.5	5.9	0.0	8.6	0.0	0.0	2.5	2.4	0.0	0.0	5.5
	かなり役に立 った	5.3	25.4	11.8	12.0	17.1	0.0	11.1	12.5	16.7	50.0	11.8	33.3
	あまり役に立 たなかった	52.6	44.1	64.7	44.0	40.0	51.9	38.9	50.0	45.2	33.3	47.1	33.3
	まったく役に 立たなかった	31.6	13.6	11.8	32.0	17.1	44.4	38.9	25.0	19.0	16.7	29.4	13.9
	以上のいずれ ともいい難い	10.5	8.5	5.9	12.0	17.1	3.7	11.1	10.0	16.7	0.0	11.8	13.9
	総 票 数	1 9	5 9	1 7	2 5	3 5	2 7	1 8	4 0	4 2	6	1 7	3 6

Ⅶ

	文学	教育	法	経済	理	医	薬	工	農	学芸	文理	その他
1	7.7	12.0	15.4	8.3	17.2	6.7	3.3	6.5	14.1	0.0	14.3	15.4
2	38.6	33.7	34.6	25.0	17.2	26.7	23.3	24.2	23.9	37.5	28.6	26.9
3	26.9	16.3	0.0	14.6	13.8	20.0	16.7	16.1	11.3	37.5	32.1	19.2
4	0.0	5.4	7.7	0.0	0.0	2.2	3.3	3.3	4.2	0.0	0.0	5.8
5	11.5	27.2	19.2	22.9	34.5	24.4	33.3	30.6	26.8	25.0	17.9	23.1
6	7.7	1.1	15.4	8.3	8.6	6.7	16.7	11.3	14.1	0.0	3.6	5.8
7	3.8	2.2	3.8	0.0	1.7	0.0	0.0	3.2	2.8	0.0	0.0	1.9
8	3.8	2.2	3.8	20.9	6.9	13.3	3.3	4.8	2.8	0.0	3.6	1.9
総票数	2 6	9 2	2 6	4 8	5 8	4 5	3 0	6 2	7 1	8	2 8	5 2

Ⅲ 卒業生の提言

§ 1 自由意見の概要

㊦ これでアンケートを終らせていただきます。ご協力ありがとうございました。

おわりに、あなたが教養課程で受けられた、一般教育・外国語教育・保健体育教育に関連して、ご意見やご提言があれば、これまでの設問に関係なく、何なりとお聞かせ下さい。

38年、53年卒業生から合せて120あまりの意見が寄せられた。出身学部間の回答分布は両卒業生に亘りほぼ同数で、一般教育に対して肯定的であれ否定的であれ、いずれの意見も積極的かつ真摯なものであった。

一般教育の必要性を主張している意見は、38年卒業生の42%（卒業年別自由意見総数に対して）、53年卒業生の23%であり、不必要とするものは、38年卒業生の2%、53年卒業生6%である。新卒業生ほど一般教育に対して批判的である。必要とする主張は、「実社会では広い見識が要る」、「専門外の内容を認識する手掛かりを得る」、「現在の学問領域の拡大分化や情報化社会においては、一層一般教育が重要である」、「一般教育は……無駄のようで大切」などである。

ところで在学時代の一般教育の受け止め方をみると、38年卒業生には「高校教育の延長」とする者5名に対し、53年卒業生にはほとんどない。これとは逆に、「一般教育の存在感がない」とする者は、53年卒業生7名に対し、38年卒業生では皆無であった。38年卒業生には、大学生活に余裕が感じられるのに対し、53年卒業生には、単位取得という束縛感、専門志向の焦燥感が見られた。一般教育の制度的保障（39年度）や施設、教官のそれなりの充実にもかかわらず、このような変化がある点を重視する必要があるだろう。

「高校教育の延長」あるいは「存在感なし」の者だけではなく、一般教育の必要性を強調する者も、一般教育の在り方、方法については、批判が多かった。批判の主なもの、「科目の選択の幅、受講の自由度の拡大」、「授業内容の改善」、「担当教官の教育熱の欠如」、「大教室授業の解消」、「ゼミ方式の導入」、「学生自身の勉学態度の改善」などである。これらの教育方法の充実、改善を求める意見は、38年卒業生の34%（母数は前と同じ）、53年卒業生の41%であり、とくに新卒業生の意見からは一般教育の形骸化が滲み出ている。

アンケート結果の大勢として、一般教育の必要性・重要性が是認されていることは、意を強くするところであるが、一般教育担当者あるいは機関が現状に安住し手を拱いているならば、一般教育は社会から見離されることになるだろう。

§ 2 38年卒業生の提言

(1) 文学部

(1)「大学教育にたずさわる人々は、もっと一般社会を知るべきである。例えば高校までの教師は、実社会を知ってから教育界に進むべきで、大学卒業→教育界という図式は何らかの形で改善すべきである。現況の教育荒廃の一端は、ここにあると思われる。」

(2)「大学を卒業して各界で活躍する中で、まわりの人に「なるほど大学卒だ、実力がある。」と思わせるものの1つに、外国語会話能力があります。どうか大学では、広く世界に伸びていく日本を背負う大学生全員に、2ヶ国語の会話を単位として必修にしてくださいお願いします。」

(3)「一般教育は高校の延長のような感じであった。大学は学問を学ぶところと思ってきたが、その点で何でこのような単位をとらせられるのか、わからなかった。」

(4)「専門課程（分野）に進むための、それに密着関連した概論講義なり導入的紹介をして、学生が学部へ進んだ場合、直ちに専攻できる体制をとるべきだ。一貫した綿密なカリキュラムを研究して備えるべきであると思う。」

(5)「外国語教育においては実社会の必要性和あまりに離れ、又それが大学教育であるという先生方が大多数であった。現在は、ずい分改善されている様です。

一般教育については、高校の授業の延長の様な感じで、学問の楽しさを解らしてくれたのは、2, 3科目に止ったと思います。

保健体育については、もっと厳格であって良かったと思います。先生方の遠慮があったのか、自由でありすぎた様に感じます。」

(6)「学部、学科を区別せず、国立大学には語学演習センターのような独習システムを設けてはどうか。

一般教育の中で、高校の受験勉強とは一味ちがった心のゆたかさを見出すことが多かった。無駄のようでも大切な。

保健体育教育に関しては、団体競技を特に重要視したい。個々の技はクラブ、サークルでみかける。」

(2) 教育学部

(1)「幅広い教養を身につける意味で、一般教育は大変必要だと現在も認識しています。すべての大学で、一般教育が充実されることを希望します。一般教育はその理念を追究しつつ、それ

に沿うように全体を構造化した内容を、用意することが必要である。外国語は16単位以上の教育をしなければ、功を奏さないと思う。」

(2)「恥しいことですが、大学入学の目的が希薄だったと思います。その点で、専門的分野の学習が不徹底だったと後悔しております。入学式の日、学長が「2時間の講義には倍の4時間の学習が必要である」と話されたのが、今も印象にあります。」

(3)「全教科が優秀という人は少ないと思う。教養課程で、苦手なものをもう一度（中・高校の内容から）やることはできないものだろうか。外国語（英語）に初級（中学校の単語内で）会話があるとよかったと思う。」

(4)「制度をよりよいものにすることが大切だが、その制度を実際に運用する人によるところも大いにある。一般教育においても、忘れ得ぬ師が出るような人材が必要であろう。そのためには、ただ進級のために単位をとるだけのものから、興味、関心による選択をふやしていけば…。」

(5)「高校教育が、大学受験を意識せざるをえない現状を考える時、大学の教養課程といった、総合的に人間陶冶の場は是非必要だと思います。直接目的的な行動にめりつづされた現代、専門教科の修得は、学生個人個人、必要にせまられてやらざるを得ないのではないのでしょうか。それ以上に、人間教育に大学は力をそそぐべきだと思います。これで専門教育への対応がむずかしいというならば、現在の単位認定の基準をきびしくしていく方向も、考えてよいのではないのでしょうか。大学生としての誇りは、偉大なエネルギーを生み出すものだと思います。人間として完成し、自覚が生まれ、専門家としての誇りをもつ時、専門的能力は、自然と獲得への方向へ向かうものだと思います。」

(6)「情報化社会の進展にあわせて教育内容の厳選、方法の改善が望まれます。大学の使命は科学の進歩だけではありません。より良い人間社会、自然環境の再生、再建のために生涯をかけて献身的に努力するような学生を、社会に送り出すことだと思います。一般教育のあり方が、そのための鍵をにぎっているように思われてなりません。」

(3) 法 学 部

(1)「20数年も前のことなので、はっきりしませんが、語学の時間(特に英語)が多かったように思います。家での勉強も語学中心で、一般教育の方へふり向ける時間が少なかったように思います。英語は高校である程度やっているのでもう少し少なくともよいのではないのでしょうか。語学は講読も大事ですが、実社会では、会話も大事です。」

(2)「企業活動の国際化に伴い、どの企業においても大なり小なり英会話の能力が必要となって

いる。教養部における最近の語学教育が、どこに力点がおかれているか承知していないが、ヒアリング、会話にある程度のウエイトをおくのが望ましいと思う。」

(4) 経済学部

(1)「米国で教育を受けた経験と比較すると、日本の大学は教育する熱意が殆んどないのではないかな。」

(2)「教養課程は、今後、益々必要である。専門というが、人としての考え方、見方などの訓練、更には、人としての調和などそれなりに、人生に重要な問題に、大変役立っていると思っている。」

(3)「記憶が薄れていること、現在の大学の一般教育について知識がないことなどのため、見当違いかも知れないが、我々の世代は高校時代の受験勉強偏重の中で、教養課程は非常に重要なものだったと考える。しかし内容についてはあまり一般的で、焦点が定まらないものが多かったのではないかな。」

現代は情報が氾濫し、小学生時代から知識の向上は非常に著しいものがある。それが故に大学の教養課程は重要で、もっと質を向上し、内容も系統だったものにすべきである。本質的な物の見方を教える内容と、社会生活ともマッチする内容とを十分組み合わせるべきだと思う。」

(4)「私の入学は、新制大学発足後10年目くらいでしたが、当時、先生を含めて先輩方が、旧制の方が多く、この方々が、漢詩を吟じ、ドイツ語で謡い、テレビドラマで裁判ものがあると、法律書をひもとくという、私共から見るとかなり格調の高い勉強をしておられ、自分達の勉強が浅く広くという方針のせいだと思って育ちました。今でも、この浅く広くは社会に出て抜けておらず器用には生きているものの、ある部門の柱として育つのでなく、右顧左眄して生きている感じがします。」

国立大学として国家予算を使って教育する訳ですから、国の有為な人材を育てるべく、個性のある教育をめざすことが大切だと思います。」

(5)「教養課程は愈々長くなって来た生涯における、益々意義、重要性を帯びて来ているように思われる。蓋し、日本人の教育期間の内、「自由な」解放された時間及び心身共最も強壮な、主体的条件に恵まれた数年はないからである。高校迄の教育の成果に立ちつつ、それに総括を加え、反省し、将来の専門教育ないし卒業後の自己教育に実りあり、かつ持続的陶冶に結びつけるのもこの時期である。」

専門的教育は、本来的には教養のそれに比して易しいと思われるが、学部教育以上に能力、志操の点で勝った人物を採用し、殊に人文・社会科学的科目の充実〔歴史、哲学、政治、経済学等の一層細分化した、並行した複数講義開設〕、語学の現代的要請にかなった改変—会話力修得を必須・絶対的通過点とする。会話を単に技術的なものと軽視したり、それ故に自己努

力に委ねたり、外部の専門学校の領域に任せればよいと考え、大学の与えるところではないとするのは、語学教育に画龍点睛を欠くものである。それに古代中国の、又ドイツ・ギムナジウムの教育思想にある如く、体育教育の拡充が必要である。専門教育は学部でも、大学院でも、企業でも、又電車の中でも出来ると思えるのは、却って教養偏重主義であろうか。教養課程の軽視をやめ、かつその期間の学問エネルギーを喪失せしめる受験体制、共通一次を見直す必要があると考える。」

(5) 理 学 部

(1)「J. パジール曰く『これからの組織人として最も必要とされるタイプの間人は、教養5割、専門知識2割5分、そして残りの2割5分が創造力によって構成されている人間だ。』この考えに全く同感です。専門知識に釣合うだけの教養が不足していると、人間としてのバランスが崩れてしまい、ついには人間の問題が理解できなくなってしまうでしょう。また一方、専門知識と熟練した技術を持つ人達が、手順に従って仕事を進めるのが研究であり、業務の基本的プロセスと考えています。その結果をまとめるのが創造力であり、それを養っているのが教養全般と考えています。大学の教育制度をいろいろといじくりまわしても、埒があかないと思います。小学校からの偏差値教育絶対反対です。日本の文化の衰退の原因になると考えています。偏差値教育からは『失敗を通して賢くなる、賢くなるための失敗だ』という考えはできません。」

(2)「一般教育――必要である。単一科目、総合科目共に並立させ、内容を明確かつ概略を明示し、自由に選択させる。

外国語教育――高校までの教育で実際の活用までの教育を行ない、大学では専門分野に関連する講読を中心に進める。」

(3)「何かをやろうとする場合、専門的な知識は容易に得られるもの。しかし、哲学、心理学、文化史etc. 一般教育的なものは、大学時代の教養課程がベースとなっている。そのベースがあって、はじめて自分で勉強しやすくなるような気がする。」

(4)「ある発想をする時には、自分の専門のことより、全く別の分野の勉強や読書あるいは見聞が、大きな役割をはたすことが多い。その意味で、大学の教養時代の哲学、心理学、文化史、歴史類等は非常に大切である。」

(5)「現在の大学教育は、あまりにも社会で役に立つ学問という考え方が、強すぎると思います。学問としての一般教育は、社会で役に立つか否かにかかわりなく、その人個人に長い人生を生きる喜びや力を与えるものでなくてはならない、と思います。この場合、特に興味・関心に重点をおいた一般教養が望ましく、選択の幅を最大限に大きくした体系を組む方向に向かうべきだと思います。」

(6)「一般教育における自然科学(理学部入卒の故に)、及び実技を除く保健体育は時間のムダであった、と思っている。」

(7)「一部高校教育と同じ程度の感がするものがあるが、それはそれで良いと思う。なぜなら高校で履修できなかった分野を深める(?)為に必要と思うし、もっと単一科目にとらわれない教養科目(Ⅷ)を多く開講すべきである。又、専門的なことでも一般的理解が得られるものは、一般教育や、他学部の学生に自由に聴講できるようにすべきと思う。このままでは、私立大学に学生が走るのではないだろうか。」

(6) 医 学 部

(1)「一般教育としては理科系の学生として、文科系の教科を教養課程で受けたことは、学問の幅を広げ専門馬鹿とならないためにも、有益であったと思っています。とくに西洋哲学や東洋哲学の講義は印象的でした。」

外国語教育については、その外国語の母国人による講義が全国の大学で受けれるようになることを希望します。私の時にはそれがなかったので残念でした。保健体育教育は義理で講義をうけるような、まったくつまらないものでした。我々の時のようなものでしたら、廃止した方がよいと思います。」

(2)「医学進学課程に入学し、一般教養を受けたが、語学以外は他学部の人達と一緒に講義を受けたように記憶しています。教養の2年間で知りあった他学部の人々の影響は大きいものだったと思います。」

(3)「今後ますます高齢化に向かう社会なのだから、1～2年の修業年限延長は、問題ないのではないか。専門にのみ偏ることのない、円満な社会人としての教育も必要である。」

(4)「大学としての学生に対する要請が明確と云い難い。各学部において教育した学生を自信をもって社会に送り出すためには、少なくとも教授仲間での教育ガイドラインについてのコンセンサスが必要である。これが明確でない限り、要請は無限に拡大して、修業年限の延長も意味をなさない。」

なおこの場を借りて云えば、国立大学の理学部の教育は、学生の思考と学問的姿勢の柔軟性を損い、硬直化した学問的価値観を唯一絶対のものとして植えつけている危険がある。猛省をうながしたい。」

(5)「外国語教育について。外国語の文章を読解できる能力をつけると同時に、外国人とある程度の意志の疎通ができる会話力も又必要である。外国の伝統、外国の一般的な思想、哲学観、宗教的考え方などを学ばせる努力。これはⅧの総合科目の1つのテーマかも知れないが、外国語教育(英文学教育など)でも考慮されるべき点と思います。」

Ⅱの設問の総合科目をお座なりでなく、各方面の教官の能力と熱意を集中してテーマを1つ1つ積み上げて行く努力が必要である。現在の講座制の中では最初から、過大評価はできないので、試行錯誤があっても地道に続けるべきである。」

(6)「教養課程は字義通り教養を身につける課程であって、あまり、専門の分野をとり入れるべきではないと考えます。幅広い知識と同時に問題のとらえ方を学ぶことが大切で、即効性はなくとも人間形成の上でじわりと効いてくれば、2年間は決して無駄ではない。ふり返って、今でも印象に残る講義は、理科系、人文系を問わず、そんな事を教わった講義でした。その意味で教養課程のスタッフの責任は、非常に大きいと考えます。」

終わりに小生、只今、公立病院で若い研修医を指導する立場にありますが、総合大学医学部出身者は単科医大出身者に比し、能力に差はなくても、物の考え方の広さにおいてすぐれている、との印象を受けております。」

(7) 薬 学 部

(1)「全ては忘却の彼方にありますが、あのゆるやかなカリキュラムの中で自ら模索し、読んだり、議論したり行動したり、考えたりの日々は何物にもかえがたい。あのゆるやかさ、ちょっとしたいいかげんさ、専門にとらわれない大らかさは、ぜひ今後とも残しておいてやりたいと思う。」

(2)「今後より専門化するであろう社会において、大学教育が根底になると考えますので、一般教育も軽視しないで、人間の底辺を広くしておくことが大切と考えます。又、高齢化社会になりましたので、教育期間も延長してもよいのではないかと思います。あるいは、修士課程の充実でもいいかと思います。」

(3)「社会の進展、科学の発達にともなって、教育内容が高度化し、教育内容に問題が生ずるのは当然の理と思われます。しかし、あまりにも表面的な問題にとらわれすぎて、制度を変更するあまり、本質的な問題を解決する事なしに、新しい制度に振りまわされている傾向がたびたび見受けられます。制度以前に、本質的な問題は何かを考えるべきです。」

(4)「外国語教育について、もう少し実用性がある教育が必要と考える。英語を「言葉」としてでなし、「語学」として教えるという教授方法に疑問を感じる。小生は外資系企業に勤務しており、現在は業務上、実用としての英語を使いうるが、大学卒業者が、ほとんど実用にならぬ英語（及び他の外国語）を大学で履修してくることに、いつも閉口させられている。ヨーロッパ、アメリカ系の人々の場合、外国語を履修したことといえば、まずコミュニケーションができると理解されている。その様な人々の中で、日本の大学生が卒業までは少なくとも8年間も外国語を習っているというのに、いつも恥かしさをおぼえる。」

(5)「保健体育の教育は高校までで十分。大学までは全く必要とは思えない。」

(6)「理工系の専門教育は極めて技術・技能教育と、自然科学的理論の教授に傾いているが、社会に出て役に立つ人間に育てるためには、専門教育の終りの時期に専門教育と人文・社会とのかわり合いを重視した「人文総合科目」があってもよいのではないと思う。」

(8) 工 学 部

(1)「多様化する世の中であるから、一般教養は重要であると思う。」

(2)「一般教育（社会、法学、経済等）については、もう少し実社会で役立つもの、又は役立たせるため卒業後、自分で勉強を始めるための導入教育的なものがあってもよいのではないと思う。」

(3)「一般教育は、専門課程への基礎科目として行なうのが、卒業してからは、結果的に良いと考える。いわゆる一般教養科目は、社会人となり目的意識をもって自主学習するのが実際の役立つ。身の回りのレベルに応じた専門、関連書は十分存在する。」

(4)「一般教育について言えば、創造性をたかめる思考方法、問題解決方法など現在までに開発された手法を実践を通じて教育してほしい。VE, KJ法など数多くある手法を取り入れるべきである。これからは、外国の技術を日本に移転するだけであってはならず、創造的人間による国産技術の開発が不可欠である。また特許についても基礎教育が必要である。」

(5)「外国語については、専門分野に関係のある内容とすべきである。専門書の読解が出来る程度のハードな教育が必要である。授業では、会話はいっさいなかった。講読と会話を十分に混えた教育が、国際人の育成に是非必要だと痛感している。英語は読み書き、話すことができないとどうにもならない時代となっているという認識を持たせ、また第二外国語については、読めるということは勿論、書ける教育を行うことが必要だと思う。」

(9) 農 学 部

(1)「専門教育を受けても、必ずしも専門分野での仕事につけない人が多く、私の体験からは、教養部時代の幅広い知識の吸収、人との交流、体力増強により、実社会に出てからの活動に大きなこやしになったと思う。教養課程では、専門基礎科目の教育の他に、将来専門分野での研究活動や、実社会で役立てる場合の自分自身の思想のバックボーンとなるものを得るための、知識や「考え方」の教育をすることが必要であると感じる。あまり企業や実社会ですぐ役立つ学生を送り出すことばかりを考える必要はないと思う。」

(2)「六・三・三・四の現学制の中で、「学問の神髄」に触れたと感じたのは、大学時代の教養

課程で学んでいる時であった。この時に始めて、大学に入って良かったと感激したことを覚えている。専門的知識は、もちろん大切であるが、それ以前に「学問とは何か」を知る必要があるのではないか。」

(3)「大学教育では、受験勉強から解放して、学問の楽しさのようなものを感得させるような講義をしてほしいと思う。そのためには、学生と教師との接触（ゼミのような）や、学生同志の議論の機会を多くするなどの方法が良いのではないだろうか。」

(4)「外国語会話ができないのが残念である。特に外国語教育は1クラスの人数を少なくとも30名以下として、じっくりと、とりくんでほしい。特に英語においては単に訳すのみでなく、英語全般をゆっくりと、わかりやすくすすめるべきでしょう。量よりも質ではないかと思われます。」

(5)「外国語教育では、第二外国語の種類をもっと増やして、自由に選択できるようにしてほしい。私はスペイン語やイタリア語、ポルトガル語に興味があったが、それらの教科はなかったので残念であった。」

(6)「大学卒業者に求められるものは、一般人より広く豊かな知識を備えていることと、特定の分野に卓越した知識技能を有することであると思う。今日の六・三・三・四制の教育制度の実態、大学進学率、卒業後の進路を見た場合、学生の主体性が全く希薄である。中卒と区別のつかない大学生、高卒より考えない学生の氾濫は、国家、社会は求めているのではないか？今真剣に考える必要のあるのは、大学における一般教養の充実であると思う。」

(10) 学芸学部

(1)「在学中はそれほど力を入れて学習しなかったためか？年月がたつにつれて、まじめに学習しておけばよかったなあとすることがしばしばあった。特に自分の専門から遠くはなれたことを、もうすこし勉強しておけばよかったと思っています。大学での学問は直接には役に立たないかもしれませんが、社会で学ぶ実学のための土壌はきちんとつくってやるのが望ましい、と思うがいかがでしょうか。」

(2)「こちらの意欲の問題もあると思うが、大学を出ても外国人と簡単な英語の日常会話すら出来ないような英語の学習では困る。(リーダーの読解中心だった大学での学習方法から)」

(11) 文理学部

(1)「情熱と研究心のない教師が、大学生の学問に対する情熱と研究心を失わせると、自分の体験から痛感している。私は、高校教師ですが、大学の先生は、学問の「研究者」であることと、少なくとも同等に考えとりくんでもらいたい。」

(2)「一般教育は、視野を広げる意味で、重要と考える。高校での学習は、単に覚えるという性格が強いが（本来あるべきでないが）、大学の一般教育は考える学習である。目先の利益、即実社会で役立つ事に重点をおくのではなく、もっと広く教養の身につく長期的展望にたった改善を望みたい。」

(3)「高校教育との重複を避ける意味で、より専門教育と密着した内容であることが望ましい。」

(4)「外国語教育はもっと実用教育にしてほしいと思うし、また、保健体育はサークルで良いだろうと思う。保健体育の授業は実にいいかげんなものであった。青年期の若者に体力づくりと体育にうちこむ楽しさを味あわせてくれるような体育教師を大学にもほしい。」

(5)「外国語教育に関して言えば、第二外国語は、将来学者になるとか、外国語を使うところに就職する場合は、効用があるが、そうでない場合は、時間と労力を費やしたことが全く生かされていないと思う。選択によって単位を軽減してもよいのではないかと思う。」

(12) その他の学部

(1)「全体として、一般教育の必要性はわかるのですが、1、2年時に集中してとるのではなく、4年間の計画を学生本人が立ててはいかがでしょう。（法学は1、2年時にかなり集中させる必要はあるのでしょうか。）専門教育を一部やった上で、それと関連させて教養科目をとる必要がでてくる場合もあるでしょう。弾力的な運用が望まれます。」（教養学部）

(2)「specialist と generalist の両方が社会には必要であり、専門課程重視のあまり一般教育、外国語教育が軽視されるのはよくない。「4年間を通じて general」というコースの選択の道も、もっとあって良いと考える。その上で、更に深く学問をしたい者は大学院の道を選べば良い。」（教養学部）

(3)「一般教育の内容は高校教育の二番せんに近いので、大学ならではの内容にするとともに、専門のウェイトを高くした方が社会に出て役立つと思う。」（法文学部）

(4)「図の解説にあるように、中等教育の指導要領の改正に伴う高校卒業生の平均学力が低下すると予想されるとすると、私達の頃と事情が違って、より一層の教養課程の充実が問われることになり、そのために大学の修業年限を1年延長してこれにあて、専門教育に対応できる学生を培わねばならぬかと思われる。」（法文学部）

(5)「語学教育の目的は、最終的にはその国語を使う国の歴史、風土、習慣を多少でも理解することにあると思うが、従来の大学の語学教育は（今はどうなっているか勿論わからないが？）高校の延長であった気がする。」（水産学部）

§ 3 53年卒業生の提言

(1) 文学部

(1)「現代の社会問題とかかわるような総合講座を増やして、選択の範囲を広くして欲しい。」

(2)「外国語はもっと実践的英会話もとり入れて欲しい。」

(3)「外国語教育のなかで、LLを利用した実用的教育法は実社会に出ても幾分役立つものであったが、ⅢCで取り上げられたような講読中心の教育にどうしても重点が置かれていたように思われる。これでは、高校までの外国語教育と同じであり、現代のような外国語を必要とするような社会状況の下においては、実用教育にもう少し重点を置くべきではないだろうか。特に語学系の学科に進まないものにとっては、後々に耳にするであろう他国語を目で見て理解する力よりも、より多くの生の音に接しておく方が親しみがあがり、理解につながるのではないだろうか。」

(2) 教育学部

(1)「学生自身が、もっと教養課程に関心をもつ必要がある。私自身、専門に入るための一部分としか考えていなかったようである。今は、もっと教養課程を大切にすればよかったと反省している。」

(2)「専門課程が、一般教養の内容を安易に制限しているのが見うけられた。専門でなかなか身につけられにくいものを、広く浅く受けたかった気がする。」

(3)「一般に教養課程では、単に単位修得のみが目的で、受講しているものが多かったように思う。学生が興味関心を示して受講するような、講義内容であってほしいと思う。もっと出欠を確実にとり、内容を確実に履習していないと、単位がとれないようにすべきである。」

(4)「英会話の必要を特に感じる。第二外国語は、授業時間が短かったため身につかなかった。英語は中学校以来やっているのだから、役立ったように思う。個人個人必要に応じた外国語を履習するようなカリキュラムにしたらいのではないかと思う。」

(5)「入試体制にも問題があると思うが、やはり偏差値一辺倒ではなく、各大学の特色、個性(カリキュラムなど)によって、入るべき大学を選べるようにしたいものである。何か、共通一次ができてから、個性のあるそして本当の求学心のある人間が、疎外されてしまっているような感じがしてならない。職場においてバリバリやるのは型破りな人間なのです。」

(6)「大学入学当時は、早く専門教育を学びたいという要求が強かったため、教養課程での学修にあまり意義を感じなかったが、卒業し数年後にふりかえてみると、広く学問への興味関心を持つことができ、よい経験だったと思う。」

(7)「文系の学生に対する理科系の教養科目、理系の学生に対する文科系の教養科目は、“この程度で十分であろう”ということだけでなく、その『考え方』の基本的なところを正確に教えねばならないと思う。専門外の教科の場合、教官は自分が最後の指導者であることを自覚し、責任を持って教授して欲しい。作文の書けない理科系の学生や、コンピューターを毛嫌いする文科系の学生は、自分の知識を活かして行くことができるだろうか。」

(8)「語学の修得には長い日数を要することを、誰でも知っている。そこで、教養課程の2年で終わるのでなく、4年間続けるべきだと思う。4年まで語学を学べば、その後も語学を続けようという者が増えるだろう。」

(9)「授業がマンモス化していて、予備校のような感じがした。もっと少人数で学び、教授たちからもっと深く教えてもらいたかった。結びつきが弱い。在学当時、校舎が2ヶ所に離れていて通学するのに間にあわず、選択不可能で残念な科目があった。今は、総合大学で1ヶ所にまとまっていて良いと思う。」

(10)「一般教育、外国語教育、保健体育教育いずれも大学時代にはそれなりに役に立ち、必要であったような気がするが、実社会に出て、不足であると感じたのは専門の知識であった。教養課程で学んだものの中には、生活の中で（自分で努力さえしていれば）得られるものも多いように思われるので、外国語教育の内容を充実させ、専門教育の方に力を入れる方がよいと思う。」

(11)「私の出身大学の一般教育、外国語教育（語学センター）は、大変すばらしいものでした。欲を言えば、教養部図書館のみならず、図書館をもっと充実させることを期待します。アメリカの大学のように夜の10時や11時まで開いていてくれると、大変に有機的な自主学習ができ、一般教育と専門との効率的な把握ができるでしょう。また保健体育教育に、ハンディキャップをもった者に対する配慮が私の大学の場合、よくゆきとどいていました。この点も他の多くの大学に期待しているところです。」

(3) 法 学 部

(1)「一般教育については、総合大学では、もう少し学部という枠にとらわれないカリキュラム編成をすれば不要になるのではないか。」

(2)「外国語については、どうせあまり役に立たないことをやるなら、英語以外のことばを中心

にするようにした方がよい。（実用的な英語は大学外でも学べる）」

(3)「国立大学協会からのアンケートということであったが、国立大学が一律に、一般教育に関し同じ制度とするべきでなく、学部単位で考えてゆくべきである。」

(4)「大学4年間で、一般及び専門の両方を身につけられるものではない。専門というのは、学生が自分で選んだものであり、自分で学び、研究すべきであり、大学はその手助けとなればよいわけであり、それを大学を通じて専門ばかり教育すべきではない。大学は実社会では学べない一般教育こそが中心におかれるべきである。ましてや国家試験のための大学であってはいけないと思う。最近、二重学籍の学生が増えているが、英語や法律、経営等、実務的知識は専修学校で修得し、大学では一般教養を身につける。こういう形も良いと思われる。大学は、天下国家を論じ、人生について悩む所である。」

(5)「『実社会に役立つ卒業生』とはなんのでしょうか？ 役立つ卒業生がいるのでしょうか？ 大学だけが実社会に役立つ人間を教育しているのでしょうか？ 社会に役立つ人間がいるのでしょうか？ 社会に役立つとはどういうことでしょうか？ 大学そのものは社会的に役立っているのでしょうか？ もっと役立つ方法はないのでしょうか？ 4年間という期間は、専門の学問をするのに、十分な時間ではありません。したがって、大学はもともと4年間で十分な知識を伝えることもできていなかったはずですが、大学は何をしようとしているのでしょうか？ 何をしてきたのでしょうか？ 大学にとって学生とは何なののでしょうか？」

(6)「『知識教育』を主眼におくならば、私の在学中の大学は、制度そのものが甘すぎました。学生の自主性を尊重することは、大学の責任の放棄ではなかったのでしょうか。単位制、必修制、講義方式等「目的」に沿った改善が必要でしょう。「目的」の明確化と、その目的意識のためのシステムの確立が必要だと思います。」

(7)「外国語教育においては、実技（会話）を充実させるべきであると思います。」

(4) 経済学部

(1)「ちょうど新聞で、『教養課程は放送大学で』という記事が載っていました。時代が変わったなあと思うとともに、本当にそれで勉強できるのだろうかという気がします。確かに大講義室で授業を受ければ、先生の顔も充分に見えないこともありましたが、それなりにあたたかさがありました。やはりその時々熱気は、教室でなければ受けられないと思います。それこそ知識をつめこむだけの教養課程にはしないで下さい。

再び英語について。講読だけの英語の授業なんて絶対に無意味です。」

(2)「大学は人間形成の場と考えます。専門教育にかたよることなく、社会人としての教養を身

につけるためにも、一般教育の充実を希望します。社会人としての現在、それを切に感じている次第です。

私自身の経験した講義・教育の内容は、その後社会人となってから受けたセミナーや講習にくらべ格段にすぐれていた。当時、軽く見ていた事が後悔される。何にも増して、学生に対して伝えるべき内容を持った「教師」の存在が大きいと思う。すぐれた教師は、専門が何であれ、その教授方法がどうであれ、学生に影響を及ぼすものだと思う。」

(5) 理 学 部

(1)「一般課程(一般教育、外国語、保体を含む)は総じてムダが多く、非効率な面も多々ある。大学だけでなく、中学、高校までさかのぼり一貫性のあるカリキュラムを組まなくては、専門がますます圧迫される。なんのために共通一次試験は、5教科7科目という重負担を高校生に強いているのか。内申書もさることながら、専門に偏らぬ幅広い知識や教養を、高校卒業段階ですでに求めているではないか。このうえ、現実には空洞化した一般教育を課すことは、専門の拡充を求める世の流れに逆行するものであると言わざるを得ない。

一方、一般教育そのものの意義は、今なお大学でも十分に存在する。複数の専門にまたがる総合科目や、高校では扱わない高度な内容、専門科目の基礎などは欠くことはできない。結局、単位数の問題ではなく、内容の問題であり、現代の流れと実社会の要求に合致した「質」が、今、問われているものと考え。大学進学のもっとも大きな意義は、専門科目の学習であることを考え合わせると、「一般」はその頂上をきわめるための「すそ野」と考えることができるのではないだろうか。」

(2)「残念ながら、私の場合、教養課程の重要性を知ったのは、大学4年でゼミをしたころからであった。視野の狭さ、知識不足はゼミを楽しくないものにしたし、自分が残念でならなかった。一般教育等の重要性を早く学生に認識させてほしいと思う。」

(3)「教師の好みによる講義内容だけでなく、常に学生のアンケート等を取り入れるなどして、改善に努めるべきである。講師により講義の善し悪しが大きすぎる。」

(4)「もっと生徒に厳しい授業をしても良いのではないかと思います。(受ける側の態度も問題であると思うのですが)」

(5)「教師が一人よがり、学生に伝達のみを行なうのは考えものだ。学問の真実を見すえつつ、学生の進路や立場も考えて、カリキュラムに生かして欲しい。『教養だから……』と程度を下げず、どの分野でも通ずるその学問の真髄を伝えていいと思う。学生にもっと厳しい勉学の要求をしていいと思う。しかし学生の自由に使える時間は最大限保障すべきであり、しめつけは絶対反対である。学ぶ者には自由にいくらでも学ばせ、サボル者には自由にいくらでもサボらせて落すのが良いでしょう。」

(6)「教養課程での教育を、学部進級のための単なる step と考えている者が多いと思う。そうした意識的低下が、専門教育を受けるにふさわしくない学生を、多く作り出しているという感じがしてならない。もう少し教養課程での単位認定の基準を引き上げることにより、思想的に高い学生を生み出して欲しいと思う。」

(7)「一般教育では、できれば広い範囲で学問の紹介をしてもらいたい。その学問というのは、その研究方法や、今日の課題、要望、今後の展望等を含んでのものである。そういうことに接すれば、ケーススタディ的な体験をつむことになり、将来、自分の仕事、研究の幅がひろがると思うし、それをとりいれた総合的な見方もできるのではないかと思われる。」

また、大学をでると、教育（社員教育などもふくめて）にたずさわる立場につく可能性が高い。そこで、心理学等のできれば実践的な授業（概論的ではなく）を多くしてくれたら、将来、人の上にたち、指導する場合、役に立つのではないか、また、教育するということにより、自分も人間的に成長すると考える。教師になるものだけが教育者ではなく、人の上にたつ者すべてが教育者だと私は思う。その意味で、これから大学教育は、専門以上に一般教育が重要である。それらが、次の世代を育てることになり、広い意味で非行などの原因を少なくするのではないかと思う。」

(8)「一般教育に対する疑問が、特に聞かれるようになって久しいような気がするが、高校教育と比べて、一般教育が、必要でないとか、おもしろくないとか、専門が大事とか言う意見は、教養、一般教育についての学習不足が原因なのではないだろうかと感じている。最近の大学入試、受験体制などを見ると、一般教育の必要度はより増しているのではないか。そこで、教養部の充実と教養部の存在に対する意義の確認、教養部内の意志統一などが必要なのではないだろうか。疑問に感じられる時こそ、もう一度初心に帰り、意義を見直すべきと思う。」

(9)「いろんな講義をうけてみて、本当に学問をやっているなあ、と実感したものはほとんどなかったように思う。それよりも、学生同士の活動、大学自体の考え方や態度、人間の考え方など人づきあいの面で、大いに勉強になった気がする。実際に、一般教育をまともに受けていた学生は殆どにも満たなかった。大学だけの問題ではなく、教育全体の流れとして考え対処していくことが必要ではないでしょうか。」

(10)「保健体育の実技は、大学生活の中でもかなり大きな楽しみで、高校までと違って、①時間の長いこと、②1週に1度しかないこと、がその気分を高めた原因かとも思います。特に私は理工学部でしたので、女子全員を集めた15人と、化学科男子と一緒に実技は行なわれ、そのため、ウェイトリフティングが経験できたことは思い出となっています。春休みにとったスケートの講義も、たいへん面白くためになりました。3年、4年にも体育は続くとよいがと思いました。」

外国語は、英語についていえば、何もありませんでした。第二外国語はかなり面白かったも

のです。

一般教育は、専門でないためもあった、楽しんで選びました。2学年以降は好きな教授の講義を続けてとれて、高校までと違い興味をもって講義にのぞみました。」

(6) 医 学 部

(1)「1. 一般教育不要 2. 外国語は1科目とし、会話、作文、手紙 etc. 実用的な時間をもつ。 3. 保健体育は全く不要

医進課程にて2年間に在籍したが、何もいうものも、専門課程に役立つものもなかった。ただ、サボリグセがつくのみにて、当時のフレッシュな頭が硬化した気がする。専門課程は、はやく入りたかった。専門の一部でも下がってれば、張りがあったと思う。今考えてみると全くムダな(大切な時間を失った)時間だった。 外国語も、専門基礎でいいのではないかと思います。同級生の多くも同じ意見でした。」

(2)「大学入試がたいへんだったため、教養課程ではのんびりしてしまった。学生の教育を受ける態度が問題かもしれない。教養課程でもある程度、専門と関連づけた方が、少しでもやる気を起こさせることが出来るかもしれない。」

(3)「教養課程は、ぜひとも必要である。私の通ってきた医学教育の中では、医学以外を知る機会をもっと多くする方が良いと考える。医学部にきて、ここを卒業すれば医者になるしかないと考えている、考え方の狭い人間しかいないのが非常に寂しい。その半面、医学生なのに医学に関し、何も教わることの無い空虚な時期でもありました。全人的な素養、人格を形成するには、やはり自由の中で選択の余地のあることが一番と思います。」

(4)「教官の熱意・情熱が、学生の意欲に敏感に反映すると思う。マンネリの講義、ノートを読みあげるだけの授業がみうけられるが、残念に思う。教養課程教官の研究・講義等の待遇を改善するとともに、人事の停滞を排すべきではないか？」

(5)「小生が受けた大学での教養課程は、いずれも質的にはまったく役に立たず、またいいかげんなものであった。それは受講する学生もまったく興味はないが、必要単位だから受講した、といった態度であり、また教官も教養課程ではまったく一流の人はおらず、また実社会とも遠く隔たれた事ばかりであった。現在ではNHKのシリーズや、数々の文庫本(たとえば岩波新書)等で、簡単にかつ生き生きとした新しい知識を豊富に得ることが出来る。それに比べ、大学での一般教養は意味がなくなっているとさえいえる。外国語も本当の外人による実際の訓練がなければ、一般教養の外国語も意味が少ない。教養部での語学(特に英語)は、集中して短期間でやってほしかった。2年は長すぎる。保健体育はタバコ、酒、公害、薬害、性教育、医療問題等の、現在の社会生活を送る上で必要な事を教える様にして欲しい。またスポーツは一生楽しむものという考え方で、社会人との交流の上で、実技指導も変化に富んだ選択が出来

るものにして欲しい。」

(6)「これまでの教養課程は知識が主体であり、表面的で人生の深みに対する洞察力、存在に対する確かな手ごたえというものを教えてくれるものではなく、したがって学生も面白みを余り感ぜず、単位をとるための教養課程であったと思う。しかし、それでもなお、無いよりはましでした。でも、もっと教養課程を充実したものにしなければ、教育も専門的知識、思考力だけで生きて行こうとせずに、謙虚に洞察力を学ぼうとしないといけない。」

(7) 薬 学 部

(1)「教養課程で受けた授業は、ほとんど教育たちの自己満足的な内容で、つまらなく役にも立たないものが多かった。要求単位外の全学セミナーのようなものの方が、よほど魅力的であった。教養課程の授業も、もっと学生に対して積極的で、魅力的で役に立ち、社会とつながりを持つものであってほしい。」

(2)「現在の私にとっては、教養課程で受けた教育はまったく役に立っていないと思われる。大学4年間における教養課程は、1年間程度でよいのではないと思われる。それ以上の教養課程は、まったくムダな浪費にすぎないのではなかろうか。」

(3)「自分が大学に入学した頃は、何に対しても問題意識がなさすぎて、今にして思うと残念です。今からまた大学生になるとしたら、いろんなことを、単位をとるためだけでなく、自分の身にとり汲んでいけるだろうに、と残念に思います。ほとんどの大学生は社会に出たことがないので、私のように学生時代を過ごしてしまうのも、仕方がないことかも知れませんが、学生時代にもっと教師をはじめ、いろんな人との出会いにより、社会や人生を垣間見ていたらと思います。学生数が多いので特に教養課程ではマス教育になってしまいましたが、もっと小グループのセミナーなども行なえるようなシステムを取り入れることができれば理想的なのではないかと思います。」

(8) 工 学 部

(1)「外国語教育の中での会話技術のため、積極的に会話演習を取り入れるべきである。小生も仕事の関係上、海外と接触する機会が多いが、文章講読はますます満足している一方で、会話力(ヒアリング、スピーキング)の非力さを痛切に感じています。」

(2)「専門教育に期待して入学した学生に、“おあずけ”を食わせるような教養課程のあり方には、在学当時から疑問を持っていた。一般教育については、関心や必要があれば、十分に手に入る情報が世間に満ちているし、外国語や保健体育(理論については一般教育と同じで無意味と思う)は、専門課程の中の一部に組入れることで、十分にやっていけると思う。私は教養課程教育について必要性を全然感じないが、在学当時の共通経験を文科系学生と同時に持てたことが、

唯一有意義であり、友人を得る機会になりえたことを喜ぶ。」

(3)「一般教育及び外国語教育はやはり必要とは思いますが、専門教育を含め、より効率的な教育の方法が望まれよう。一般教育は専門外の分野への学問としての興味、関心を持つことができた、という意味で有意義であったし、ぜひ必要だと思う。一番ためになった講義は、先生自らの言葉で先生自らの意見を言われた講義です。その中に実際のデータというものがあれば、もう最高に楽しく役に立ったと記憶しております。」

(4)「一般教育は、大学卒業後の人生に対する何らかの支えとなるものの紹介となる。質は下げたとしても浅く、広く残すべきである。専門教育的な内容は、量より質へ転換すべきである。実社会に出て役に立つものは、学生時代質的に相当のレベルのものでないと全く用をなさない。専門教育は量より質へ。一般教育は質より量へ。これが私の意見です。」

(5)「教養課程では大勢の受講者のシステムになりやすく、自然、高校教育の延長となる。大学での教育は自主的な探求を重んずべきである。教養課程の中にも一般教育、外国語教育を補充するゼミ形式があってもよいと思う。」

(6)「教養課程の内容は、全く専門教育に関しない一般教養と、専門教育の基礎となる講義——例えば理系では外国語は勿論、数学、物理、化学等——とに分けられると思う。異なった性格の講義を、現在のように両者とも同じようなシステムにするのはおかしい。前者は専門外知識の興味を深めるため、後者は準専門教育としてシステムを変える必要があると思う。」

(9) 農 学 部

(1)「公務員として就職しようとするのであれば、絶対、一般教育を無視できない。専門的なものなどよりも、いかに幅広く学ぶかが問題である。事実、一度就職浪人を経験し、再び試験に挑戦し合格した私にとっては、そのことは最大の要素である。逆に、専門的なことは職業的に何とかできると思われる。大学で学んだことなど、現実的に即生させるものなどないと思った方がよい位である。職業に就いてから、専門的に勉強するものが多いせいか、大学ではその概論位でむしろ良いような気がする。」

外国語には非常に興味もあったし、大学でもそれに費やした時間はかなり多かったが、余暇に楽しむ、又は趣味的に楽しむ分には今でもかなり役立っている。」

(2)「一般教育というよりも、各教官が自分の専門の狭い知識を出すだけの講義も多く、大学として期待したアカデミックな雰囲気とは、ほど遠かったと記憶している。教養課程のおもしろくないのは、内容だけでなく、教官の人間性にも深い関係があるようにも思われる。」

(3)「一般教育において、社会人として世の中を見る目と、考え方を養うことができた。高校教

育では、教師の質から考えて無理であるように思う。また、外国語教育は無理に第二外国語まで履修する必要があるように思う。」

(4)「英会話の履修機会が少なすぎる。希望が多くくじ引きであった。外人講師の導入をもっと積極的に考えてほしい。体育実技は、2年間連続して一種目を選択できるようにするべきである。」

(5)「教養課程を学んでから、専門課程を決められるような方式が望ましい。教養課程でも、実地研修的なものを取り入れたらよいのではないかと。また一定のレベル以上になるよう集中講義等も望まれる。必修的なものを少なくし、より個人の選択にまかせる方向が良いと思う。」

(6)「大学は社会の要求に応えるように努力はすべきだと思うが、大学教育が多様で高度な実社会に即戦力として活かされるのは難しいし、その必要もないと思われる。複雑、多様な社会に対応できる基礎的能力を高めておけば、社会に入ってから教育で活かされてくると思う。」

(7)「学問は大学で完成されるものではないので、あくまで大学とは、教育機関の1ステップである。ただ、重要な1ステップではあるから、いたずらに制度だけいじるのではなく、内容を大学に自主性をもたせて自主的にやらせたらどうか？仏つくって魂入れずではダメである。大学にしても国立大学協会に全て任せていたのではダメではないのか。」

(10) 文理学部

(1)「教養課程をまじめに受ける気がしない理由――やっと受験を終えてホッとしている時に、高校授業の延長のような講義を聞く気がしない。教養課程の教官が自分の専門分野のみをいかいつまんで教えているだけで、聞く方からすると、深くつまこんだ専門知識の一部だけを切り売りされたようで興味がわからない。」

(11) 歯学部

(1)「私は歯学部でしたが、教養課程は無意味に近いもののように感じられました。まず、一貫した教育体制というものがなく、むしろ高校時代身につけた英語および数学の能力の低下という状態でした。そして2年後の専門課程では、まさに詰めこみ教育で余裕というものが全くありませんでした。難しい問題かもしれませんが、教養課程というものは、高校から専門への移行をスムーズにするようもっと体制をしっかりとしたもの、特に外国語教育の充実が必要であると感じました。」

(2)「一般にカリキュラムにおいて、文系は理系よりも軽すぎる様に思える。4年という修業年限は、理系の学生にとっては適度であると思われるが、文系の学生には長すぎる様に思われる。もし現行の修業年限を維持しようとするなら、文系の一般教育の中に自然分野など理系的要素

を、必須科目として多少取り入れるなら、文系の学生の視野を広げることになり、現在、直接には役に立たなくても、間接的には大きな効果が得られるものと信じる。」

(3)「教養課程としての制度が存在する以上、専門課程について、あまりこだわる必要はないのではないか。専門に関連する教育だけを行なうなら、専修学校で十分である。教養課程を履修する年代は、受験勉強をしてきたものにとっては、知識欲にうえている時である。教官により、厳選された教材が講義されるならば、幅広い視野を養うことになる。」

現代社会は、細分化と統合化の両者が、進行しつつある。細分化の方向へは、今の日本の専門教育で十分であろうが、統合化という能力は一朝一夕に身につくものではなかろう。そのような能力は、学生個人個人に幅広い方向に目を向けさせるようオリエンテーリングすることにより、可能ではなかろうか。ここに教養課程のもつ重要な責任があり、決して手抜きすべきものではないと思う。」

(4)「教養部時代、すぐに専門教育を行なうべきであるという考えを持っていた学友が、40人中1人いた。現在私のスポーツ、観劇、読書等余暇のすごし方は教養部時代のものが礎となっていると思う。」

(12) 人文学部

(1)「今では教養として何らか役に立ったが、文類、理類というように選抜している大学でなければ、学部の変更もできず、入学の際、勉強しようとした専門が2年後に延ばされるのは、やる気を失くし、五月病を生む原因になる。」

(2)「充分満足している。大学4年間は人生の中でも最も充実していた。」

(3)「外国語教育においては講読中心であり、その点、日常会話的な教育を受けられれば、実社会においても役に立つのではないかとと思われる。教養課程において、専門課程の基礎と思われる科目が少なかったように思え、もう少し多く学べればと思う。」

(4)「教養課程では学生だけでなく、先生方も授業にはあまり熱が入らず、期待感も薄かったように見受けられました。学生側も単位さえ取ればいいという考えでは、限られた4年間の時間をもったいなく、やはりもっと専門に結びついた科目を選択できるように、改革を希望します。」

私は今高校の教師をしておりますが、大学に行かなければ、一般教養が身につかないような高校教育ではいけないと思っておりますし、大学を出たならば、それなりの専門を生かした仕事につける位の知識、技術を身につけることのできる4年間であって欲しいと思います。」

(13) 教養学部

(1)「本人に学ぶ気、やる気がなければ、4年という短い間に多くの学問を修得するのは、無理

と思う。大学卒業後5年もたつと、大学で学んだことは全て覚えてられないが、学び方、姿勢はこれからも役に立つと思う。」

(2)「語学教育：第一語学、第二語学ともに、文学部出身の教官がきわめて多く、テキストもいきおい文学作品にかたよりがちである。学生は、法、経、商、工、理、医等を専攻することを予定しており、多くの時間を費やす外国語学習（ほとんどは予習のための辞書ひき）のテキストが文学作品ばかりであるのは、学習意欲をはなはだしく減退させるものである。語学の教師は、文学部出身者の他に理、工、法、経等の出身者であってよく、またそうあるべきである。現在、理、工、法等の教官で、教養課程において語学を教える準備のある人の数はきわめて少ないであろうが、その能力をもつ人は少なくないのではないか。かかる教官に教養課程の語学教育に御協力いただき、他方、東大教養学科のように専門教育の中に外国語教育を大幅にとり入れた学科・学部をふやし、将来の外国語教育に文学にかたよらぬテキストを使用しうる教官の養成をはかることが望まれる。」

**VI むすびに代えて――教養課程の
今後のあり方に関する問題点――**

今日までに、一般教育に関する報告書並びに要望書等は、国立大学協会、全国国立大学教養部長会議、国立大学一般教育担当部局協議会、中央教育審議会、各大学単位及び大学基準協会をはじめとする社会的協会等から多数提出されており、問題点は一応出尽したとみるべきであろう。さらに、昭和59年、本委員会が13国立大学の卒業生を対象にして行ったアンケート調査結果、最近報告された国立大学協会第1常置委員会(大学のあり方の検討小委員会)の討議内容及び臨時教育審議会から公表された提案要旨等をも加え、逐条審議を重ねてきた。その結果、本委員会としては教養課程のあり方の問題点を整理した上で、次のように意見の一致を見た。

一般教育の理念を修正すべきであるという意見は多少認められたが、教育的反対論はほとんどなかった。したがって、一般教育不要論は極めて少ないと考えるべきであろう。反対論の多くは教養課程の教育組織と授業内容に限られている。

教養課程における教育内容を教養、共通、専門基礎に大別する提案もあるが、教養課程は非専門教育分野である一般教育を教授する課程であるから、上記の教養と共通(外国語教育、保健体育を含む)に相当する。したがって、専門基礎は特定の専門教育に入るための基礎的知識を与える教育であり、本来は専門教育課程で実施することが望ましい。しかし、大学の性格や学問領域等によっては教養課程における専門基礎教育も必要となろう。問題は一般教育と専門基礎を混同して受けとられているところにある。この点は、大学の実情に応じて早急に見なおし、改善する必要がある。

現在行われている教育体系としては、完全横割型、不完全横割型、くさび型、縦割型等があるが、どの型をとるにしても、一般教育と専門教育を大学全体の教育体系の一部分としてとらえ、緊密、かつ有機的連関を持たせて運用されるべきであろう。現在、教養課程で開講されている授業科目には、低学年で履修させるべきもの、むしろ高学年で履修させるべきもの、年次に関係なく履修させてもよいもの等があるはずである。教養課程は各大学の特性に応じた教育体系のもとで、理念上、理想としては四年一貫性の体系が望ましいと考えられる。

教育組織としては、教養部という独立組織で実施しているもの、一つの学部に属し、専門教育と並行して行っているもの、複数学部または全学的組織で実施しているもの等があ

る。これらの組織上の違いは大学の規模、歴史的事情、地理的条件等による場合が多い。いずれにしても、一般教育の理念にそった基本的内容が守られている限り、各大学に最も適合した組織で運用されるべきである。各大学が一般教育のやり方を自由に工夫し、充実するためには、まずその責任体制を確立することが肝要である。

非専門教育と専門教育が両輪として機能することによって、大学教育が成立していくのであるから、一般教育の充実はその大学の発展に大きく寄与しうることは当然である。したがって、一般教育を理念通り実施するためには、まず担当者は専門研究者であると同時に、高い識見と幅広い教養を身につけた教育者であることが要求される。そのためには、教養課程における研究と教育に必要な充分な施設、経費、教官定員が必要である。さらに、質的向上及び研究、教育条件の改善のための一つの方策として、すでに実行され、または計画されているような教養学部ないし教養科学部、総合科学部、人文社会科学部、広域科学部、人間科学部等への学部化や、総合的立場からの学問研究を究明する機関として、大学院を設置することも、今後検討されるべきであろう。

現在、大学に入学してくる学生の意識の変化に対応して、大学がどのような学生を受け入れるかについては、国立大学協会が抱えている根幹の問題でもある。

入学した学生に対して、一般教育と専門教育の履修を効果的に機能させるためには、教授法、授業形態のあり方等について、両者間の密接な連動による工夫・改善が必要である。例えば、コア方式、コース別方式等のカリキュラム編成や実験、実習及び演習を中心とした少人数教育、ゼミナール形式等の授業形態を積極的に採用するとともに、併せて学内外の教官交流を推進する必要がある。

さらに、現代の社会的要求及び社会的価値観の多様化、とくに国際化と生涯教育の進展に対応するため、一般教育のもつ意義を再認識し、教育効果を充分発揮し得る方策を早急に検討すべきであろう。また、教養教育の理念を幅広く解釈し、授業科目、授業形態、教育内容をもっと自由に選択・実施できるよう配慮することも必要である。したがって、単位の認定に関しても、大学開放講座、放送大学及び他大学との協力講座など、今後思い切った連繫を推進することが望まれる。

教養課程に関する特別委員会

(昭和61年2月現在)

委員長	須甲 鉄也	埼玉大学長
委員	原田 三郎	岩手大学長
"	久佐 守	山形大学長
"	加藤 一夫	静岡大学長
"	吉利 和	浜松医科大学長
"	川端 博	京都教育大学長
"	栗屋 和彦	山口大学長
"	田中 健蔵	九州大学長
"	松山 公一	熊本大学長
専門委員	浅野 博	筑波大学教授
"	永野 巖	埼玉大学教授
"	柘植 利之	名古屋大学教授
"	緒方 道彦	九州大学教授
"	重岡 和信	熊本大学教授
"	伊理 正夫	東京大学教授
"	坂井 昭宏	千葉大学助教授

○前委員等 (昭和59年1月以降)

小 西 俊 造 前 山 口 大 学 長(昭和59年2月まで)
幡 克 美 前 香 川 大 学 長(昭和60年2月まで)
久 保 彰 治 前 東 京 大 学 教 授(昭和60年3月まで)
猪 初 男 元 新 潟 大 学 長(昭和60年10月まで)
天 野 慶 之 前 東 京 水 産 大 学 長(昭和60年11月まで)